

公爵嬢マリイヤは、部室を彼方此方と歩いて、ズロンに面して、立ち止まつた。

「ズロヌウシカ、公爵嬢は、毎年ヴィアズマの市場から、公爵嬢には彼の附物だと思はれるやうになつて居た何時も同なじ生姜餅を買つて来て、同なじ笑顔で公爵嬢にそれを捧げたそのズロンは、無論公爵嬢の爲めには忠實な味方だと思つて、斯う云つて「ズロヌウシカ、今、吾々の不幸の後……」と、公爵嬢は云ひ始めた、が、進むことが能き無くなつて、止まつた。

「吾々は皆神の御手のうちにあるのでござります」と、ズロンは、嘆息して、云つた。  
二人とも黙つて居た。

「ズロヌウシカ、アルバアティイチは何處かへ行つて居る、私は誰も相談する者が無いのだよ。私は去つてしまふことが能き無いといふのが、衆皆の云ふ通り、眞實なのかい？」

「貴女が去つておしまひになれんと申すことがござりませうかい、閣下。貴女はお發ちになれます」と、ズロンは云つた。

「敵からの危険があるといふのだがね。私の善い友のお前、私は何にも爲ることが能き無いの、私はさういふことは何にも知ら無いの、私は頼みになるものを誰も持つて居無いの。今夜なり、明日の朝早くなり、必然發たうと思つて居るのだがね」

ズロンは、何とも云は無かつた。彼は自分の眉の下から公爵嬢マリイヤを見あげた。

「馬が一匹も無いのでござります」と、彼は云つた。「私はアルバアティイチに最早左様申したのでござります」

「それは、一體何うしたことの？」と、公爵嬢は云つた。

「皆神様の御意でござります」と、ズロンは云つた。「或る馬は軍隊用に持つて行かれてしまひますし、或るものは死にましてござります、何うも悪い年でござりましてな。吾々が饑ゑて死にさへ致しませねば宜しいと申すので、馬の飼料どころではござりません。今日でこれ三日と申すもの、皆麵麩の一片も無いのでござります。何一つ無いのでござります、奴等は最後の片まで掠奪されてしまつたのでござりますわい」

公爵嬢マリイヤは、ズロンが自分に云つたことを非常に注意深く聞いて居た。  
「農夫どもが掠奪されたとお云ひのかい？ 麵麩が寸毫も無いのかい？」と、公爵嬢は尋いた。  
「奴等は饑ゑて死にかゝつて居ります」と、ズロンは云つた。「馬や荷馬車のことを申したとて、無効でござります」

「けども、何故お前それを私に云つて來無かつたのかい、ズロヌウシカ？ 助けてやることが能き無いのかい？ 私に能きることなら何でも爲るわ……」

公爵嬢マリイヤに取つては、自分の心がそれ程の哀愁で溢れて居る其様な時に、金持と貧乏人とがあるなどいふことや、金持が貧乏人を助けることが能き無いなどいふことがあるのを、考へると、不思議で堪ら無かつた。公爵嬢は、漠然とながら、「領主の穀物」の貯積があること、それが、時には農夫たちに與へられたことを知つて居た。公爵嬢は又、父親にしても兄にしても、困つて居る農夫等に物を與へることを否みは爲無いだらうといふことを知つて居た、公爵嬢は唯だそれを配分することの命令の言語に何か間違を爲はしまいかと慮れたのみであつた。公爵嬢は、心配無く、自分の哀愁を忘れることの能きやうな何事かを爲る辭柄を得たのを喜んだ。で、農夫等の窮乏の程度や、ボグチャアロヴァに、「領主の穀物」があるか何うかといふことを、ズロヌウシカに尋き始めた。



「兄様の小麦の貯蔵があるだらうと思ふのだがね？」と、公爵嬢は尋いた。  
 「小麦はそつくり致してござります」と、ヅロンは得意気に云ひ切つた。「公爵から賣れといふ命令が出ませんでござりましたから」

「農夫たちにそれをお遣り、衆皆が要るだけ悉皆遣つておしまひ、私兄様に代つてお前に許すのだからね」と、公爵嬢マリイヤは云つた。

ヅロンは深い溜息を吐いたのみで、何とも返答し無かつた。

「お前、彼で足りるのならば、悉皆に穀物を分けてお遣り。残らず分けてお遣り。私兄様に代つてお前に言ひ付けるわ、それで、吾々の物は衆皆の物なのだ、悉皆に云つて聞かしてお呉れ。私どもは、衆皆の爲めには、何様な物だつて惜みはし無いのだよ。悉皆にさう云つてお呉れ」

ヅロンは、公爵嬢がさう云つて居る間、初から終まで、凝乎と公爵嬢の顔を見詰めて居た。

「私を免職なすつてくださりまし、お嬢様、何卒お願いでござります、私から鍵を取り上げるやうに、人々にお言ひ付けくださりまし」と、彼は云つた。「私は二十三年勤めまして、何一つ失策も致しませぬでござります、私を免職なすつてくださりまし、何卒お願いでござりまする」

公爵嬢マリイヤは、ヅロンが何うして貰ひ度いといふ積りなのか、何故彼が免職して呉れといふのか、一向解ら無かつた。公爵嬢は、自分は決してヅロンの忠實を疑は無いこと、彼に對しても、農夫等に對しても、罷さるだけのことは餘まさずする氣で居るといふことを、答へた。

(十一)

一時間経つてから、ヅウニヤシヤが、ヅロンが來、そして、總ての農夫等が、公爵嬢の命令で穀倉に集まつて、彼等の女主人と談話を爲度いと云つて居るといふことを、知らせる爲めに、公爵嬢の部室へ入つて來た。

「でも、私衆皆を喚びに遣りは爲無いのだが」と、公爵嬢マリイヤは云つた。「私は唯だ穀物を衆皆にお遣りとヅロンに云ひつけただけなのよ」

「何卒、閣下、是非歸すやうにお云ひつけなさいまし、衆皆にお逢ひなつては不好ませんよ。皆な策略なれば、吾々は發てるんですから……ですから、何卒……」

「何うして策略なの？」と、公爵嬢マリイヤは驚いて尋いた。

「え、私には衆皆解つてるんでございますよ、是非私の申し上げるやうになさいましよ、何卒、お願ですから。乳母にもお尋きなすつてご覧なさいまし。貴女のご命令で他所へ行くといふことを、悉皆は承知し無いといふのでございます」

「お前何か聞き間違へたんだらう。いえね、私は、何處へも行けと衆皆に命令したんぢやア無いよ……」  
 と、公爵嬢マリイヤは云つた。「ヅロヌウシカを喚んでお呉れ」

ヅロンは、入つて來て、ヅウニヤシヤの言語が眞實だと確言した、農夫等は公爵嬢の命令で來たといふのであつた。

「でも、私は決して衆皆を喚びに遣りはし無かつたわ」と、公爵嬢は云つた。「お前私の言語を間違つて傳へたに違ひ無いのだよ。私は唯だ穀物を衆皆にお遣りとお前に云つただけぢやア無いか」



「若し、ご命令でござりますなら、奴等は歸りますでござりませう」と、彼は云つた。

「いゝえ、いゝえ、私行つて逢ひますよ」と、公爵嬢マリイヤは云つた。

「衆皆は多分、私が衆皆を此所へ止めて置いて、佛蘭西人の慈悲に衆皆を委ねて了まつて置いて、私自身は逃げて了まふ爲めに、穀物を遣らうといふのだとても想像して居るのだらう」と公爵嬢マリイヤは思つた。「私は、莫斯科の領地で毎月の食料もやれば、家も與へてやるわ。アンドレーだつたらば、衆皆に向つても十分なことを必然爲るだらうと思ふわ」と、公爵嬢は、穀倉の近傍の牧場で待つて居る群集の方へと、黄昏の裡へ出て行きながら、思つたのであつた。

群集は、動揺し、ごちや／＼と塊まつて、急いで帽子を脱つた。公爵嬢マリイヤは、眼を下げ、足は長上衣の裾を踏みながら、彼等の傍へすつと寄つた。年取つたのや、若いものや、實に多數の種々な眼が自分の上に見据られ、實に多數の種々な顔があつたので、公爵嬢マリイヤには、その一つをも見ることが能き無かつた程であつた、そして、衆皆に一遍に話しかけ無ければならぬと思つたので、何うやりだして宜いのか、分から無かつた。が、再、自分は父親と兄の代表者なのだといふ感が、公爵嬢に力を與へた、で、公爵嬢は大膽に談話を始めた。

「お前がたが来てくだすつたのを、私は大變嬉しく思ひます」と、公爵嬢は、眼を擧げずにそして、自分の心臓の急な烈しい鼓動を感じながら、始めた。「ゾロウシカの話では、お前たちは戦争の爲めに破産したと

いふのです。それは吾々の共通な困難です、それで、私は、お前たちを助ける爲めには何様な物でも惜みはしません。私自身、此所を去らうとして居ます、何故だと云へば、此所は危険だから……敵が近いんだから……何故だといへば……私は、お前がたに、有らゆる物をあげます、で、お前がたは、有らゆる物を取つてお呉れ、お前たちが缺乏に苦ま無いやうに、私どもの穀物を悉皆取つてお呉れ。けれども、私がお前たちを此所に居残らせる爲めに穀物をお前たちにあけるのだといふ人があるのだつたら、それは虚偽なんです。その反對で、私は、お前たちの持物と一緒に、お前たちが、私どもの莫斯科の領地へ来て呉れることを頼むのです、で、私は、其所ではお前たちに不自由をさせ無いやうに爲ようし、又、必然さうすることを約束します。お前たちに、家もあげれば、麵麩もあげます」

公爵嬢は止まつた。群集からは、溜息の外何にも聞え無かつた。

「私は、これを私自身で爲るのではありません」と、公爵嬢は言葉を繼いだ。「私は、これを、お前たちに對して善い主人であつた亡くなつた私の父上様や、兄様や、その子に代つて爲るのです」

公爵嬢は再止まつた。誰も沈黙を破る者が無かつた。

「吾々は、誰も同なじの困難を持つて居ます、で、吾々は同なじにそれを分けて共に苦勞を爲ませう。私の物は悉皆お前たちの物です」と、公爵嬢は、自分の前にある幾つかの顔を見上げながら、云つた。何の眼も残らず、何ういふ意味だか公爵嬢には測り得られ無い何れも同なじ表情で、公爵嬢を見詰めて居た。それは、好奇心であつたか、信服であつたか、感謝であつたか、それとも、危慮であつたか、疑念であつたか、何の顔の表情も皆同なじであつた。

「親切は眞に有りがたうござりまする、が、唯だご主人の穀物を取るなんぞといふことは私どもの爲へ



きことではござりません」と、背後から一人の聲が云つた。

「でも、何故なの？」と、公爵嬢は云つた。誰も答へる者が無かつた、そして、群集を見上げた公爵嬢マリイアは、今は、誰の眼も、自分の眼に出會ふと直ぐ下けられることに、氣が付いた。

「何故お前たちはさう爲度く無いの？」と、公爵嬢は再尋いた。誰も答へ無かつた。

公爵嬢マリイアは、沈黙の爲めに壓し着けられるやうに感じた、公爵嬢は誰か一人の眼を捉へようと爲した。「何故お前たちは何とも云は無いのかい？」と、公爵嬢は、腕を杖に凭せて、公爵嬢の側に立つて居た極く年取つた男に話しかけて、云つた。「もつと何か要ると思ふのなら、さう云つてお呉れ。私は、何でも爲てあけるから」と、公爵嬢は、その老人の眼を捉へながら、云つた。が、公爵嬢がさう爲たのを怒つたかのやうに、彼は、頭を垂けた、そして、云つた――

「何うして承知できるものですかい？。吾々は貴女の穀物はいりませんのです」

「何故吾々が有らゆる物を捨て無ければなら無いんだい？。吾々は同意し無い」――「吾々はそれには同意でき無い」――「それは、吾々が納得してからのことでは無い」――「吾々はお氣の毒だと思ふ、だが、さうするのは嫌だ」――「貴女は勝手に去つておしまひなさい、お一人で」と、群集の裡の八方から反對の聲が起つた。で、再、群集のなかの總ての顔が、何れも同なじ表情を帯びた、が、此度は、確に、好奇心とか、感謝とかの表情では無くして、憤激した決心の表情であつた。

「でも、それは、私の心持を取違へて居るのです」と、公爵嬢は愁はしけな笑顔で云つた。「何故お前たちは此所から動き度く無いのかい？。私は、お前たちの住へるやうにし、食べられるやうにしてあげようと約

束するのですよ。で、此所に居れば、敵がお前たちを掠奪する……」が、公爵嬢の聲は、群集の聲々の裡へ漏らされて了まつた。

「吾々は嫌なんだ、敵が掠奪すればするで、寸毫も構は無えんだ。吾々は、貴女の穀物は貰は無え、吾々は同意し無えんだい」

公爵嬢マリイアは、再、群集の裡の誰か知らの眼を捉へようと骨折つた、が、誰一人自分を見て居る者が無かつた。彼等の眼は、確に、公爵嬢の眼を避けて居た。公爵嬢は、奇異に、そして、照れた心持がした。

「眞個だ、彼の女は俺たちを欺しちまはうてえんだ……目く欺しやアがらア……奴隷なりに隨いて來いてえんだ……貴様たちの家を破して、奴隷なりに來いかね。目えなア。私はお前たちに穀物をあけますつて、云やアがらア」と、聲々が群集の裡で云つて居た。

公爵嬢マリイアは、群集の圈の外へ動いた、そして、悄氣た顔で家へ入つた。次の日自分の發つ爲めの馬を揃へて置くやうにといふ命令を、ゾロンにまで繰返して、公爵嬢は自分の部室へ行つて、其所で一人で、自分自身の物思に耽つて居た。

(十二)

長い間、公爵嬢マリイアは、自分の部室の開いた窓のところ坐つて、村から漂つて來る農夫等の聲々の音を聞いて居た、が、公爵嬢は彼等のことを思つては居無かつた。公爵嬢は、何れ程長く彼等のことを考へても、彼等を理解することの能き無いのを感じた。公爵嬢はその間始終唯つた一つのことしか考へ無かつた――それは、今現在の事に就ての心配の爲めに中斷されて、最早過去に屬することのやうに見えだした父親



を失つた哀愁のことであつた。今は、公爵嬢は、憶ひだし、泣き、祈ることが能きるのであつた。日が沈ると共に、風が無くなつた。夜は静で、爽やかであつた。夜半には、村での聲々が止み始めた、雄鶏が鳴いた、満月が菩提樹の彼方から昇つた、心持の好い、白い、露を含んだ霧が出た、そして、静寂が村と家の上に支配した。

極く近い過去——父親の病氣や、その最後——の繪が、次ぎくくに、公爵嬢の想像の前へ現て來た。で、悲し氣な喜悅で、公爵嬢は、今はさういふ心象の上に自分の心を休ませたが、唯だ、最後の一つの光景は、慄然として、それを避けた、夜のその静な神秘的な時間には、想像の裡ですら、そのことを思ひ廻すだけの力が自分には到底無いと感じたからであつた。で、さういふ心象は、公爵嬢の前へ非常に現然と、非常に詳細に現て來たので、公爵嬢には、それが、或時は今現在のことに見え、或時は過去のことに見え、又或時は未來のことに見えた位であつた。

公爵嬢は、父親が初めて病氣で倒れて、荒涼丘の園庭から家へ抱き込まれて來る時や、彼が、白い肩をピリ／＼させ、公爵嬢をばオツ／＼と不安さうに見て、何か口の裡で云つた時の光景を今現然と眼前に見るのであつた。

「彼の時でさへ、父上様は、お亡くなりになるその日に私に仰しやつたことを、私に仰しやらうとなすつたんだわねえ」と、公爵嬢は思つた。「父上様は、彼の時仰しやつた通りであることを、何時も思つて居らしたんだわねえ」

それから、公爵嬢は、父親が病氣になる前に何か心配事が起るだらうといふ豫覺で、自分が父親の心に背いて父親の傍に居た荒涼丘の夜のことを詳細に憶ひ起した。その時は、公爵嬢は眠無かつた、そして、夜

になると、足を爪立てゝ忍んで歩いて、父親がその夜を送つて居た温室の部室の戸へ行つて、父親の聲を伺ひ聞いたのであつた。彼は、疲れた、五月蠅さうな聲でティフォンに話を爲て居た。彼は、クリミヤのことや、暖かい夜のことや、皇后のことを、何か云つて居た。確かに、彼は、誰かしらに話を爲度かつたらしかつた。

「それなのに、何故私を喚んでくださら無かつたのだらう？。何故私をティフォンの代りに彼所に居させてくださら無かつたのだらう？」と、公爵嬢マリヤはその當時思つたのだが、それを、再こゝでも思つたのであつた。

「最早父上様は、ご自分の心の裡にあつた總てのことを誰にもお話しなさることは決して無い。父上様が云ひ度いと思つていらしたことを悉皆私に仰しやつて、ティフォンで無く、私がそれを聞いて、悉皆解つて了まつたのであつたかも知れ無かつた時は、最早決して又と來ることは無い。何故私は彼の時父上様の部室へ入つて行か無かつたのだらうね？」と、公爵嬢は思つた。「さうしたら、お亡くなりの方に私に仰しやつたことを、彼の時仰しやつたかも知れ無かつたのだわ。彼の時でも、ティフォンに話かけながら、私のことを二度お尋きなすつたわ。私を見度いと思つて居らしたのに、その私は戸一枚此方に立つて居ながら、入つて行か無かつたのだわ。父上様は、悲しさうに、退屈さうにティフォンに話していらして、ティフォンには、父上様のお心持は寸毫も解ら無かつたのだわ。父上様は、リザのことを、生きて居る人のやうに、云つて居らしたわ——父上様は、リザが、亡くなつたのを忘れて了まつていらしたのだわ、で、ティフォンが、リザが亡くなつたことを、申しあげると、父上様は「痴人」と、聲高に仰しやつたのだつけ。父上様は甚くお心細かつたのだわ。私は、父上様が寢床の上へ唸りながら、お臥りなすつて、「あゝッ」と、大きい聲で仰しやつ



たのを、戸越しに聞いたわ。何故私彼の時入つて行か無かつたのだらうね？。父上様が私の困るやうなことを何で爲さるのであつたらう？。入つたが爲めに私に何の損があるものであつたらう？。で、さう爲たのだつたら、彼の時父上様はお心が安まつて、彼の言語をその時私に仰しやつたかも知れ無いわ。で、公爵嬢マリイは、父親が死ぬる日に自分に云つたその優しい言語を聲高く云つた。「可愛い奴よ」と、公爵嬢マリイは、その言語を繰り返した、そして、歎息あけて泣きだした、で、それで幾らか心が安められた。

公爵嬢は今父親の顔を眼の前に現然と見ることができた。それは、公爵嬢が憶ひだし得る往昔からずっと知つて居、そして、何時も離れてのみ見て居た顔では無かつた、それは、公爵嬢が、彼の云つて居たことを聞かうとして、その唇の傍へ耳を持つて行つて、生れて始めて、皺だらけのその顔を近々と見たその最後の日の、父親の、弱い、オゾ／＼した顔であつたのだ。

「可愛い奴よ」と、公爵嬢は繰り返した。

「彼の言語を仰しやつた時には、何を思つて居らしたのだらうか知ら？。今何を思つて居らつしやるのだらうか知ら？」といふのが、公爵嬢の心に不意に起つて来た疑問であつた、で、それに對する答として、公爵嬢は、棺の中の、白い手巾で縛つた顔の面で見えた表情のある父親の顔を眼の前に見た。で、自分が父親に觸つて、それは父親では無くして、神秘的な恐ろしい何物かであると感した刹那に、公爵嬢を壓伏した恐怖の念が、今再公爵嬢の心へ襲つて来た。公爵嬢は何か他のことを思はうと骨折つた、祈らうと爲た、が、何にもすることが能き無かつた。眼を見張つて、公爵嬢は、月光と物の影を見たが、今にも父親の顔が見えて来るやうな氣が爲、そして、家の内部と無く外部と無く一體に行き渡つて居た沈靜に魅せられて了まつたかのやうな氣が爲たのであつた。

「ヅウニヤシヤ」と、公爵嬢は唾いた。「ヅウニヤシヤ」と、公爵嬢は、物狂しく叫んだ、沈靜から自分を振りもぎつて、女中部室の方へと駆け出したが、公爵嬢の方へと駆けて来る年取つた乳母や女中たちに途中で迎へられたのであつた。

(十三)

八月の十七日にロストオフと、イリインは、佛蘭西人に捕虜になつてから直ぐ歸つたばかりのラヴルウシカと、從卒の勤務に就て居る一人の驃騎兵を伴れて、ボグチャアロヴァから十五露里のヤンコオヴァから乗り出した。彼等はイリインが買つた新馬を試すと共に、村で干草が得られるか何うか調べて見ようといふ積りであつた。

ボグチャアロヴァは、その三日以來、二つの敵對軍の間にあつて、露西亞軍の後衛と、佛蘭西の前衛が、何方からでも同様に容易に村へ達することができたのであつた、で、ロストオフは、注意深い將校が爲るやうに、是非佛蘭西軍の先を越して、村に残つて居るかも知れ無い一切の糧食を占領してしまはうといふ考慮であつた。

ロストオフもイリインも、非常な上機嫌であつた。

ボグチャアロヴァは、或る公爵の領地で、領主の館もあるのだと知つて居たので、彼等は、其所には大きい家内があつて、多分は奇麗な女中等が居るだらうなどと思つて居たのだが、それに向ふ道すがら、彼等は、ナボレオンのことをラヴルウシカに尋ね、そして、ラヴルウシカの談話で哄笑を爲た、それから、イリインの新馬を試す爲めに、競馬を始めた。



ロストオフは、自分が向つて居る村が、自分の妹の約婚者であつた公爵ボルコオンスキイその人の領地であらうとは、全然思ひ掛が無かつたのであつた。

ロストオフとイリインは、ボグチャアロヴァの前で、最後に疲れ切るまで、自分等の馬を十分に駆かせたのであつた、で、ロストオフは、イリインを追い抜いて、一番に村の街へ駆け込んだ。

「貴下は、先に出たんだから」と、イリインは、赤くなつて、云つた。

「左様さ、何時も先さ、牧場でも、此所でも」と、自分の泡だらけのドン馬を叩きながら、ロストオフが答へた。

「私の佛蘭西馬でも、閣下」と、ラヴルウシカが、自分が乗つて居た感れな荷馬車馬を指した積りで、後から云つて、「閣下に追ひ付くことは能きたんですが、唯だ閣下に面目無がらすのがお氣の毒でしたんで」

彼等は、農夫等の多数の群集が立つて居た穀倉の方へと、並足で乗つて行つた。農夫等のうちの五六人は、帽子を脱つた、他の者どもは、帽子を脱らすに、ロストオフたちを見詰めた。黧だらけの顔の、粗い髯の、二人の年取つた農夫が、居酒屋から踰越けながら、調子の無い歌を詠ひながら出て来て、微笑みながら、將校たちの方へと進んだ。

「面白い奴等だな」と、ロストオフは、笑ひながら、云つた。「おい、干草があるかい？」

「二人とも、似て居らア、幾らか……」と、イリインが云つた。

「わが夏……を……面……白く……あそ……びて……」と、嬉しさうな笑顔で、農夫が詠つた。一人の農夫が、群集の中から出て来て、ロストオフの傍へと行つた。

「お前さんがたは、何方なんだね？」と、農夫が尋いた。

「俺たちは佛蘭西人だぞ」と、イリインは、笑ひながら、答へた。「で、これがナポレオンなんだ」と、彼は、ラヴルウシカに指さして云つた。

「ぢやア、露西亞人だらうね？」と、農夫が尋ねた。

「お前さんがたは、此所で多数の軍隊を持つてるのかい？」と、今一人の背の低い農夫が、近寄りながら、尋いた。

「非常に多数だ」と、ロストオフが答へた。「お前たちは、何の爲めに此所に集まつてるのかね？」と、彼は云ひ添へた。「休日か何かかね？」

「年寄どもが、村の用で集會してるでがす」と、農夫は、ロストオフの傍を離れながら、云つた。

その途端に、公爵の家から、將校の方へと駆けて来る二人の女と、白い帽子の男とが見えて来た。

「桃色の衣服のは、俺のだけ、誰も手を出しちやア不好ぞ、宜いか」と、イリインは、自分等の方へと、ドン／＼駆けて来るゾウニヤシヤに眼を付けて、云つた。

「彼女は吾々の女になりますね」と、ラヴルウシカは、イリインに眼眊を爲て、云つた。

「何の用かね、姉さん？」と、イリインは、微笑みながら、云つた。

「公爵嬢が、貴下がたは、何といふ聯隊のお方で、お名は何と仰しやるのですか、伺つて来いと、仰しやいますんで」

「この方は、騎兵中隊長の伯爵ロストオフで、居らしつて、私は、その従僕です」

「メル……メル……メル……アルブウル……」と、酔拂の農夫は、詠つて、嬉しさうに微笑みながら、娘と話して居るイリインを見詰めて居た。アルバアティイチが、ゾウニヤシヤに續いで来た、彼は、近寄りなが



ら、帽子を脱つた。

「甚だ失禮ながら、貴下さまにお願いがござります」と、彼は、胸に手を措いて、將校の年齢の若いのに對して輕蔑の色の襲つた丁寧さで、話しながら、云つた。「私の女主人、この月の十五日に亡くなりました元帥、公爵ニコライ・アンドレーチ・ボルコンスキイの娘は、其所に居ります者どもの野卑な無智から生じました紛紜の爲めに」——アルバアティイチは、農夫等に指さして——「貴下さまにおいでくださるやうにお願い申します……お前がたは、何うか」と、アルバアティイチは、悲しげな笑顔で云つて、「少し傍へ行つて呉れ無いか、お邪魔になるのだから……」と、アルバアティイチは、馬の周圍の馬繩のやうに、彼の周圍をうろ付いて居た二人の農夫に指さした。

「やアい。……アルバアティイチ……やアい、ヤアコフ・アルバアティイチ。傑いこつちやな。え、え」  
 「何卒、ご勘辨くださいました。傑いぞ、やアい」と、農夫等は、アルバアティイチに向つて、調戲けて、微笑みながら、叫んだ。

ロストオフは、醉拂ひの農夫等を見て、微笑んだ。

「それとも、閣下はこれを面白く思召すのか存じませんが」と、ヤアコフ・アルバアティイチは、片方の手で年取つた農夫等に指さしながら、生真面目な風で云つた。

「いや、別に面白いといふのでは無いよ」と、ロストオフは云つて、傍へ動いた。「何うしたのかね」と、彼は尋ねた。

「恐縮でござりますが、閣下にお聞きを願ひ度いのでござります、農夫どもは、女主人が領地を出るのを承知いたしません、彼等は、女主人の馬車から馬を放してしまふと、申して居るのでござります、で、

今朝以來荷拵へは全然出來て居りますのに、女主人は、發つことができませんのでござります」

「左様なことがある筈は無い」と、ロストホフは叫んだ。

「全くの眞實を申しあげるのでござります」と、アルバアティイチは云つた。

ロストオフは、馬から下りて、馬を從卒に渡して、事態に就て尙詳しくアルバアティイチに尋ねながら、アルバアティイチと一緒に家へと歩いて行つた。

公爵嬢が、穀物を遣らうと云つたことや、ツロンの農夫等に會つたことが、ツロンが到頭職務の鍵を渡して了まつて、農夫等に合體して、アルバアティイチが喚びに遣つても、出て來無かつた程までに、事態を層悪くしたのであつた。公爵嬢が、出發する爲めに馬を着けるやうに命じた朝、農夫等は多數の群集を爲して穀倉へ出て來た、そして、代表者をよこして、彼等は、公爵嬢を去らせることを欲し無いといふことや、人民は、各自の家を捨て、はならぬといふ公示が出て居るといふことや、公爵嬢が何うしても發つといふのなら、彼等は公爵嬢の馬を解き放してしまふといふことを、云はせた。アルバアティイチは、彼等を諭しに不出て行つた、彼等は、それに答へて、(カルブといふ男が、重な辯者になつて、ツロンは群集の裡に引込んで居たのだが)公爵嬢を發たすことは能き無い、それを禁ずる公示が出て居るのだから、けれども、公爵嬢にして止まつて居さへすれば、彼等は、これまで通り何事にも公爵嬢の命に服して、善く仕へると、アルバアティイチに云つた。

ロストオフとイリインが、村の街を駆けて居た丁度その時に、アルバアティイチや、年取つた乳母や、女中の止めようとする努力を顧みずに、公爵嬢マリイヤは、馬を附けることを命じて、發たうとして居たのであつた。が、騎兵等が駆け付けて來るのを見て、馭者等は、それを佛蘭西人だと思つて、逃けて了まつた、で、



非常な嘆息が、家内の女等の裡から起つた。

「親切な旦那さま。保護者さま。旦那は神さまのお使です」と。ロストオフが立關の室を通る時に、聲々が、非常な感情を籠めて、叫んだ。

公爵嬢マリイヤは、ロストオフが案内されて入つた時には、廣室に、爲方無けに、途方にくれて、坐つて居た。公爵嬢は、彼が誰なのか、何の用で其所へ来たのか、又は、自分の身に何様なことが起りつゝ、あつたのか、寸毫も知ら無かつた。彼の露西亞人の顔を見、そして、彼の最初の言語と、姿勢で、彼が公爵嬢自身と同なじ階級の人であることを認めて、公爵嬢は、その深い、涼しい眼付で、彼を見詰め、感情で切れなくになる、震へる聲で、話し始めた。

ロストオフは、忽ち、この遭會の裡に一種のロオマンズを感じた。「悲愁の爲めに壓伏せられ、唯一人で、荒くれた、反逆の農夫等の慈悲に委ねられた、防禦力の無い娘なんだ。何といふ不思議な運命が、俺を此所へ伴れて来たんだらう」と。ロストオフは、公爵嬢の物語を聞き、公爵嬢を見て居るうちに、思つたのであつた。「それに、顔立や、表情の何といふ優しい、何といふ氣高い女だらう」と。彼は、公爵嬢のオドくした物語を聞いて居るうちに、思つた。

公爵嬢が、總て斯ういふことが、父親の葬式の翌日に起つたのだと、ロストオフに話し始めた時に、公爵嬢の聲は震へた、公爵嬢は顔を背けた、そして、ロストオフが、自分の言語をば彼の感情を動かし度い爲めのものだと取りは爲まいかと慮れるかのやうに、公爵嬢は、心配さうな、様子を伺ふやうな顔付で、ロストオフを一すく見た。

ロストオフの眼には涙が出て居た、公爵嬢マリイヤは、それに氣が付いた、そして、誰にも公爵嬢の顔の

醜くさを忘れさせる例の涼しい眼付で、ロストオフを見た。

「私は偶然此方の方へ参りました、何かしらで、貴女のお爲めを爲ることが出来るやうになつた私の喜悅は、到底言語では云ひ盡くせません、公爵嬢」と。ロストオフは、云つて、起ちあがつた。「貴女は直ぐお發ちでせう、私は、私の名譽にかけて、お發ちになれるやうにお引き受します、若し貴女が私がお送り申すことを許してさへくださいますれば、誰にも貴女を困らせるやうなことはさせません、で、皇族の婦人たちに對して爲るやうな非常に謹んだ點頭を爲て、ロストオフは戸口へと振り向いた。

自分の調子の鄭重なことで、ロストオフは、自分は公爵嬢と懇親になることを幸福と認めて居るのではあるが、此の際公爵嬢の不幸に乗じて、押し付けがましく懇親にならうとは、決して思つて居無いのだといふことを見せようと爲たのであつた。

公爵嬢マリイヤは、この調子を感じ、そして、それを認めた。

「眞個に、眞個に、有り難うございます」と。公爵嬢は、佛蘭西語で、ロストオフに、云つた。「ですが、全く何かの誤解なんでせうと思ひます、誰の咎といふのでもございますまいよ」。公爵嬢は、不意に泣きだした。

「ご免くださいましよ」と、公爵嬢は云つた。

ロストオフは、顔を擧めて、今一度低く點頭を爲て、部室を出た。

(十四)

「もし、奇麗な娘でしたか？。だが、君、僕の桃色娘はなかく人好のする奴ですぜ、名は、ヅウニヤシ



ヤといふんです……」

が、ロストオフの顔を窺くと、イリインは止まった。彼は、自分が崇拜して居る人であり且自分の長官であるロストオフが、自分とは全然異つた考慮に沈んで居るのを見た。

ロストオフは、イリインを、腹立たし氣に見た、そして、返答を爲すに、村の方へとツン／＼大股で歩いた。

「奴等に思ひ知らせてやる、奴等に眼に物見せてやる、悪黨奴等」と、ロストオフは一人呟いた。

アルバアティイチは、艱然駈け出さず居られるばかりの速足で、ロストオフの後に續いた。

「何うお決しくございましたでせうか？」と、彼は、ロストオフに追ひ付きながら、云つた。ロストオフは、ピタリと立ち止まつた、そして、拳を握り固めて、不意に、恐しい權幕でアルバアティイチの傍へ詰め寄せた。

「決した？。何の決定だ、胡麻すり爺奴？」と、ロストオフは怒號つた。「貴様は何を考へて居たんだ？。え、農夫どもが暴れる、それで居て、貴様は奴等を取り締ることが能きんとは、何うしたんだ？。貴様は自分が逆賊なんだぞ。俺は、貴様のやうな奴の心持は善く解つて居るぞ。俺は、貴様のやうな奴等の皮を叩き割いでやるわい……」。で、自分の憤怒の勢を空費してしまふのを慮れるかのやうに、彼は、アルバアティイチの傍を離れて、速に進んで行つた。

アルバアティイチは、自分の傷けられた感情を嚙みこんで、尙且、目下の問題に對するロストオフの考慮の足になる事柄を話しながら、泳ぐやうな歩調で、ロストオフの後に續いて急いだ。彼は、農夫等が非常に頑強であることや、今の場合、武力無くして、彼等に對抗するのは無謀であるのだから、先づ以つて、兵を喚

び寄せた方が宜くはあるまいかといふことを云つた。

「俺は、武力を奴等に喰はしてやる……俺は奴等に對抗して遣る……」と、ニコライは無法な動物的な憤怒と、その憤怒を誰か知らの上に洩し度いといふ望で以つて、息を塞らせて、意味も無く呟いた。自分が爲ようと爲て居ることを考へもせず、無意識に、彼は、群集の方へと、速い、確乎した歩調で、動いて行つた。

で、ロストオフが群集へ近寄れば近寄るほど、アルバアティイチは尙一層彼の向ふ見ずの行爲が一番幸福な結果を生ずるのであらうと感ずるのであつた。群集の裡の農夫等も、ロストオフの、確乎した、急ぎ歩と、彼の、斷乎とした、睨み付けた顔を見ては、アルバアティイチと同なじやうに感じたのであつた。

驃騎兵が村へ入り、ロストオフが公爵嬢に逢ひに入つて行つた後で、意見の、或る躊躇と、乖離が、群集の間に表はれて来た。農夫等のうちの或者は、騎兵等は露西亞人であるのだから、自分等が若い女主人を發たせ無いのを悪く思ふかも知れぬといふことを、云ひ始めた。ツロンもその説であつた、が、彼がそれを云ひだすや否や、カルブやその他の者がツロンに喰つてかゝつた。

「何年貴様は村を喰ひ物にして肥つたか知れ無えぢや無えか？」と、カルブが怒號つた。「貴様は何方だつて宜いだらうよ。貴様は錢壺を掘り出して、それを持つて逃けりやア宜いんだ。俺たちの家が焼けやうが、焼けまいが、貴様にやア何でも無えだらう？」

「何も彼も整然として、誰も家を捨てちやアなら無え、物一つ他所へ動かさちやアなら無えてえ命令ぢやア無えか——全くさうなんだい」と、今一人が怒號つた。

「彼りやア貴様の子息の番だつたんだい、だのに、貴様は、貴様の肥つた俵を助けやがつた」と、小さい



年取つた男が、ヅロンに跳びかゝつて、不意に喚いた。「で、俺のヴァンカを兵隊になる爲めに髪を剃らせにやつちまやアがつた。うゝん、それなのに、俺たちは、悉皆死な無きやアなら無えんだい」

「左様とも、俺たちは悉皆死な無きやアなら無えんだ」

「私は、村會に反對する人間ぢやア無い」と、ヅロンが云つた。

「ナニ、村會に反對する人間ぢやア無い、貴様はそれを喰ひ物にして、肥りやがつた……」

二人の瘡けた農夫は、云ひ度いまゝを云つて了つた。ロストオフが、イリインや、ラヴルウシカや、アルバアティイチを伴れて、群集に近付くや否や、カルプは、腰帶に指を突つ込んで、微弱な笑顔で、前へ歩き出た。ヅロンは、その反對に、後へ退ぞいた、そして、群集はごちくくと塊まつた。

「おい、村長は誰か？」と、群集へと速歩に歩み寄りながら、ロストオフが怒號つた。

「村長？ 村長に何の用があるですか？……」と、カルプが尋いた。彼がその言語を云ひ切つて了まふか了まは無いうちに、彼の帽子が頭から飛び去つた、そして、彼は、頭への烈しい打撃で、後へ踉蹌させられて了まつた。

「衆皆帽子を脱れ、謀叛人ども」と、ロストオフの激しい聲が怒號つた。「村長は何處に居るか？」と、彼は、凄まじい權幕で哮つた。

「村長、村長にご用なんだ。ヅロン・ザハリイチ、お前を呼んで居なさるんだ」と、聲々が急に從順になつて、云つて居るのが聞えた、そして、帽子が脱られた。

「私どもは無法をやる譯ぢやア無えです、命令通りにやつてるんです」と、カルプが云つた。と、後で五人の聲が、同時に云ひ始めた——

「長老たちが極めた通りなんだ、命令を出すお前たちが餘り多數だつたんで……」

「ぐづく云ふか？……暴動だ……悪黨ども。謀叛人奴等」と、ロストオフは、カルプの襟頭を攫みながら、自分の聲では無いやうな聲で、何にも考へずに、怒號つた。「此奴を縛れ、此奴を縛れ」と、彼は、ラヴルウシカとアルバアティイチの他、カルプを縛るものは誰も居無かつたのに、怒號つた。

ラヴルウシカは、それでも、カルプの傍へ駆け寄つて、後から彼の腕を攫んだ。

「山の下から兵どもを呼びませうか」と、彼は叫んだ。

アルバアティイチは、農夫等の方へ振り向いて、二人の名を呼んでカルプを縛れと云ひつけた、その農夫等は從順しく群集の裡から歩み出て、各自帶を解き始めた。

「村長は何處に居るか？」とロストオフは怒號つた。

ヅロンは、蒼い顎んだ顔で、群集の裡から歩み出た。

「貴様が村長か？。此奴を縛れ、ラヴルウシカ」と、ロストオフは、その命令は何等の反抗にも出會ふ氣遣が無かつたかのやうに、怒號つた。實際、二人の農夫が、その行爲を手助しようとするかのやうに自分の腰帶を脱いて彼等に渡したヅロンを、縛り始めたのであつた。

「で、貴様等衆皆俺のいふ事を聞け」と、ロストオフは、農夫等に振り向いた。「今直ぐ家へ歸れ、俺に二度貴様等の聲を聞かせる勿」

「いや、俺たちは何も悪いことは爲無かつたんだ——」それ見ろ、悉皆、痴愚だつたもんだからだ」

「愚劣なことだつた……」——「俺は、善く無えことだと、始つから云つてたぢやア無えか」と、聲々が、互に罪を着せ合ひながら、云つた。



「それ見たことか」と、アルバアティイチは、彼の正當の位地に歸つて、云つた。「お前たちは間違つたことをやつたのぢや、若者たち」

「私どもが、痴愚だつたからです、ヤアコフ・アルバアティイチ」と、聲々が答へた、そして、群集は直ぐ別れて、村の諸方へ解散し始めた。

縛られた二人の農夫を人々は領主館へ連れて行つた。二人の醉拂ひの農夫はその後に隨つて行つた。「おい、態を見ろい」と、その一人が、カルブに向つて、云つた。

「貴様は彼様な風に旦那方に話が能きと思つて居たのかい？。何を貴様は考へて居たんだい？。貴様は痴者だな」と、今一人が言葉を挾めた。「眞個の痴者だな」

二時間経ぬうちに、入用の馬や荷馬車が、ボグチャアロヴァの家の廣庭に立つて居た。農夫等は、熱心に急いで出て来て、主人の荷を掲げて居た、そして、公爵嬢の所望で、彼が閉ぢ込められて居た材木部室から釋放されたゾロンは、庭に立つて、人々に指圖を爲て居た。

「さう粗略に荷造りする勿よ」と、農夫の一人、圓い、笑顔で背の高い男が、女中の手から小箱を受け取りながら、云つた。「錢のかゝつてるもんぢやア無えか。お前が其様なに投げ出したり、直接に繩を掛けたりするとな、傷所が附かアな。俺は、其様な扱ひを見るなア嫌ひだ。何でも、規則通り、チャンと正直にやれよ、おい。そら、この通り、數物で纏む、それから、干草で包んぢまうんだぜ、うん、さうだ、上等だ」

「やア、書籍だ、書籍だ」と、公爵アンドレーの書棚を持ち出しながら、今一人の農夫が云つた。「轉ば無えやうに氣を付ける。うん、だが、重いや、若者たち、書籍は確乎した、固いものだな」

「さうよ、此様なものを書くにやア随分骨が折れただらうぜ」と、脊の高い、圓顔の農夫が一番上に横たはつて居た辭書をば、意味あり氣な眼向で、指さして、云つた。

公爵嬢と押し付けがましく懇親になることを欲し無かつたロストオフは、家へ返つて行か無いで、村に止まつて、公爵嬢が馬車で出て来るのを待つて居た。公爵嬢マリイアの馬車が家から出て來るといふと、ロストオフは、馬に乗つて、ボグチャアロヴァから十二露里の、わが軍の占領して居る街道まで、公爵嬢を護送した。

ヤンコオヴァの旅舎で、彼は、其所で始めて、公爵嬢の手に接吻することだけを自ら許して、丁寧に公爵嬢と別れた。

「何ういたしましたして」と、彼は、公爵嬢を助けたこと——公爵嬢はそれをさう云つて居た——に對してロストオフに感謝する公爵嬢マリイアの言語に向つて、顔を赤めて、云つた。「何様な警察官にでも彼れ位なことは能きたでせう。吾々が唯だ農夫等と戦ふのでしたら、吾々は斯様に敵を進ませ無かつたでせう」と、彼は、少し羞かしさうに、談話を變へようと爲て、云つた。「私は、貴女と懇親になる機會を得たのが唯だ嬉しいのです。左様なら、公爵嬢。貴女は幸福と慰藉をお得になることは確です、もつと幸福な状態で再お眼にかゝりませう。若し、私に赤面させ度く無いと思召すのなら、何卒お禮を仰しやらすにお置きください」

が、公爵嬢が最早その上言語では彼に禮を云は無かつたにしても、公爵嬢は、感謝と熱心で晴々として居た顔の表情全體で、彼に謝したのであつた。公爵嬢は、自分にはロストオフに禮をいふ譯が少しも無いのだとは、信じ得られ無かつた。それどころか、公爵嬢の心に取つては、彼なかりせば、自分は、謀叛した農夫等か、佛蘭西人かの犠牲に何うしても落ちるのであつたといふこと、それから、自分を助けるが爲めに、彼



は、明白な恐ろしい危険に身を暴いたのであつたといふことは、争ふべからざる事實であつた、尙その上に彼は、公爵嬢の位地や、悲痛に同情し得る上品な氣高い心の人であることは、尙一層確な事實であつた。公爵嬢が、泣きながら、自分の不幸のことを話した時に涙を流した彼の親切な正直な眼が、公爵嬢の想像に何時までも付き纏つて居た。

彼に別を告げて、一人になつた時は、公爵嬢マリイヤは、不意に自分の眼に涙を感じた、其所で——この時始めては無いのだが——「彼に戀して居るので無からうか？」といふ疑問が、心に起つた。

それから莫斯科までの道中、公爵嬢の位地は決して楽しいものでは無かつたに拘らず公爵嬢の馬車と一緒に乗つて居たツウニヤシヤは、窓から外を見る女主人の顔が、何とは知らず、嬉しさうな、悲し氣な微笑を帯びて居るのに氣が付いた。

「さう、私が彼の人に戀するやうになつたらば、何うなのか？」

公爵嬢は、自分が、自分のことなぞを決して何とも思は無いかも知れぬ男に戀するやうになつたといふことを、自分で承認するのを恥かしく思つたに拘らず、自分はそれを誰にも知らせることは無いのだから、唯つた一遍限りの戀として、生涯、密かに戀して居たからといつて決して自分が悪いのでは無いといふことを、思ひ廻らして、それで自ら慰めたのであつた。

時々、公爵嬢は、彼の眼付、彼の同情、彼の言語を憶ひ起した、そして、幸福は全く不可能では無いやうに思はれた。で、ツウニヤシヤが、公爵嬢が微笑みながら窓の外を見て居るのに氣が付いたのは、その時であつたのだ。

「彼の方がボグチャアロヴァへ、而も、丁度あの場合においてなされるなんて」と、公爵嬢マリイヤは思つ

た。「それに、彼の方の妹御がアンドレーエを断るなんて」で、總てさういふ事のなかに、公爵嬢マリイヤは、神の所爲を認めた。

公爵嬢マリイヤからロストオフに與へた印象は、極く心持の好いものであつた。彼は、公爵嬢のことを思つた時には、嬉しく感じた。で、彼の同僚たちが、ボグチャアロヴァでの彼の冒險のことを聞いて、彼は、干草を探しに行つて、その代りに、露西亞ちうでの最も大身代の繼嗣娘を見出したのだと云つて、彼を冷嘲かした時に、彼はそれに腹を立てた。彼は、莫大な財産の有る、従順しい、彼の心に取つては非常に人好きにする公爵嬢マリイヤと結婚するといふ考案が、我にもあらず、一再ならず、自分の心に起つて來た全くその爲めに、怒つたのであつた。自分自身だけから云へば、ニコライは、公爵嬢マリイヤを妻に持つに越したことは無かつた。公爵嬢に結婚することは、自分の母の伯爵夫人を喜ばすことも能きやうし、又、父親の破れた財産を直すことも能るのであつた。その上に、その結婚は——ニコライはさう感じたのであつたが——公爵嬢自身の幸福にもなるのであつたらう。

が、ソオニヤは何うする？。それから自分の約束は？。で、ロストオフが、公爵嬢ボルコオンスキイのこ

(十五)

軍の總司令権を授けられると、クツウゾフは、公爵アンドレーエのことを憶ひだした、そして、本營への召喚狀を彼に送つた、公爵アンドレーエは、クツウゾフが軍隊に對する彼の最初の檢閲をやつて居たその日のその時間に、ツアレヴォ・ザイミシチエーに達した。



公爵アンドレエーは、村の、總司令官の馬車が立つて居た僧の家で止まった、そして、殿下——誰もが今はクツウゾフのことをさう呼んで居た——を待たうと、門の所の腰架に腰を下した。村から彼方の平原から聯隊の音楽の音と、新總司令官に對して「萬歳」を叫ぶ非常な群衆の喚きが聞えて來た。

門の所には、公爵アンドレエーから約十歩位離れて、二人の從卒に、一人の使者に、主人の不在に附け込んで好い天氣を樂しんで居る給仕長が、立つて居た。

濃い口髭と頬髯で被はれた顔の、赤黒い、小さい、驃騎兵の中、佐が、門へ乗り附けて來て、公爵アンドレエーをジロリと見て、殿下は此所に宿まつて居るのか、それから、直き歸つて來るか何うかと、尋いた。

公爵アンドレエーはその男に、自分は殿下の幕僚では無くつて、今此所へ着いたばかりの者だと、話した。驃騎兵の中、佐は、洒落れた從卒に振り向いた、すると、從卒は、總司令官の從卒等が、將校たちに何時も應對するところの、一種特別な輕侮した様子で、彼に云つた——

「殿下かね？。直ぐお歸りだと思つて居る。貴下の用は何ですか？」

その將校は、從卒の口調に對して口髭の裡で齒を剥きだして、下りて、從者に馬を渡し、そして軽く點頭を爲てボルコオンスキイの傍へ行つた。

ボルコオンスキイは、腰架の上を彼に對して讓つた。驃騎兵は、その傍に腰を下した。

「貴下も總司令官をお待ちですか？」と、彼は始めた。「殿下は、誰にでも逢つてくださるといふことですね、幸福なことですな。臆腸造者どもとは違つたものですな。イエルモオロフが獨逸人にまで昇級させて呉れと云つたなア道理ですわい。最早、今度は、露西亞人が再物を云ひ得るでせうね。奴等のやつて居たこと

と云つたら、何が何だか全然解らん。唯だ、退却、退却、何處までも退却なんだ。貴下は戰場にお出でしたか？」と、彼は尋いた。

「私は、退却にも加はつたばかりで無く」と、公爵アンドレエーは云つて、「その退却の爲めに、私が大切にして居た有ゆる物を失なひました——私の財産、私の生れた家……悲痛の爲めに死んだ私の父親のことは云は無いにしても。私はスモレエンスク生れの者です」

「やア……貴下は公爵ボルコオンスキイでおいですか？。お目に掛つて至極嬉しうございます。中、佐デニイソフです、ヴァアスカといふ方が好く通つて居ますが」と、公爵アンドレエーの手を握り締め、彼の顔を非常な親切な表情で見ながら、デニイソフが云つた。「左様です、私は聞きました」と、彼は同情した風で云つた。そして、少時止まつて居てから、斯う云ひ添へた。「左様です、これは、スシヤ風の戦です。それで結構なんだ、けれども、自業自得の奴等にはさうでは無い。では、貴下は公爵ボルコオンスキイでおいですか？」彼は、頭を振つた。「至極嬉しいです、公爵、貴下にお目に掛つたのは至極嬉しいですよ」と、彼は云ひ添へて、悲しうな笑顔で、再公爵アンドレエーの手を握り締めた。

公爵アンドレエーは、デニイソフが最初の結婚申込者であつたといふナタアシヤの談話でデニイソフのことを知つて居た。ナタアシヤの談話の追憶——快くもあり、苦くもある——が、公爵がこの頃は決して考へ無いやうになつて居た心の痛苦——それは、今でも尙且心の底に埋められて居たのだが——へと、公爵を伴へ戻した、この頃は、スモレエンスクの放棄、荒涼、丘へ彼が立ち寄つたこと、父親の死の通知を此の程受け取つたこと、などの、随分多数の種々な重大な事件——随分多くの感情が彼の心に満ちて居たので、ナタアシヤに關する種々な記憶は最早長いこと心には無くなつて居て、今それが歸つて來ても、彼をそれ程烈し



くは動かさ無かつた位であつた。

所で、デニイソフに取つては、ボルコオンスキイの名で喚び覺まされた聯想は、彼が、晩食と、ナタアシャの謠の後で、殆ど自分が何を爲るとも分ら無い状態で、十五歳の娘に結婚を云ひ込んだ時のその遠い／＼口オマンテイックな過去に屬して居るのであつた。彼は、その時分のことや、ナタアシャに向つての戀に對して、微笑んだ、そして彼が今現に深く且特別に意を注いで居る事柄へと直ぐ移つて了まつた。

これは、彼が、退却の間前哨での勤務中に思ひ付いた戦略のことであつた。彼は、その方略をばバルクレエド・トオリイの前に持ち出したのであつたが、今それを、クツウゾフの考慮にも供さうとして居るのであつた。その方略は、佛蘭西の戦線が廣がり過ぎて居るといふ事實と佛蘭西人の侵入を阻止する正面攻撃の代りに、若くはそれに加へて、彼等の聯絡線に攻撃を加へたらば何うだらうといふ意見とに、基いたものであつた。彼は、自分の方略を公爵アンドレーエに向つて説明し始めた。

「奴等は、全線を防禦することは能き無い、それは到底不可能です、私は敵の戦線を破り抜けることをやりませう。五百人與へて下さい、さうすれば、奴等の聯絡線を斷つて見せます、それは、必定なんですぞ。用ゐるべき一つの方法は奇兵戦ですわい」

デニイソフは、起ちあがつて、手眞似をしながら、ボルコオンスキイに自分の方略を説明し始めた。彼の説明の最中に、二人は、遠くの方で、散らばつて居る別々の團隊から來るらしい、音楽や歌謠の混つた、軍の喚呼を聞いた。村からは、譁呼だの、多くの馬蹄の音が、聞えて來た。

「殿下がお歸りだ」と、門に立つて居た哥薩克騎が叫んだ、「お歸りだぞ」

ボルコオンスキイとデニイソフは、門へと出て行つた、其所には兵卒の一團(親護兵)が立つて居た、そし

て、二人は、低い栗毛馬に乗つて、街をやつて來るクツウゾフを見た。多数な兵僚の將官たちが、彼の後に續いて居た、バルクレエは、殆ど彼と列んで乗つて居た、將校たちの群集が、その二人の後や周圍を駈けながら、「萬歳」を叫んで居た。

クツウゾフの副官等は彼に先だつて、庭へ駆け込んだ。クツウゾフは、彼の重量の下に緩然と調子を踏んで進む彼の馬をもどかしさうに蹴た、そして、絶えず、頭を首肯かせ、赤い廣巾の附いた、肩庇の無い、彼の近衛騎兵の白帽へと、手を舉げた。恰幅の好い選抜兵——大抵は騎兵——の一團である所の親護兵が彼に敬禮して居るところへ來るといふと、彼は、命令することに慣れた人のやる凝乎と眼まじろがすに見詰める眼付で、寸時の間黙つて、彼等を見た、それから、彼は、自分の周圍に立つて居る將官や、將校たちの集團へと振り向いた。彼の顔は乍ち微妙な表情を帯びた、彼は、思ひ惑つた態で、肩を揺つた。

「彼れだけの者どもが居りながら、退却、退却とは」と、彼は云つた。「では、左様なら、將官」と。彼は、云ひ添へた、そして、公爵アンドレーエとデニイソフの傍の門口へと馬を驅つた。

「萬歳、萬歳、萬歳」と、幾つもの喚呼が彼の後で、響き渡つた。公爵アンドレーエが最後に彼を見てから以來、クツウゾフは、尙一層岩疊になり、肥つたのであつた、彼は、脂肪の裡を泳いで居るやうに見えた。が、見慣れた傷痕や、白眼や、彼の顔と姿に於ける懶けな表情などは、寸毫も變つて居無かつた。彼は、白い近衛騎兵の帽子を冠り、軍服の上衣を着て居、幅の狭い紐に吊けた馬鞍が肩から懸つて居た。彼は、彼の強さうな馬の上へ揺々と重さうに乗つて居た。

「フウ……フウ……フウ……」と、彼は、庭へ乗り込みながら、艱然聞える位に、口笛吹いた。彼の顔は或る演藝を爲した後で、休息を待ち設けて居る人のやうなホツと一息した態を表はして居た、彼は、鏡から左



の足を外して、なかく骨折らしく、顔を擧めて、身體全體をグラ／＼させて、その足を鞍まで持ちあげ、うんと呻きながら、彼を抱き止めようと待つて居る哥薩克騎等や、副官たちの腕へと、身體を落した。彼は、チャンと立ち直つた、半ば瞑つた眼で見廻し、公爵アンドレーエをジロリと見たが、彼を見とめ無かつたらしく、昇降段の方へと、蹣跚した態様で、動いた。

「フウ……フウ……フウ……」と、クツウゾフは口笛吹いて、そして、再公爵アンドレーエを振り返つた。老人には屢ある慣ひで、公爵アンドレーエの顔の印象が、それが誰であるといふ記憶を直ぐには喚び起さ無かつたのだ。

「やア、ご機嫌克う、ご機嫌克う、君、此方へ來給へ……」と、彼は、懶けに云つた、そして、彼の重量を受けてキイ／＼いふ昇降段を重さうに歩みあがつた。彼は、上衣の扣鈕を外し、そして、入口の椅子に坐つた。

「で、ご親父は何うかね？」

「死んだといふ通知が昨日参りました」と、公爵アンドレーエは、簡短に云つた。

クツウゾフは、ギョツとして見張つた眼で、公爵を見た、それから、帽子を脱つた、そして、十字を切つた。

「天の平和が彼の上にあらんことを。そして、神の御意が我等總ての上に成されんことを」

彼は、深い溜息を吐いた、そして止まつた。

「私は、彼の人を愛し、又尊敬して居つた、で、私は、君に對して眞底から同情します」

彼は、公爵アンドレーエを抱擁し、自分の肥つた胸へ彼を抱き締め、そして、暫時放さ無かつた。彼が公

爵を放した時に、公爵アンドレーエは、クツウゾフの厚い唇が振へて居、その眼には涙のあつたのを見た。クツウゾフは、溜息し、そして、椅子に手を突張つて、身體をそれから起ちあがらせようと爲した。

「入つて來給へ、入つて來給へ、世間話でも爲ようから」と、彼は云つた、が、その途端に、敵を恐れ無いと同様に、上長を恐れ無いで立つて居たデニイソフは、彼を引き止めようと爲た副官たちの腹立つた囁語には構はずに、昇降段で拍車を鳴して、大膽に歩みあがつた。クツウゾフは、尙且身體を起さうと椅子へ手を突つ張つたまゝで、悲しさうにデニイソフを見た。

デニイソフは、自分の名を云つて、露西亞の休戚に關する重大事件を殿下に通じ度いのだと云つた。クツウゾフは、デニイソフの上に彼の懶けな眼を見据ゑ、五月蠅さうな見振で、兩手を椅子から擧げて、彼の腹の所でそれを拱いた、そして、繰り返した「露西亞の休戚に關すること？。うん、何だね？。云ひ給へ」

デニイソフは、少娘のやうに顔を赤めた、その毛むくじやらの、古びた、大酒飲みの顔へ色が上るのを見るのは、不思議であつた、そして、彼は、スモレエンスクとヴィヤズマの間で、敵の聯絡線を斷つてしまふといふ彼の方略を大膽に説明し始めた、デニイソフの故郷はその地方であつた、で、彼は、その邊の地理を善く知つて居た、彼の方略は、確に善いものゝやうに見えた。殊に、彼の言語に籠つて居た確信の力から見れば、尙一層左様見えた、クツウゾフは自分の足を見詰めて居た、そして、時々、直ぐ隣りの田舎家の庭の方を、それから何か不愉快な物が來るのを豫期して居るかのやうに、振り返るのであつた。所が實際、その田舎家から、デニイソフの談話の間に、紙挟を小脇に抱へた一人の將官が出來たのであつた。

「えゝ？」と、クツウゾフは、デニイソフの説明最中に尋ねた「最早宜いのかね？」

「左様です、殿下」と、將官は云つた。クツウゾフは、「一人の人が、何うしてさう何も彼もやれるものか」



と、云うやうに見えた態で、頭を振つて、そして、再デニイソフの相手になつた。

「私は、露西亞の將校の面目に懸けて」と、デニイソフが云つて居る所であつた。「誓つてナポレオンの聯絡線を断ります」

「經理監督長官のキリル・アンドレエーチ・デニイソフは君の何かに當るのかね？」と、クツウゾフが、口を挟めた。

「叔父です、殿下」

「お、吾々は信友であつたよ」と、クツウゾフは、前よりも快活に云つた。「宜しい、宜しい、この司令部に止まつて居給へ、明日再話さう」

デニイソフに首肯くやうに會釋して、クツウゾフは、傍へ向いて、コノヅニイチンが持つて來た書類に向つて手をさし出した。

「殿下は、家内へお入りになりませんか？」と、不満な聲で、當番の將官が云つた。「圖を御覽になる必要もあり、幾枚か書類に御評名になる必要もあるのですが」

一人の副官が戸口に出て來て、悉皆準備が出来たと報告した。が、クツウゾフは、室内へ入ら無いうちに、用事を片付けて了まひ度いのらしかつた。彼は止まつた……。

「い、や、此所へ卓子を置いて呉れ、君、私は此所で見て了まふから」と、彼は云つた。「行つて了まつては不可よ」と、彼は公爵アンドレエーに向いて、云つた。公爵アンドレエーは戸口に止まつて、當番の將官の談話を聞いて居た。

後者が彼の報告を爲て居るうちに、公爵アンドレエーは、戸口で、女の聲の囁語と、女の絹の衣服のそよ

ぎを聞いた、幾度もその方を一寸く見て、彼は、戸の蔭に、桃色の衣服を着、頭に薄紫色の絹の頭巾を冠つた圓々とした、薔薇色の顔の、縹緲の好い女が居るのを見付けた。その女は手に皿を持つて居た、そして、總司令官の入るのを待つて居るのらしかつた。クツウゾフの副官が、これは、僧の妻で、家の女主人であつて、殿下が入る時に、歓迎の記徴であるところの麵麴と鹽をクツウゾフに捧げる積りであるのだと、囁語で、公爵アンドレエーに説明した。夫は、教會堂で、十字架を以つて、殿下を迎へ、妻は、家へ彼を歓迎しようとして居るのであつた……。

「なか／＼別嬪ですぜ」と、副官は、微笑みながら、云ひ添へた。クツウゾフは、その言語で振り返つた。

彼は、ツアレヅマ・ザイミシチエーの前面の軍隊の位置に關する批評が主題であつた將官の報告をば、彼がデニイソフの言語を聞いて居た時と全く同なじ態で、又、彼が、アウステルリッツの前の軍略會議の討論を聞いて居た時と全く同なじ態で、聞いて居た。彼は、唯だ、自分には二つの耳が有つて、縱令その一つは綿で塞められて居たけれども、それでも、聞かざるを得無かつたが故にのみ、その報告を聞いて居るといふ態であつた。が、將官が彼に云ふだらうと思ふことは、何様なことでも、彼を驚かすことも、彼の心を引くことも、能き無いことや、彼は、自分に向つて話された事柄は總て前以て知つて居たのだが、人が連禱を聞か無ければなら無いと全く同なじやうに、唯だその事柄を聞か無ければなら無かつたが故のみに、聞いて居ることが、明白であつた。

デニイソフが云つたことは、總て、實際的で、道理至極なことであつた。將官が云つて居たことは、尙一層實際的で道理であつた、が、クツウゾフは、明白に、知識をも、智力をも輕んじて居て、物を決する何か他の物——智力や知識とは全く離れた、それとは異つた何物か——を知つて居るのらしかつた。



公爵アンドレーは、注意深く總司令官の顔に氣を付けて居たが、彼が其所に見付け得た唯だ一つの表情は、退屈や、戸口での女の囁語の意味を知り度いといふ好奇心や、禮儀を守らうといふ願望の表情ばかりであつた。

クツウゾフが、智力も學問も、尙又デニソフが表した愛國的感情をさへ、輕んじて居たことは明白であつたが、彼は、さういふ物をば、智力により、若くは、情緒により、若くは、學識によつて、輕んじたのでは無かつた（それは、彼が、さういふ物をひけらかす努力を少しも爲無かつたのでも知れるのであつた）、彼は、さういふ物をば、何かその他の或物によつて——彼の老齡によつて、彼の人生の經驗によつて——輕んじたのであつた。

その報告の裡へ挟んだクツウゾフ自身の指圖といふのは、露西亞の軍隊の掠奪行爲に關するもののみであつた。將官は、その報告の終末に、或る將校たちに自分の燕麥を刈られたといふ地主からの損害賠償の請願に關する、記名を要する、書類を殿下の前へ提出した。

クツウゾフは、その事件を聞いて居るうちに、唇をバク／＼やつて、頭を振つた。

「燧爐へ……燒いて了まへ。私は、これ限り、君に云つて置くが」と、彼は云つて、「其様な物は悉皆火にくべるが宜い。彼等の思ひのまゝに、穀物は刈らせるが宜い、木は伐らせるが宜い。これは、私が命するのぢや無い、許すのぢや無い、が、私は、さういふ事件を調べる譯には行かん。それは、爲方の無いことなのだ。樹を切れば、木片を飛ばさん譯には行かん」では無いか。彼は、今一度その書類を一寸と見た。「あゝ、この獨逸の綿密」と、彼は、頭を振つて評を入れた。

(十六)

「うん、さア、これで終結だ」と、クツウゾフは、最後の書面に記名して、云つた、そして、不恰好に立ち上り、彼の肥つた、白い頸を伸して、少し快活な顔容になつて戸へ行つた。

僧の妻は、顔をカツト赤くさせて、皿を急いで取り上げたが、餘程長く用意して居たに拘らず、丁度好い機會にそれを捧げ得無かつた。低い叩頭を爲て、女はそれをクツウゾフにさし出した。クツウゾフは、眼を圓くした。彼は、微笑んで、女の頤の下を擦ぐり、そして、云つた——

「何といふ奇麗な顔だらう。有り難う、貴女」

彼は、衣袴の衣袋から、幾枚かの金貨を取り出して、それを皿の裡へ入れた。「では、何様な所ですかね？」と、彼は云つて、彼に當てられて居た部室の方へと行き掛けた。

僧の妻は、薔薇色の顔へ笑顔を寄せて、クツウゾフを部室へ案内しようとして、後に續いた。

副官が、入口に居た公爵アンドレーの所へ出て来た、そして、彼を中食に招待した。半時間経つて、クツウゾフが公爵アンドレーを喚びによこした。クツウゾフは、尙且同なじ扣鈕を外した軍服で、低椅子に凭りかゝつて、掛けて居た。彼は、手に佛蘭西小説を持つて居たが公爵アンドレーが入つて行くと、その裡へ紙切りの小刀を案に入れて、側へ掛けた。公爵アレドレーがその表紙で見たものでは、それは、マダム・ド・ジャンリスの作「シイニユの騎士等」であつた。

「うん、坐り給へ、此所へ坐り給へ。少し話さうじや無いか」と、クツウゾフは云つた。「悲しいことだ、實に悲しいことだ。が、覺えて居て呉れ給へ、私のことを、父親、今一人の父親と思ひ給へ……」



公爵アンドレエーは、彼が父親の最後に就いて知つて居ることの總てと、それから、彼が荒涼丘で見た事柄を、クツウゾフに話した。

「吾々が此様なところまで持つて来られたことを思へば」と、クツウゾフは感情に満ちた聲で、不意に叫んだ。公爵アンドレエーの物語が、確に、露西亞の位置を現然と、クツウゾフの前に持ち出したらしかった。

「今に見ろ、今に見ろ」と、彼は、怨み重なつた顔容で、云ひ添へた、が、餘り深く自分を動かした談話は續け度く無いらしい態で、云つた――

「君を喚んだのは、私の傍に置く積りなのだが」

「私は殿下にお禮を申しあげます」と、公爵は答へて、「が、私は、最早司令部の爲事には駄目では無からうかと思ひます」と、彼は、微笑んで、云つた、その微笑にはクツウゾフが気が付いた。彼は、不審さうに公爵アンドレエーを見た。「で、主要な點は」と、公爵アンドレエーは、云ひ添へた。「私は私の聯隊に慣れませんでした。私は將校等を好いて居ますし、兵等も私を好くやうになつたと思ひます。聯隊を離れるのが残り惜いんです。若し、私が、殿下附の光榮をご辭退するとすれば、それは、確に……」

クツウゾフの圓々とした顔が、なかく、食へ無い、人の好い、然し、微妙に皮肉な表情で、晴々とした。彼はボルコオンスキイの言語をビタリと遮ぎつた。

「君は私の役に立つことは確だ。が、君の考慮は道理だ、君の考慮は道理だ。人の要るのは此所では無い。何時も、助言者は多數ある、が、人は少い。所謂助言者たちが、君のやうに悉皆聯隊で勤めるのであつたら、各聯隊は、今のやうでは無からう。私は、アウステルリッツでの君を覚えて居る。私は覚えて居るよ、軍

旗を持つた君を覚えて居るよ」と、クツウゾフが云つた、と、満足の赤らみが、この追憶で、公爵アンドレエーの顔へサツと出て來た。

クツウゾフは、公爵アンドレエーに手をさし出し、接吻しろと頬部をさし付けた、そして、再公爵アンドレエーは老人の眼の裡に涙を見た。公爵アンドレエーは、クツウゾフの涙は何でも無く出勝ちであつたことも、又、クツウゾフは、公爵の不幸に對する同情を表し度いと思ふが爲めに、その時は、公爵に對して殊に愛情深く、優しくかつたことも、知つては居ながらも、それでも、彼は、アウステルリッツのことを斯う憶ひ出させて呉れたのが、心持好く、嬉しかつた。

「君自身の路を行き給へ、私は、君の成功を祈ります……君の路が名譽の路であることを私は知つて居る」。クツウゾフは一寸と止まつた。「アハレストでも、君が懐しかつた。で、誰か使をよこさうかと思つた……」それから、話題を變へて、クツウゾフは、土耳其戦争のことや、締結された平和のことを話し始めた。

「左様、私は八方から罵られたよ」と、彼は云つて、「戦争に對しても、平和に對してもさ……が、それは悉皆丁度好い時に起つたのだ。何事でも、待つことを知つて居る人に對しては、丁度好い時に來るものだ」と、彼は、佛蘭西の俚諺を引いて、云つた。「彼所にも、此所と同なじに助言者は多かつた……」と、確に彼の心を領して居たらしい題目の、助言者が多過ぎるといふことに立ち戻つて、言語を續けた。「うん、助言者たち、又、助言者たち」と彼は云つた。「若し、吾々が、彼等の云ふ通りに爲たのであつたら、吾々は今頃は土耳其へ行つて居た筈なのだ。吾々は、平和を結ばずに、戦争は決して終ら無かつたらう。何時も急いで居る、で、急げば急ぐだけ、事の撈取りは遅いものだ。カアメンスキイは、若し、死な無かつたのであつたら、懨れなことになつたらうと思ふ。彼の男は、三萬の兵を以つて諸方の城塞を強襲して廻つたのだ。城



塞を取るの容易いことなのだが、併し、戦役を旨く終らせるのは難しいことだ。強襲や攻撃は、所要のものでは無い、時と忍耐が必要なのだ。カアメンスキイはルスチュクを攻撃する爲めに兵を遣つた、が、私は、その二つの物——時と忍耐——にばかり信頼して居つた、で、私の方がカアメンスキイよりも多数の城塞を取り、土耳其人を兵糧攻にして、馬の肉を食はなければならんやうに爲て遣つたのだ。クツウゾフは頭を振つた。「又佛蘭西人にもさうさせてやる。私は必然受け合ふのだ」と、彼は、熱して来て、自分の胸を叩いて、叫んだ。「私は彼等に馬の肉を食はせてやる」で、再彼の眼が涙で曇つた。

「ですが、吾軍は戦鬪を開くでせうね？」と、公爵アンドレーエが云つた。

「誰もがさう爲度がるのなら、さう爲なければなるまい、それより他爲方が無いのだ。……が、君、私の言語を善く覚えて置いて呉れ。有らゆる勇士のなかの一番強い奴は、前に云つた二つの物——時と忍耐——なのだ。その二つが何も彼もやつて了まふのだ、所が、吾々の賢明な助言者諸君は、さういふ風に見無いのだ、其所が不好いのだ。或る者は、宜いと云ひ、或る者は不好ぬと云ふのだ。何うすれば宜いのかね？」と、彼は、返答を待ち設けるらしい態で、尋いた。「さア、何うすれば宜いと云ふのかね？」と、彼は繰り返した、そして、彼の眼が、深い、惻怍さうな表情でキラ／＼した。「では、何うすれば宜いのか、君に話さう」と、彼は、公爵アンドレーエが尙且答へ無かつたので、云つた。「何うすれば宜いのか、それから、私が何うするのか、君に話さう」疑はしき時は、君——彼は止まつた——「待て」だ。クツウゾフは、その佛蘭西の俚諺をゆつくりと發音した。

「では、左様なら、君、覚えて居て呉れ給へ、私は、心から君の悲愁に同情するのだ、そして、私は、君に對しては、殿下でも無く、公爵でも無く、總司令官でも無くして、唯だ父親なのだ。若し、何か欲しいも

のがあつたら、私の所へ直ぐ來給へ。左様なら、私の可愛い子よ。再彼は公爵アンドレーエを拘擁して、そして、接吻した。

で、公爵アンドレーエが戸を閉めて了まはぬうちに、クツウゾフは、溜息して、身體をゆつたりと据ゑて、マダム・ド・ジャンリスの小説「シイニユの騎士等」の讀み残りの分を又讀み始めた。

何うしてだか、何故だか、公爵アンドレーエには説明が能き無かつたのだが、クツウゾフとのこの會見の後、公爵アンドレーエは、戦争のそれから後の進行や、その統率に托された人に就ては、安心した心持になつて、自分の聯隊へ歸つて行つたのであつた。公爵アンドレーエが、情慾の習慣の外自分の物と云つては何物をも残して居無いやうに見え、そして、事件の眞核を攫んだり、方略を立てたりする智力の代りに、事件の進行を靜に觀照する能力だけを持つて居たその年老つた將帥には私慾的なところが全く無いのを、明白に認めれば認めるほど、彼は、何も彼も、正しくあるべきやうになるだらうと、益々信頼するのであつた。

「彼の人は、自分といふものを何にも入れ無い。彼の人は、何にも企畫が無い、何にもやらうと爲無い」と、公爵アンドレーエは思つた、「が、彼の人は、何も彼も聞き、何も彼も考へ、何物をもそのあるべき場所に置き、役に立つものなら何物をも阻碍し無いし、害になるものなら何物をも容さ無いといふ人なんだ。彼の人は、世の中には、自分の意志よりもつと強い、もつと重要な何物か——即ち、事件の避け難き行進といふもの——があるのを知つて居る、そして、彼の人は、何様な事件をも見ることが出来る、その意義を攫むことが出来る、で、その意義を見て、さういふ事件に餘計な手を出すことや、自分の意志に従つて、何か他の事を窺ふやうなことは、決して爲無い。で、人が彼の人に信頼する主な理由は」と、公爵アンドレーエは思つて、「彼の人が、マダム・ド・ジャンリスの小説を讀んで居たり、佛蘭西の俚諺を云つたりするに拘ら



す、飽くまで露西亞人であることや、彼の人が一何といふ所まで吾々は持つて来られたことであらう」と云つた時に、彼の人の聲が震へたといふやうなところや、「奴等を馬の肉を食ふやうにさせてやる」と、云つた時に、彼の人の聲が咽喉に塞まつたといふやうなところにあるんだ」

宮中の陰謀に反対して、國民的感情に従つて、總司令者としてクツウソフの任命さるゝことに對する輿論的の賛成を決したのは、誰もが多少とも無意識に持つて居たこの感であつたのだ。

(十七)

皇帝が莫斯科を去つてからは、その市の人生は、そのの往時通りの有り来りの河床を流れた、そして、その人生の流れかたは、愛國的熱心の時分のことを憶ひ出すことは困難である程、又、露西亞が現に危険に陥つて居ることは、英吉利俱樂部の會員が、やがて又、露西亞の爲めには何様な犠牲でも直ぐ爲るといふ露西亞の忠誠な子であるといふことを、信ずることは、なか／＼能き無かつた程、それ程までに、平凡なものであつた。

で、唯だ一つ、皇帝が莫斯科に居られた時分の一般の愛國的熱心の状態を憶ひ起させたことは、人と金錢の寄附の募集であつた。そして、さういふ要求は、法的な、公務的な形に纏まつて了まつたので、避け難きものゝやうに見えたのであつた。

敵が段々莫斯科へ近寄つて来るに拘らず、住民の自分等の地位に對して執つた態度は、一向眞劍にはならず、反つて、大きい危険が近寄つて来るのを見る人々の常であるごとく、一層輕佻になつた。

凡そ、危険が近寄る場合には、何時でも、人の心の裡で、均等の力でものいふ一つの聲があるものである。

一つは、甚だ道理にも、その危険の性質と、それを避ける手段とを、考究しろと、人に告げるのであり、他は、尙一層道理な位にも、有らゆる物に對する豫備を爲て、事件の全般的進行を避れることは到底人力の及ぶところで無いのであるから、危険のことを考へるのは、苦しい、惱ましいことである、だから、さういふ苦しい事柄は、いよくそれが現に來て了まふまで、顧み無いで置いて、目前のところは、愉快な事柄ばかり考へる方が宜いのだと云ふのである。

獨居の場合には、人は大抵第一の聲の云ふところに従ふものだが、人なかでは、第二のものに従ふ。今、莫斯科の住民もさうであつた。その年ほど、莫斯科が陽氣であつたことは、それまでは長いこと無いことであつた。

ジン酒店や、波酒子や、莫斯科の職人のカルプウシカ・チイギリソ——「民兵になつて出て、ボナバルトが、莫斯科へ来る積りで居るといふことを聞いて、それに非常に腹を立て、佛蘭西人全體をさん／＼な惡口で罵り、ジン酒店から出て來て、鷲の旗の下に集まつて居た群集に演説し始めた」といふ——の上に字を刷つたラストオブチンの告示が、ヴァシイリ・ルヴ・ヴィーチ・プウシキン(アレクサンドル・プウシキンの伯父)の合韻詩と同なじに、熱心に讀まれ、論評された。

俱樂部の隅の部室へ、會員等は、さういふ告示を讀みに集まつた、そして、或る人々には、カルプウシカに佛蘭西人を嘲弄させた爲方——「奴等は露西亞の甘藍で破裂させられて了まふ、露西亞の粥が奴等の胃を裂いて了まふ、甘藍汁が奴等に止めを刺して了まふ、奴等は衆皆侏儒ばかりだ、村の少娘が、又把で、一人で三人位投げ飛ばすのは譯は無い」といふ言語——が太く氣に適つたのであつた。

或る人々は、それに賛成し無かつた、そして、それは、野卑で間が抜けて居ると云つた。ラストオブチン



は、有らゆる佛蘭西人を、いや、それ所か、一般の外國人等さへ莫斯科から出してしまつたが、さういふ人々の間にはナポレオンの探偵、間諜が居た、といふ話であつた。が、人々は、その時にラストオブチンが云つた警句を繰り返し度いのが主で、その物語を爲たのであつた。ニジニイへ行く帆船に外國人等は乗せられた、そして、ラストオブチンは、彼等に、斯う云つたのであつた——

「貴方がたは、貴方がたの行くべき方へおいでなさい、この帆船にお乗りなさい、この船が貴方がたに取つてのケーロンの船になら無いやうになさい」

それから又、總ての官衙が莫斯科から他所へ移されるといふ話で、それと共に、それだけでは莫斯科はナポレオンに禮を云つて宜いのだと云つたシンシンの戲言が、廣く傳へられた。

マモノフの聯隊は、八十萬留かゝつて居るといふのであつたが、ベズウホフは、彼の聯隊に向一層多くをさへかけて居て、而かも、ベズウホフの愛國心の實に氣高い證據は、自分自ら軍服を着て、觀衆に座席料を一切出させずに、自分の聯隊を統率しようとして居ることだといふのであつた。

「貴下は誰も見のがさ無いのね」と、指輪を一杯箱めて細つそりした指で、裂き落した外科用布を一摘かほ集めながら、ジュリイ・ヅルベエツコイが云つた。

ジュリイは、その次の日、莫斯科を去らうとして居て、別れの夜會を催して居るのであつた。

「ベズウホフは、「可笑しい」ね、ですけども、眞個に人の好人よ、眞個に良い人ですわ、何うして、貴下は、さう「皮肉」であることに愉快を覺えるんですね？」

「罰金」と、ジュリイをニジニイへ伴れて行く筈であつた、そして、ジュリイからは、「私の騎士」と呼ばれて居た義勇兵の制服を着た若漢が云つた。

ジュリイの仲間では、莫斯科の多くの交際團のやうに、今は露西亞語ばかりしか使は無い主義であつた、そして、間違へて佛蘭西語を話した者は、罰金を拂つて、それが、自由寄附金の委員會へ拂ひ込まれることになつて居たのであつた。

「佛蘭西語法に對して今一つ罰金だ」と、居合せた著述家が云つた。「愉快を覺える」は露西亞語ではありませぬね」

「貴下は誰も見のがさ無いのね」と、ジュリイは、著述家の言語には構ひ付けずに、義勇兵に向つて、言語を續けた。

「皮肉は、私宜ござんす」と、ジュリイは云つて、「ですから、私、眞實を貴下がたに話すことの愉快に對して、お金錢を拂ひますよ、いえ、まだそれ以上も拂つても宜いんです、ですが、佛蘭西語法は私の咎ではありませぬわ」と、ジュリイは、著述家に云つた。「私は、公爵ガリイチンのやうに、教師を雇つて露西亞語を教はるだけの間暇も無ければ、又其様なお金錢も有りませぬですもの」

「あ、いらつしやいませ」と、ジュリイは云ひ足した。「コン・ドン……いゝえ、いゝえ」と、義勇兵をおさへ付けて、「なに捕まるもんですかよ」「太陽のことを云へば、その光線が見える」。私どもは、貴下のことを今まで噂して居たところよ」と、ジュリイは、ビエールに向いて、愛想好く微笑んで云つて、それから、社交界の女たちの平氣で虚偽をいふ特質通りに、斯う云ひ足した——「貴下の聯隊が、マモノフのよりも確に好いものになると云つて居たんですよ」

「いや、聯隊の話は最早ご免です」と、ビエールは、女主人の手に接吻して、云つて、その側に腰を下した。「私は最早それには全く飽き／＼してしまつた」



「貴下は、ご自分で、それを指揮なさるんでせう、勿論？」と、ジュリイは、義勇兵の方へ、巧みな、皮肉な眼くばせを爲て、云つた。

後者は、ビエールの面前では、なか／＼さう直ぐ皮肉になれるのでは無かつた、そして、彼の顔容は、ジュリイの微笑は何ういふ意味なのであらうかと、思ひ惑つた氣色を表はした。ビエールは、彼の虚心的に居ることや、人の好いのに拘らず、彼の居ることは、何時でも、彼を笑柄にしようとする一切の企畫を思ひ止らせる力があるのであつた。

「いゝや」と、ビエールは、笑ひながら、自分の圖抜けた大きい體軀を見て、答へた。「私は佛蘭西人から見ると餘まり好い的になり過ぎるだらうし、それに、實際、私は、馬にかき乗ることが能き無からうと思ふんです」

噂話の題目に供せられた人々のうちで、ジュリイの友人たちは、ロストオフ家の人々のことを捉まへた。

「彼の人たちの財政の狀態は、随分氣の毒ですつてね、何でもさういふ噂なんですよ」と、ジュリイは云つた。「それに、伯爵の金費が無茶なんです。ラズウモオフスキイ家が、郊外にあるロストオフ家の家や地面を買はうとしたんです、ですが、未だ極まらずに居ます。伯爵の云ひ價が高過ぎるものですから」

「いや、その賣買は、二三日うちに終つてしまふだらうと、思ふんですが」と、誰か云つた。「最早此頃では、莫斯科にあるものを買ふのは、何を買ふんでも、無茶なことではあります」

「何故なんですか？」と、ジュリイは、云つた。「まさか、莫斯科が危険だなんぞと思つておいでは無いでせうに」

「では、何故貴女はお去りなさるんです？」

「私？。變なお尋ねですね。私の行きますのは、えゝと、私の行きますのはね、誰も彼も行つてしまふからなんですわ。私は、ジャンヌでも、アマゾンでも無いんですからね」

「あゝ、あゝ。裂く爲めの亞麻布を最早一枚ください」

「盲くやれば、負債を拂つてしまふことが能きる筈でせうに」と、義勇兵が、伯爵ロストオフのことを評した。

「彼の人は、極く人の好い老爺ですが、極く馬鹿らしい人なんです」

「だが、何故、彼様に長く此地に逗留して居るんでせう？。最早餘程前に田舎へ發つ筈だつたぢやありませんの。ナタリイは最早元の通り、全然快くなつたでせう、さうぢやありませんの？」と、ジュリイは、微弱な笑顔で、ビエールに尋いた。

「末の子息を待つて居るんです」と、ビエールは云つた。「彼の子息は、オボレエンスキイの哥薩克騎に入つたんです、そして、ビエラ・ツェルコフへ遣られたんです。聯隊が彼地で造られるところでしたもんですからね。けれども、今彼の子息は、私の聯隊へ移されました。で、今日にも着くだらうと思つて居ます。伯爵は餘程前に田舎へ發ち度がつて居たんです、けれども、伯爵夫人が、子息が歸ら無いうちは、何と云つても、莫斯科を離れやうと爲ませんのでね」

「アルハアロフ家で彼の人たちに逢ひましたわ。ナタリイは、最早様子も、元氣も元通りになつてますのよ。彼の人は歌を謡ひました。何様なことでも、随分容易く忘れてしまふ人が世間には随分あるものですね」



「何を忘れて了まふといふんですか？」と、厭な顔をして、ビエールが尋いた。

「あら、伯爵、ねえ、貴下のやうな義侠な騎士たちは、マダム・スウザの小説のなかにあるばかりなんですよ」

「騎士たちですつて。それは、何のことですか？」と、ビエールは、顔を赤くして、尋いた。

「まあ、親愛な伯爵。セラ・ファールブル・ド・ツウ・モスクウ。ジュ・ヴウー・アドミール、マ・パロオル・ドンヌール——彼のことは莫斯科ちうの評判ですよ。貴下にはツクく感心したわ、全くのところ」

「罰金だ、罰金だ」と、義勇兵が云つた。

「あゝ、最早解つてますよ。碌に談話も能きやア爲無い、えゝ、眞個にじれつたいことつたら」

「何が莫斯科ちうの評判だといふんですか？」と、ビエールは、腹立たし氣に云つて、起ちあがつた。

「何ですね、伯爵、貴下はご存じの癖に」

「私は其様なことは何も知りません」と、ビエールは云つた。

「貴下が、何時もナタリーの信友でありなざることを、私は知つて居るもんですから、それで……でも私は何時もヴェーラの方ともつと心安かつたんですわ。あの可愛いヴェーラ」

「いゝや、奥様」と、ビエールは、如何にも切なさうな調子で、云ひ張つた。「私は、少しも、伯爵嬢ロストオフの爲めの騎士の役割を引き受けた譯ではありません、實際、私は、彼の人々には、この一月といふもの一度も逢は無いんです。だが、私が理解することの能き無いのは、殘酷なこと……」

「言ひ分けする人は、後暗い」と、ジュリイは、微笑みながら、云つて、勝ち誇つた態度で、外科用布を振つて、それから、自分の言語限りで、その談話を終らせて了まはうと、直ぐに話題を變へて了まつた。「それは

さうと、あの氣の毒なマリイ・ボルコオンスキイが、昨日莫斯科へ着いたさうぢやアありませんか。貴下は、彼の女が、父親を亡くしたことをお聞きですか？」

「眞個です？。彼の女は何處に居ます。逢ひ度いと思ふんですが」と、ビエールは、云つた。

「昨日の晩彼の女を尋ねましたよ。明日の朝、甥を伴れて、田舎の領地へ行くんださうです」

「あ、左様ですか、で、何ういふ態なんですか？。話してください」と、ビエールは、云つた。

「えゝ、彼の女は身體が何處も悪くは無いんですが、甚く悲しうなんです。ですが、もし、彼の女を救つたのは、誰だと思ひますね？。全く小説です。それは、ニコライ・ロストオフ。彼の女は、圍まれて了まつたんです、その者たちは、彼の女を殺さうとして居て、彼の女の僕婢どもに傷を負はせたとさ。其所へ、彼の男が飛び込んで行つて、彼の女を救つたんです……」

「又一つの小説だ」と、義勇兵が云つた。「この總逃走は、老嬢たちを悉皆残らず結婚させて了まふ爲めらしいんですな。カティツンが第一、公爵嬢ボルコオンスキイが第二」

「ねえ、もし、私は眞個に、彼の女はウン・ブテイ・ビウ・アムウリュウズ・デュウ・ジュンヌ・オンム——彼の若い男を少し戀して居るんだと信するんですよ」

「罰金。罰金。罰金」

「だつて、露西亞語でこれが何うして云へるんですか？」

(十八)

ビエールが、家へ歸ると、今出たばかりのラストオブチンの告示を二つ渡された。



第一のは、莫斯科を去ることが、伯爵ラストオプチンの命令で禁ぜられたといふ風説は虚報であつて、彼は、反つて、貴婦人たちや、商人の妻等が市を去りつゝあるのを喜ぶといふことを宣言して居た。「さうなれば、周章も少くなれば、虚報も少くなる」と、告示が云つて居た、「が、予は、暴行者等が決して莫斯科へ入つて来ぬことは、生命を賭けて保証する」

「さういふ言語は、こゝに初めて、佛蘭西人が莫斯科へ入つて来るに違ひ無いことを、瞭乎とビエールに示した。

第二の布告には、吾が軍の本營は、ヴィヤズマにあり、それから、伯爵ウィットゲンスタインが佛蘭西人を破つたのだが、莫斯科の住氏は自ら武装し度がつて居るのだから、兵器廠で、その求に應ずるやうに爲てある、劔や、拳銃や、銃が、其所で、廉い價格で得られるといふことを、云つてあつた。

この布告の調子は、チイギリンの想像の演説を載せた前のものゝやうな冗談半分のものでは無かつた。その二つの布告は、ビエールを考へ込ませた。恐しい暴風雨雲——その到来は、我知らずの恐怖の戦慄を起すのであつたに拘らず、その到来をビエールは心の底から待ちこがれて居た——その雲が、今だん／＼近寄りつゝあることは、彼には、瞭乎であつた。

「軍隊に入つて、軍に加はることにしやうか、それとも、此地で待つて居やうか？」と、ビエールは考へた——これは、彼がこれ迄に最早百度も自ら問うた問であつたのだ。彼は、ペーシエンスの勝負に對して配ける爲めに、卓子の上に在つた一揃の骨牌を取り上げた。

「このペーシエンスの勝負が旨く行けば」と、彼は、獨りで云つて、手に持つて居るその骨牌を切つて、上を見あげた、「旨く行けば、それは……いや、それは、何ういふことならう？……」

この疑問を決してしまふ間隙の無いうちに、彼は、書齋の戸口で、入つて宜いかと尋く一番年上の公爵嬢の聲を聞いた。

「さうすれば、それは、俺が軍に加はる爲めに出發し無ければならぬことを意味するんだぞ」と、彼は、自分に向つて云つた。「おいでなさい、お入りなさい」と、彼は、公爵嬢に云つた。

ビエールの従姉妹たちのうちで、未だビエールの家に居るのは、その一番年長の、胸の長い、石のやうな顔の女の公爵嬢一人ぎりであつた、二人の妹等は兩方とも結婚して居た。

「お邪魔をして済みませぬ、お従兄」と、公爵嬢は、責めるやうな、氣の昂つた調子で、云つた。「ねえ、眞個に、何とか極め無ければならぬぢやアありませんか。一體何うなるんですか？。誰も彼も、莫斯科を去つてしまひますし、人民は亂暴しましたぢやアありませんか。何だつて吾々は残つて居るんですか？」

「いや、何うして其様なことがあるのですか、何も彼も満足に行て居ますよ、「吾、従妹」と、ビエールは、彼が、公爵嬢に對する恩惠者の位地にあるが爲めに何時も感じるモチ／＼する心持を他所へ持つて行つてしまふ爲めに、従姉妹に對しては、これまで裝つたのであつた何時もの冗談らしい調子で、云つた。

「え、左様です、満足に……非常に満足に、え、左様なんでせうよ。ヴァルヴァライヴァーノヴァから、今日私が聞きましたんでね、吾が軍は目覺しい働をして居るんださうですね。それは、眞個に彼等の名譽です。それに、人民が、又、全く謀叛してしまつたんですよ、彼等は最早誰の命令にも従は無いんです、私の下婢さへ、無禮なことを爲だしたんですわ。若し、このまゝで行けば、人民は最早直きに吾々を殺し始めるでせう。街なんぞ最早安心しちやア歩かれ無くなりましたわ。それに、尙甚いことには、佛蘭西人がもう二三日うちには、此地へ来てしまふといふぢやアありませんか。何だつて、吾々は、彼等の来るまで待つて



るんです。後生ですからね、「吾從兄」と、公爵嬢は云つて、「私を彼得堡へやつてくださるやうに命令を出してくださいよ、私は何様な者にしろ、私は、ボナバルトの支配の下で暮すことは、何うしたつてもできません」

「でも、下らんことを云つちやアいけません、「吾從妹」、貴女一體何處から其様なことを聞いて来たんです。其様なことは全然無い事で……」

「私は、貴下のナポレオンには従ひませんよ。他の人々は何うともするが宜い……貴下が、私のお願を聞いてくださる無いら……」

「いや、宜しい、直ぐさういふ命令を出します」

公爵嬢は、怒り付けてやる相手が無いのに、確に、當惑して居た。何か口の内で云ひながら、椅子の縁に坐つた。

「だが、貴女は愚なことを聞いて来たんです」と、ピエールは云つた。「市は、極く平穩です、何の危険もありませんよ。ご覧なさい、今讀んだところなんですが……」と、ピエールは、布告を公爵嬢に見せた。「伯爵は、敵が決して莫斯科へ入らぬことは、自分の生命を賭けて、保証すると、書いて居るぢやアありませんか」

「え、貴下のご最負の伯爵ですか」と、公爵嬢は、意地悪さうに、始めて、「彼の人は、偽善者よ、自分から愚衆を煽動して騒ぎ出させた悪漢ぢやアありませんか。彼の人は、彼の人の愚劣らしい布告の内、愚衆どもは、誰でも構はず、捉まへて、髪を持つて、牢獄へ引摺つて行けと書いたぢやアありませんか（眞個に愚劣らしいつちやア無い）。名譽と、光榮が、さう爲る人に歸すると、云つてますわ。で、到頭此様なところか」

「あ、まア宜しい……貴女は何でも心配し過ぎて不好い」と、ピエールは、云つて、ベーシエンスを配り始めた。

その勝負は旨く行つたけれども、ピエールは、軍に加はる爲めに出発し無かつた、そして、今はドンク人の居無くなりつゝある莫斯科に止まつて居て、尙且前と同じ煩悶と、不定と、心配と、同時に、恐しい何物かを待ち設ける喜ばしい心持を、有つて居た。

次の日、公爵嬢は、晩方出發した、そして、ピエールの執事長が、領地を一箇所賣らなければ、聯隊の武裝に對する金銭を調達することは到底不可能だといふことを、ピエールに知らせに來た。執事長は、この聯隊に關する狂熱は、必然ピエールを破産させるやうになるといふことを、大擾みにピエールに承知させた。ピエールは、執事長の話を聞いて居るうち、微笑を隠すことが能き無かつた。

「宜しい、では、賣れ」と、彼は云つた。「最早爲やうが無いぢや無いか、俺は、最早退く譯にやア行かん」事態が悪くなればなる程、特に自分自身の事情が悪くなればなる程、ピエールはますます嬉しい心持になるのであり、そして、彼が待ち設けて居た大危機がいよゝ近づいて來たことが彼にはますます明白であつた。ピエールの入懇な人々は殆ど誰も市には止まつて居無かつた。ジュリイは、去つて了まつた、公爵嬢マリイも去つて了まつた、彼の極く入懇な人々のうちでは、止まつて居るのは、唯だロトストオフ家の人々きりであつた、が、ピエールは、彼等を訪ね無かつた。

その日、氣晴しをする爲めに、敵に向つて用ゐる爲めにレピッチが造りつゝあつた大風船と、次の日揚げ



る筈であつた試験的の風船を見やうと、ヴォロンツォヴァの村へと、馬車を驅つた。風船は未だ出来あがつて居無かつたが、ピエールが知つたところでは、それは、皇帝の思召で造られて居るといふのであつた。皇帝は、次のやうな言語で、そのことを伯爵ラストオブチンにまで書かれたのであつた。

「レピッチの用意が能きるや否や、彼の車に對する乗組員は、飽くまで信頼の能き者、才智のある者どもを集めるやうに爲て呉れ、そして、前以つて、將軍クツウゾフのところへ知らせの使者をやつて呉れ。予は彼に、そのことは既に云つて置いた。レピッチに、彼が始めて降りる所は、十分慎重に見て置いて、他所へ逃つて行つて、敵の手に落ちるやうなことの無いやうに善く吩咐けて置いて呉れ。彼が、總司令官の行動に合せて、彼の行動を整へて行くことが必要である」

ヴォロンツォヴァからの歸りに、ピエールは、ボロオツニイ廣小路を通つた、と、ロオブノエ刑場で人だかりがして居るのが見えたので、止まつて、馬車から降りた。群集は、間諜だと云つて罪された佛蘭西人の料理人の答刑を見て居るのであつた。答刑は今終つたばかりのところであつた、そして、それを行なつた男が、答刑柱から、青い靴足袋の、緑色のチュウニクを着た、肥つた、赤い頬鬚の男の、うん／＼唸つて居るのを、解き放して居るところであつた。今一人の犠牲の、瘡せた、顔の蒼い男が、傍に立つて居た。二人とも、その顔で判断すれば、佛蘭西人であつた。瘡せた佛蘭西人の顔のやうな絶望的な恐怖の顔で、ピエールは、群集を推し分けて進んだ。

「何だね？。彼の者どもは何ういふ人だね？。何の爲めだね？」と、彼は、尋き續けた。が、群集——小官吏、職人、商人、農夫、外套や短上衣の女ども——の注意は、ロオブノエ刑場で行はれて居る事件の方へ烈しく引き付けられて居たので、誰も答へ無かつた。

肥つた男は、起ちあがつて、顔を擧めて肩を揺すり、それから、忍耐的の勇氣を見せやうとするらしい様子で、四圍を見ずにチュウニクを着はじめた。が、不意に、唇が戦へた、そして、自分の不甲斐無さを怒りながら、彼は、短氣な氣質の男が泣くやうに、泣き始めた。群集は聲高に話し始めた、それは、各自の心の裡の憐愍の感情を没却してしまふ爲めであつた——さうピエールには思はれたのであつた。

「或る公爵の料理人……」

「え、もし、旦那、露西亞のソオスは佛蘭西人の胃にやア少し強すぎますなア……がた／＼戦へあがらしちまうです」と、ピエールの傍に立つて居た數だらけの顔の小官吏が、佛蘭西人が泣きだした途端に、云つた。小官吏は、自分の警句を認めて呉れる様子があるかと、四圍を見廻した。五六人は笑つた、が、或る者どもは、尙且、二人目の佛蘭西人を裸體にしつゝある、それを答うたうとする男を、ギョツとしながら、見詰めて居た。

ピエールは、氣息が塞まり、顔を擧めた、そして、急に振り向いて、途上尙且何か獨語を云ひながら、馬車のところへ歸つて行つて、そのなかへ座を占めた。それから後の歸途、彼は幾度もハツと驚き起つた、そして、餘り大聲で怒號するものだから、馭者は到頭何うしろといふのかと、ピエールに尋いた。

「何處へやるんだ？」と、ピエールは、馭者がルウビヤンカへと馬車を驅つて居た時に、怒號つた。

「總督の所へやれと仰しやいましたんで」と、馭者は答へた。

「愚人。呆人奴」と、ピエールは、馭者を罵つた——これは、彼の滅多にやら無いことであつたのだ。「家へ歸れと云つたぢやア無いか、急げ、痴人。今日直ぐ何うしても發つぞ」と、ピエールは、自分自身に向つて云つた。



苛責された二人の佛蘭西人と、ロオブノエ刑場の周囲の群集を見て、ピエールは、彼は最早何うしても莫斯科に止まつて居ることは能き無い、直ぐその日軍に加はる爲めに出發し無ければならぬと、決心したのだが、その決心は、彼には、彼がさう馭者に云つたか、で無くも、馭者の方でそれを知つて居るべき筈のやうに、思はれた程、それ程端的なものであつたのだ。

家へ歸り着くと、ピエールは、莫斯科ぢうで知らぬ人の無い、彼の全知、全能の馭者のイエフスタフィイチに、自分はその晩モザアイスクへ馬車で行つて軍に加はるといふことを云ひ、それから、自分の乗馬を數匹其所へ遣つて置けといふ命令を與へた。それだけのことは、到底一日で能きることでは無かつた、で、イエフスタフィイチの説明で、ピエールは、先へ乗換馬を送つて置けるだけの時を與へる爲めに、次の日まで出發を延ばすやうに、説き付けられた。

二十四日は、悪い天氣の後での麗らかな日であつた、そして、その日の正餐後に、ピエールは莫斯科から出發した。夜になつて、ベルフウシコヴァで馬を換へる時に、ピエールは、大戦闘がその夕方有つたことを知つた。ベルフウシコヴァでさへ、地が砲聲の爲めに揺いだといふ話であつた。その戦闘は勝利か、敗北かといふピエールの間に答へる者は誰も無かつた。

これは、シヴアルディノに於いての二十四日の戦闘であつた。

曉方ピエールはモザアイスクへ近付いた。軍隊がモザアイスクの有らゆる家を宿舎にして居た、ピエールが、彼の馭者と馬丁に迎へられた旅舎には、明けることの能き部屋は一つも無かつた、家ぢう將校等で一杯であつた。

モザアイスクから前方は、何處でも軍隊が駐まつたり、行進したりして居た。哥薩克騎や、歩兵や、騎兵

や、輻重馬車や、砲車や、砲が、何處にもあつた。

ピエールは、全速力で進んだ、彼は前方へ行けば行く程、そして、兵士のこの大洋の裡へ深く跳び込めば跳び込む程、不安と新しい心持の好い感との戦慄がますます強くなるのであつた。それは、彼が皇帝の行幸の時にソロボツスキイ宮で感じた感覺——何等かの處置に出で、何等かの犠牲を拂ふ必要が何うしてもあるといふ感覺——に似寄つたものであつた。

彼は、人生の幸福を組成して居る總ての物、安樂、富、生命その者さへ、悉く塵埃であり、灰であつて、その他の何物かに比べては、それを投げ捨てるのが、喜ばしいことなのだといふ嬉しい感を、今は覺えて居た……。

その他の何物か、何であるのか、それは、ピエールには分ら無かつた、その上に、彼は、誰の爲めに、何ういふ目的に對して、有らゆる物を犠牲にすることが、さういふ特別な喜びを覺えさせるのか、それに就ての瞭乎した觀念を得やうと力めは爲無かつたのであつた。彼は、犠牲の對象を知ることなどは何うでも構は無かつた、犠牲を拂ふといふその事自體が、新しい喜ばしい感覺を彼に與へたのであつた。

(十九)

二十四日に、シヴアルディノの砲壘の前での戦闘があつた、二十五日は、兩軍の間に一發の砲火も交換され無かつた、二十六日に、ボロディノの戦闘が行はれた。

何うして、何ういふ目的で、シヴアルディノとボロディノの戦闘が行はれたのか。何故ボロディノの戦闘が行はれたのか。佛蘭西人にとつても、又、露西亞人にとつても、それには何の意義も無いのであ



つた。その戦闘の直接の結果は、下のやうなものであり、又何うしてもさうあるべき筈であつたのだ——即ち、露西亞人に取つては、それは、吾々が(事も有らうに、吾々が世の中で何より一番恐れて居たその事の)莫斯科の滅亡の方へますます近く持つて來られたこと、であり、又、佛蘭西人に取つては、それは、彼等が(事も有らうに、彼等も又世の中の何よりも一番恐れて居たその事の)彼等の軍の滅亡にますます近く持つて來られたことであつたのだ。さういふ結果は、その當時に於て、全く瞭乎であつた、それなのに、ナポレオンは戦闘を挑み、クツウゾフはそれに應じたのだ。

將帥なるものが理詰の考慮ばかりで行動するものであるとすれば、國の奥へ二千露里も入り込んだ上で、多分自分の兵の四分の一を失ふといふ結果を豫期し無ければならん状態に於て、戦闘を開けば、自分は必然の滅亡に陥り行くのだといふことは、何うしても、ナポレオンには明瞭な事であつた筈だと思はれるし、又、その挑戦に應じて、自分の軍の四分の一を失ふ危険を冒せば、自分は必ず莫斯科を失ふに至るに違ひ無いといふことが、何うしても、又同なじやうにクツウゾフにも明瞭なことでは無ければなら無かつた筈だと、思はれるのだ。クツウゾフに取つては、若し、自分の持駒が、敵手より一個少い場合であつて、駒を換へれば、自分の方が必ず負けになる、だから、何うしても、駒を換へることを避け無ければ不好ないといふことは、將棋の場合と少しも異ならず、數學的に明瞭であつたのだ。

自分の敵手が十六駒を持ち、自分が十四駒を持つて居る時には、自分は、敵手よりは唯だ八分の一だけ弱いばかりであるのだが、若し、駒を十三交換へたとすると、敵は、自分よりも三倍強くなるのだ。

ボロディノオの戦闘までは、我軍は、佛蘭西軍の大凡六分の五であつた、が、その戦闘の後では、僅に敵の二分の一であつた——即ち、その戦闘の前には、敵十二萬に對して我は十萬であつた、而るに、その戦闘の後では、敵の十萬に對して我は五萬であつた。それなのに、拔ら無い、經驗に富んだクツウゾフがその戦闘を行つた。

所謂軍事上の天才なるナポレオンは、自分の方から戦闘を開いて、軍の四分の一を失ひ、そして、ますます聯絡線を延長させたのであつた。所で、彼は、莫斯科を取りさへすれば——維也納を取つた時と同なじやうに——この戦役が終結すると豫期して居たのだと、云ふ人があるとしても、吾々はその反證を幾つも擧げ得るのだ。現に、ナポレオンの傳者等が、ナポレオンはモレエンスタクに達するや否や、其所ざりて止まつて了まはうと思つたことや、彼が聯絡線の廣がることから來る危険を知つて居たことや、それから又、モレエンスタクの狀態からして、彼は、彼の手に委ねられる市が何ういふ状態にして捨てられるかを知り、そして又、和議の談判を開き度いといふ希望を幾度も表明しても、それには一度の返答も來無かつたが故に、彼は莫斯科を取ることがこの戦役の結末では無いことを知つて居たことを、吾々に語つて居るでは無いか。ボロディノオで、戦闘を挑んだ事や、それに應じたことに於て、クツウゾフもナポレオンも、何等の企畫無く、何等合理的な方略無くして、行動したのであつた。事件が出来あがつて了まつてから、歴史家等は、將帥等の先見や天才を證明する爲めに巧に拵へ上げたさまざまの證據を持ちだして居るのだ、然し、焉んぞ知らん、さういふ將帥等は、世界の歴史の爲めに知らず、道具になつて働く總てのもの、なかで、一番奴隸的な、最も獨立の少い代理者に過ぎ無いのだ。

古代の人々は、歴史の全利害が二三の勇者の人物に集中するところの叙事詩の幾つもの例を吾々に傳へて居る、で、その感化を受けて、吾々は、さういふ種類の歴史は、人間の發達の今日の時代には無意味なものであるといふ觀念に、吾々の心を慣さして了まふことが、未だ能き無いで居るのだ。



何ういふ風で、ボロディノオとシニヴァアルディノの兩戦が戦はれたのかといふ間に對する答としては、吾々は、極く極まつた、誰にも知られて居る、全く虚偽の記述を持つて居る。總ての歴史家が斯う述べて居るのだ。

露西亞軍は、スモレンスクから退却しながら、總戰團に對する最も良い地點を覓めて居た、所で、さういふ地點を、彼等は、ボロディノオで見付けた。

露西亞人は、海道（莫斯科からスモレンスクに至る）の左側に於て、海道に直角を爲してボロディノオからウテイイツァまで、即ち、戰團が後に至つて行はれたその地點に於て、前以つて其所に防禦工事を施したのであつた。

この地點の前面に於て、敵の行動を監視する爲めの前壘として、シニヴァアルディノ丘の上に、砲壘が築かれた。

二十四日にナポレオンは、この砲壘を攻撃して、それを陥れた。二十六日に、彼は、その時ボロディノオの平原に陣地を占めて居た露西亞の全軍を攻撃した。

歴史が吾々に語るのは、さうである、所が、それは悉皆、この事件を研究する氣のある人々には直ぐ容易に分る通りに、残らず全然事實と違つて居るのだ。

露西亞人は、最も良い地點を覓めし無かつた、彼等は、反つてその反對に、彼等の退却の途すがらボロディノオより良い地點を幾つも通り越して了まつたのだ。彼等は、さういふ地點の一つにも踏み止まら無かつたのだが、それは、クツウゾフは、自分の選ば無かつた地點を守る氣の無かつたからであり、戰團を開かうといふ軍の輿論的喧擾が未だそれ程強く表はれ無かつたからでもあり、ミロラアドヴィーチが未だ民兵の援

軍を率ゐて來無かつたからであり、尙其他無數の理由に基いたものであつた。

右に左、露西亞軍が通つた路には、ボロディノオより強い地點が幾つもあつたことや、戰團が行はれたボロディノオの平原は、何の點から云つても、他に優つた地點では無いのであつて、ボロディノオ位なところならば、露西亞帝國の地圖の何の點を手當り放題に指しても、其地がボロディノオに劣らぬ地點であるといふことは、争ふべからざる事實であるのだ。

道路から左の地點——即ち、戰團の行はれた地點——に、道路に直角をなして、防禦工事を施すところか、露西亞人は、千八百十二年の八月二十五日までは、その地點で戰團があらうなどは、夢にも思は無かつたのだ。

この證據には、第一に、二十五日以前には少しも防禦工事が施されて居無かつて、その日に始められた胸壁は、二十六日には出來あがつて居無かつたのだ。

第二には、シニヴァアルディノ砲壘は、その位置が、戰團が實際に行はれた地點の前面にあつたが爲めに、實際上何等の價値も無かつたのだ。所で、何ういふ目的で、その砲壘が他の何れの點よりも強く築かれて居たのか、それから、又、何ういふ目的で、二十四日の夜遅くまでそれを守る爲めに、有らゆる力が盡くされ、六千の兵が、それが爲めに犠牲にされたのか？。敵の行動を監視する爲めなら、少數の哥薩克騎の前哨で足りたらうでは無いか。

それから、第三の證據、即ち、戰場の位置が豫想されて居無かつたこと、シニヴァアルディノ砲壘がその位置の最先頭の地點で無かつたことは、バルクレード・トオリイとバグラアチオンが、二十五日まで、シニヴァアルディノ砲壘は、自分の軍の陣地の左翼であるといふ印象の下にあつたことや、クツウゾフ自身が、その



戦闘の後大急ぎで書いた報告の中で、シヴァアルディノのことを陣地の左翼と云つて居ることのうちに見出されるのだ。

で、餘程後になつて、その戦闘の報告が緩然書けるやうになつてから、實際は唯だ左翼の防禦工事を施した地點であつたシヴァアルディノをば、前衛に充てたものだとか、ポロディノの戦闘は、實際は、全く豫想されて居無かつたし、そして、殆ど防禦工事を施して無かつた陣地で戦はれたのであるのに、それをば、吾はそれに對して豫じめ選んだ、防禦工事を施した陣地で戦つたものだとか、いふやうな、事實と違つた奇異な記述が——總司令官といふものは、決してやり損ひを爲無いなものだと思はれ無ければならぬものであるから、多分その總司令官の失策を掩ふ爲めなのであらうが——發明されたのであつた。

その戦闘は明白に斯ういふ風に、起つたのだ。陣地が、直角では無く、鋭角を爲して、海道を横断つて居るカロオチャ河の縁で、占められた、で、左翼がシヴァアルディノにあり、右翼がノオヴォエにあり、カロオチャとヴォイナの二川の合流點のポロディノが中陣であつたのだ。誰でも、ポロディノの平原を見れば、その戦闘が何ういふ風に戦はれたかを考へずとも、カロオチャ川に掩護されたこの陣地を取る譯だ、スモレエンスク海道を莫斯科へと進んで来る敵の進入を喰ひ取るのを目的とする軍の陣地は何うしてもさうなら無ければならぬことは、極めて見易いことなのだ。

ナポレオンは、二十四日に、ヴァルエフへ乗り附けて、(歴史に云つてあるやうに、ウティツァからポロディノに互る露西亞人の陣地を見たのでは無い、其様な陣地は無かつたのであるから、それを見やうは無かつたのだ)、又、露西亞軍の前衛を見たのでも無かつた、が、彼は、露西亞軍の後衛を追撃して居るうちに、測らず、シヴァアルディノ砲壘に於ける露西亞の陣地の左翼に行き當つたのだ、そして、露西亞人の驚愕

いた事には、彼の軍隊が、カロオチャ川を渡つて了まつた。所で、露西亞人の方は、總戦闘は最早間に合は無いのであつたから、自分等が占領しやうと思つて居た地點から左翼を退けて了まつて、豫想して居無かつた、そして、防禦工事の無い、新たな陣地に就いたのであつた。

海道(海道の左側)で、カロオチャ川の左岸へ渡つて、ナポレオンは、全戦闘を右から左へ(露西亞軍の方から見て)と移して、ウティツァと、セミョオノフスコエと、ポロディノの間の平野へ、それを持つて行つた——その平野それ自身は、露西亞の何の平野に比べても別に優つたところの有る譯では無い地點なのだ——で、その平野に於て、二十六日の戦闘全體が戦はれたのだ。

下に、想像された戦闘と實際の戦闘の略圖を與へて置く。

ナポレオンが、二十四日の夕方にカロオチャに達し無かつたのであつたら、彼が、その夕方その砲壘





を攻撃する事を命じ無いで次の朝攻撃を始めたのであつたら、何人も、シニヴァアルディノ砲壘が、露西亞軍の陣地の左翼であつたことを疑は無かつたらう、そして、戦闘は、吾々が豫期して居た通りに行はれたらう。その場合に於ては、吾々は多分吾々の左翼で向一層頑強にさへシニヴァアルディノ砲壘を防守したに違ひ無かつたのだ、吾々は、敵の中陣若くは右側でナポレオンを攻撃したに違ひ無かつたのであつたらう。そして、總戦闘が、豫定が、攻撃が、我軍の後衛が退却した後、即ち、グリドネヴァの戦闘の後直ぐに、夕方に加へられたので、それから、露西亞の將軍たちは、二十四日の夕方に總戦闘を始めることを欲せず、又能きもし無かつたので、ボロディノオの戦闘の最初の且最も重要な戦闘が露西亞軍の敗に歸した、そして、その敗北が、二十六日に行はれた戦の敗北を避け難く来たしたのであつた。

シニヴァアルディノ砲壘の陥落後、我軍は、二十五日の朝には、左翼をその陣地から撃攘された状態に立つて居た、で、我軍の陣地の左翼を引込めて、急いで、何處でも構はず能ざる所で、その防禦工事を施さなければ無らぬやうにされたのであつた。

それであるから、八月の二十六日には、露西亞軍は、僅に、弱い、未完成の土壘で防がれて居たのであつたし、且、その陣地の不利益は、露西亞の將軍たちが、陣地に關する諸事實（左翼に於ける陣地の陥落と、その後の全戦場が右から左へと移つたこと）を十分に認めて居無いで、ノオヴェからウティツァに到る延長した陣形を更へ無いで居たので、それが爲めに、戦闘中に、自分等の兵を右から左へ移さなければなら無かつたといふ事實に因つて、一層大きくされたのであつた。

だから、我軍は、その全戦闘の間、我軍の左翼をば佛蘭西の全軍が攻撃し來るに對して、その軍力の半分

の我軍を以つて、それに當ら無ければなら無かつたのであつた。

（ウティツァに面してのボニヤトオフスキイの戦闘や、佛蘭西軍の右翼に對するウヴァーロフの戦闘は、その戦の全般的進行とは、無關係のものであつたのだ）

で、斯ういふ風に、ボロディノオの戦闘は戦はれたのであつて、決して我國の歴史家等が、我軍の司令官等の失策を掩はんが爲めに、叙して居るやうなものでは無かつたのだ、だから、さういふ歴史家等の記述は、露西亞軍及び露西亞人民の功績を減じて居るのだ。ボロディノオの戦は、露西亞の方が唯だホンの少し弱い位の軍力で、注意して選んだ、防禦工事を施した陣地で、戦つたといふのは無い。シニヴァアルディノ砲壘の陥落後、露西亞人は、掩屏の無い、殆ど防禦工事の無い陣地で、佛蘭西の軍力の半分にしきや當らぬ軍力で、即ち、十時間戦つて、交戦戦にしようといふのが、無法であつたのは勿論、眞の潰亂に陥ら無いやうに、軍を三時間保つて置くことは信じ難い程困難であるやうな諸状況の下に——戦つたのであつた。

(二十)

二十五日の朝、ピエールは、モザアイスクから馬車で出た。大きい、險しい丘の、折れ曲つた坂——市から出て行く路——の上で、ピエールは、馬車を下りて、禮拜式が行はれて居た丘の右に在る大きい寺院の傍を歩き過ぎた。

樂隊を先頭に立てた騎兵の聯隊が、ピエールの後に附いて丘を降りて居た。前日の戦闘の負傷者を一杯載せた荷馬車の一列が、彼等の方へと、丘を登つて來た。馭者の農夫等は、始終彼方此方と駆け廻つて、叫んだり、馬を鞭つたりして居た。一輛毎に三四人の負傷兵が臥たり坐つたりし



て居た幾つもの荷馬車は、道路を繕す爲めに険しい上り坂の上に投げ散してあつた石の上で、ガタリゴトリと上下に揺られた。蒼い顔をした、縋帯した、口を結び、額を撃めた負傷者等は、荷馬車の裡で揺られ、ハネ上られるので、縁へ確乎とかじり付いて居た。彼等の殆ど全體が、ビエールの白い帽子と緑色の上衣とを、無邪氣な、小兒のやうな、物珍らしさうな風で、見詰めた。

ビエールの馭者は、道路の片側を通れと、負傷者の列に向つて、奮然となつて怒號つた。軍歌に合せて丘を降つて来た騎兵の聯隊が、ビエールの馬車に追ひ付いた、そして、路を塞いで了まつた。ビエールは止まつて、丘の裡へ掘れ込んで居た道路の縁へとピツタリくつ付いた。日は、丘の側を越えて道路へ達し無かつた、で、其所は冷くつて、濕つほかつた。が、頭上は、晴れ渡つた八月の朝であつて、鐘の聲が陽氣に響き渡つた。

負傷者を満載した一つの荷馬車が、道路の縁のビエールの直ぐ傍で、ピツタリ止まつて了まつた。木皮靴を穿いた馭者が、喘ぎながら、自分の荷馬車へと駆け寄つて、輪鐵の無くなつて居た後輪の下へ石を支つた、そして、馬の尻帯を直し始めた。

吊腕帯で腕を吊つて、馬車の後を歩いて居た一人の負傷した老兵が、負傷して居無い方の腕で馬車を捉へた、そして、ビエールの方を振り返つた。

「もし、同國人、吾々は此所へ置かれるでせうか、それとも、莫斯科へ伴れて行かれるでせうかね？」と、彼は云つた。

ビエールは、餘まり考へ込んで居たので、その問が聞え無かつた。彼は、今負傷者の一行と行違つて居た騎兵聯隊からして、二人の負傷者が坐つて居、一人が臥て居る、自分の傍の、馬車へと眺めた。

馬車の裡に坐つて居る兵卒のうちの一人は、頬に負傷して居るらしかつた、頭部全體が、縋帯で包まれて居て、一方の頬が、孩兒の頭程大きかつた。口と鼻は全部一方へ曲つて居た。この兵卒は、大きい寺院の方を見て、十字を切つて居た。

今一人の、若者、瘡せた顔に血の一滴も無いかのやうに見える程眞つ白な、亞麻色の髪の新兵は、見詰める、人の好きさうな笑顔で、ビエールを眺めて居た。

第三の者は、顔が見え無いやうな風に、臥て居た。騎兵聯隊の謠歌者たちは、負傷兵の馬車の直ぐ傍を通つた——

「あゝ。ザ……プロ……バ……ラ……」

「さなり、外つ國に住みて」と、聲々が響いた、彼等は、軍隊の舞踏歌を諷つた。彼等に聲を合せるかのやうに、違つた陽氣な調子ではあつたが、丘の頂で、鐘の金屬の音律が鳴り渡つた。そして、日の熱い光が、彼方の坂の頂へ、陽氣の他の調子で燦めく日光を浴せた。が、ビエールが負傷兵を満載した馬車と喘いで居る小さい馬の傍に立つて居た、丘の腹の所は、濕つほく、陰氣で、物寂しかつた。

頬に負傷して居た兵卒は、諷つて居る騎兵等を、腹立たしさうに見た。

「うゝん、洒落者奴等」と、彼はたしなめるにやうに、呟いた。

「兵ばかりぢやア無えですよ、私が今日見たなア、農夫までもななくて、農夫も狩りあけられてるだ」と、馬車の傍に立つて居た兵卒が、悲しさうな笑顔で、ビエールに話しかけて、云つた。「最早誰彼と選り好みなんぞして居られ無えだね……人民な悉皆残らず狩り集めるだね——莫斯科が大切なんだからねえ。最早今ぢやア、爲ることは唯んだ一つしら無えだね」



兵卒の言語は曖昧なものであつたに拘らず、ピエールは兵卒の云はうとして居た意味を十分に掴んだ、そして、賛成さうに頭を頷かせた。

道路は、又明いた、で、ピエールは、坂を歩み下りて、馬車を進めた。  
 ピエールは、誰か知つて居る顔が見えはせぬかと、道路の兩側を見ながら、進んだが、さまざまな聯隊に屬する知らぬ軍人の顔ばかりにしか出會は無かつた、そして、さういふ顔は悉皆何れも同なじ驚愕で、ピエールの白い帽子と、緑色の上衣を見て居た。

四露里行つてから、始めて、彼は、知人に出會つた、そして、嬉しさうに挨拶した。それは軍醫部の長の一人の醫者であつた。彼は、車蓋のある二輪馬車——彼の傍に若い醫者の坐つて居る——で、ピエールの傍へと、乗り附けた、そして、ピエールを認めるといふと、馭者臺に坐つて居た哥薩克騎に聲を掛けて、馬車を止めさせた。

「伯爵、閣下、何うして貴下が此所へおいでなすつたんです？」と、醫者は尋いた。

「え、見度いと思ひましてね……」

「いや、成る程、見るものはなく、有りますぜ……」

ピエールは、馬車から出た、醫者と談話を爲やうと立ち止まつて、戦に加はらうと思ふ自分の考案を彼に説明した。

醫者は、直接に殿下の所へ行くと、ベズウホフに勧めた。

「ねえ、戦の間では、何處へ行つちまうか分からんですよ、見え無くなつてしまふ」と、彼は、自分の若い同行を一寸と見て、云つて、「で、殿下は右に左貴下を知つて居るから、親切に貴下に接するでせう。私な

らさういふ風に爲ますね、伯爵」と、醫者は云つた。

醫者は、疲れて、急いで居るやうに見えた。

「さういふ考ですか……だが、今一つ伺ひ度い、一體何ういふ陣形なんですか？」

「陣形？」と、醫者は云つた、「いや、それは、職掌違ひで、私には解らんです。タタアリノヴァへ行つてご覧なさい、彼所は盛に地を掘つて居ます。で、小高い所がありますからね、其所から見渡せます」と、醫者は云つた。

「其所から見渡せる？……が、若し、貴下が……」

けれども、醫者は遮ぎつた、そして、二輪馬車の方へと動いた。

「ご案内を爲度いんだが、でも、實際、ご覽の通り」(醫者は、善く解る身振を爲た)「軍團長の所へ駆け附けるところなんです。吾々は、實に非常な窮地に立つて居ますよ、ねえ……ねえ、伯爵、明日戦がある筈でせう、十萬の兵に對しては、吾々は、少くとも二萬の負傷者を見込んで置か無きやアならんです、所が、六千に對するだけの、擔架も、寢臺も、看護人も、醫者も有りませぬわい。馬車は一萬有ります、けれども、吾々は、他の物が要るんです、まア、能きるだけやつて見るより外ありませんよ」

彼の帽子を彼様な陽氣な心持で面白さうに見詰めて居た、生々とした、健康な、若い、年老つた人々の何千とも知れぬ者どものうちで、二萬が、負傷と死にまで避け難く運命づけられて居るのだ(彼が見たその同じ人々までも或はさうなのであらう)といふ奇異な觀念が、ピエールに非常な印象を與へた。

「彼の人々は明日死ぬか知れ無いのだ、何うして、彼の人々は、死より外のことが考へ得られるんだらうか？」



で、不意に、これまで心に潜んで居た観念の何うかした結合で、モザアイスクの丘の半腹や、負傷者の荷馬車や、鐘の音や、傾の日光や、聯隊の諺の現然とした繪を見た。

「彼の人々は、戦に出て行くのであつた、そして、負傷兵に遭つたのだが、自分等のそれから後に出會ふべきことを、一分でも止まつて考へはせず、負傷した戦友等の傍をツンツン通り過ぎながら、それに向かつて隣を爲たのみであつた。彼様いふ人々のうちで、二萬は死にまで運命づけられて居るのだ、で居ながら、彼の人々は、俺の帽子を不思議がつて居ることが能きなのだつた。不思議だな」と、ビエールは、タタアリノヴァへ行く途すがら、思つた。

馬車、荷馬車、從卒や哨兵の群が、街の左側の紳士の家の邊に立つて居た。總司令官が其所を宿にして居たのであつた。が、ビエールが着いた時には、殿下も、その幕僚の殆ど全部も、居無かつた。彼等は残らず寺院の式へ行つて了まつて居た。

ビエールは、ゴオルキイへと進んで行つた、そして、阪を上つて、小さい村の街へ行つた、彼は、始めて、白い襦袢を着、帽子に十字架を着けた民兵の農夫を見た。高い話聲や、笑聲で、熱心に、汗になつて、彼等は、道路の右で、草の生ひ茂つた小高い所で働いて居た。

或る者は、地を掘つて居、他の者は、一輪手車で地を擔び去つて居ると、第三の連中は、何にも爲すに立つて居た。

高所に、二人將校が居て、農夫等に指圖を爲して居た。確に兵卒としての自分等の状態を物珍しく思つて、喜んで居るらしかつたさういふ農夫等を見るとき、ビエールは、再、モザアイスクで見た負傷兵のことを考へた、そして、彼は、その時の兵卒が、「人民を残らず狩り集めて居る」といふ言語で以つて言ひ表はさ

うと爲て居た意味を解した。さういふ農夫等が、可笑しい、拙態な形の靴で、汗みづくになつた頸で、彼方此方では、襦袢の胸を開けて、日に焦けた鎖骨を見せて、戦場で勞働して居る光景は、ビエールが、これまで、見たり、聞いたたりした何様な物よりも尙一層強く、その時の嚴肅さの印象を、ビエールに與へたのであつた。

(三十一)

ビエールは、馬車から出た、そして、勞働して居る農夫等の側を通り越して、醫者の話では其所から戰場が見渡せるといふことであつた高所へ攀ぢのほつた。

それは、午前の十一時であつた。日は少し左方に寄つて、ビエールの後にあつた、そして、清い、澄み渡つた空氣の裡で、高所から、ビエールの前に、圓戯場を爲して廣がつて居た巨大なパノラマは、麗らかな日光を浴びて、横たはつて居た。

スモレエンスク海道は、その圓戯場を貫いて、左の方の頂上で、それを斷つて、懸つて、高所の前の、凡五百歩程下にあつた、白い寺院のある村を通つて走つて居た。この村がボロディノオであつた。道路は、村の下を通り、橋を渡り、丘を上り下りして走つて、六露里彼方に見えて居た、ナボレオンが今居るのであつた、ヴァルウエヴァの村へと上つて居た。ヴァルウエヴァの彼方で、道路は、地平線の上で黄色くなつて居る小さい森の裡へ没して居た。樺と松の樹のこの小森の裡に、道路の右方に當つて、遠くの方に、コロツキイ修道院の十字架と鐘樓が見えた。青い遠方には其所此所に、小森と道路の右と左に、煙つて居る野營の火や、我軍だの、敵の隊團が、幽に見えて居た。



右の方、カロオチャ及び莫斯科川の流に沿って、土地は、溪や丘勝であつた。丘の間の断れ目を通して、ベズボヴァとザハリノの村が見えて居た。左の方は、土地が今少し平坦であつた、其所には、穀物の野と、火をかけられた煙つて居る村——セミヨノフスコエがあつた。

ビエールが見た物は、何も彼も、非常にゴチャ／＼して居て、彼の前の土地の何の部分にも、彼は、彼の豫想に十分合するやうな物を何一つ見出すことは能き無かつた。何處にも、彼が見るだらうと豫期して居たやうな戦場は見え無かつた、唯だ、野、溪、軍隊、森、野營の火、村、高所、流の外何も無かつた。何う骨を折つて見ても、ビエールには、その生きた景色の裡に、軍事上の陣地を見出すことが能き無かつた。彼は、我軍と敵とを識別することさへ能き無かつた。

「誰か解る人に尋か無ければ不好い」と、彼は思つた、で、彼の、非常に大きい、軍人で無い姿を、物珍しさうに見て居た將校に言語を掛けた。

「失禮ですが」と、ビエールは云つて、「前方の彼は何といふ村ですか？」

「ブルディノ、さうだつたなア」と、その將校は、同僚に尋くやうに振り向いて、云つた。

「ボロディノだよ」と、今一人の方は、正した。

談話を爲る機會を得たのを喜んだらしい態で、將校は、ビエールの方へ寄つて行つた。

「彼所に居るのが我軍ですか？」と、ビエールは尋いた。

「左様です、それから、ずつと彼方に、彼が、佛蘭西軍です」と、將校は云つた。「あ、彼です、見えるでせう」

「何處ですか、何處ですか？」

「肉眼で見えます。それ、彼です」

將校は、川の彼方の、左手に立ち登つて居る煙を指さした、と、ビエールが今までに出會つた多くの顔で見たのと同じ厳格な沈痛な表情が、その將校の顔へ出た。

「やア、彼が佛蘭西軍ですか。で、彼所は？……」と、ビエールは、その邊に軍隊が見えた左の方の高所を指さした。

「彼は我軍です」

「やア、成る程。で、彼所は？……」と、ビエールは、丘の断れ目に見えた村の近くの、その上に大きい樹のある、遠方の今一つの高所——其所には、黒い集團と、野營の火の煙があつた——へ、指さし爲た。

「え、彼が再奴なんです」と、將校は云つた。（それは、シヴァアルディノの砲壘であつた）。「昨日は、彼が我軍のものでしたが、今は、彼は、奴のものです」

「所で、さうすると、我軍の陣地は？」

「我軍の陣地？」と、將校は、満足の笑顔で云つた。「私は、堡壘の殆ど全體の建設に關係したので、極く明瞭に説明することが出来ます。それ、我軍の中陣は、それね、此所のボロディノなんです。彼は、二人の前面の、白い寺院のある村へ指さし爲た。彼所がカロオチャの渡場です。此所の、それね、刈つた草の列が未だ低地に横たはつて居る、彼所に橋があります。彼が、我軍の中陣です。吾々の右翼は、ズツと彼方です。彼は、丘の間の凹所へと、ズツと遠方の、右の方を、指さした。彼所に、莫斯科川があるんです。で、彼所へ、吾々は、極く強い砲壘を三個造つたんです。左翼は……」其所で、將校は止まつて、「説明し惜いですよ、ねえ……昨日は、我軍の左翼は、彼所、シヴァアルディノでした、ね、彼の榭樹のある。けれども今



は、吾々は、左翼を引込めたです、今は、彼所です、ね、村と煙の見える——彼がセミ・オノフスコエなんです、で、此所は——「そら」と、彼は、ラエーフスキイ砲壘へと指さし爲した。「だが唯だ戦闘は彼所には無いでせう、十中八九。奴は、兵を此方へ動かしたです、けれども、それは、詐略です、奴は、多分右の方へ廻つて了まはうとするでせう。先づ、斯ういふ風です、だが、其様なことは何うだらうとも、明日の點呼には大分人員が缺けませうよ」と、將校は云つた。

將校が話して居るうちに傍へ来た軍曹は、黙つて長官の話し終るのを待つて居た。が、こゝに至つて、彼の最後の言語に如何にも當惑したことの著はな様子で、彼を遮ぎつた。

「俵籃を取りに遣ら無ければなりません」と、軍曹は、厳しく云つた。

將校は、次の日何れだけ多くの人が缺けて了まふかといふことは、考へるかも知れぬが、其様なことを話してはならぬといふことに、十分に氣が付いたかのやうで、恥ぢ入つた態に見えた。

「うん、再三小隊を遣れ」と、彼は急いで云つた。「で、貴下は何方です、醫者ですか？」

「いや、私は別に何でも無いんです」と、ビエールは答へた。で、彼は、再丘を降りて、農夫の民兵等の側を通り過ぎた。

「え、爲やうの無い獸類奴等」と、將校は、自分の鼻を摘んで、ビエールと一緒に彼等の傍を通り過ぎた。

「やア、来たぞ……」持つて来た、来たぞ……「もう直ぐ此所へ來ると、不意に聲々が叫んだ、そして、將校も、兵卒も、農夫等も、道路を前へと走つた。

宗教の行列が、ボロディノオから丘を上つて來るのであつた。その先頭には、一聯隊の歩兵が、脱帽して、

銃を下けて、塵埃だらけの道路を勢よく進んで來た。歩兵の後には、讚美歌の聲が聞えて來た。

兵卒や、農夫等は、それに出會ひにと、脱帽して、駈け降りて來て、ビエールに追ひ付いた。

「聖母を持つて來たんだ。吾々の守護者——イヴエールスキイの聖母なんだ……」

「スモレエンスクの聖母だ……」と、今一人が正した。

村に居た民兵等や、砲壘で働いて居た者どもは、鞆を擲りだして、行列を迎へにと駈け出した。

塵埃だらけの道路を進んで居る大隊は、法衣を着た司祭たちや、隨員の補祭と讃歌者を伴れた、頭巾を着た小さい老人に續かれて居た。その後から、銀の框の裡に入つた煤ぶつた顔の大きい聖像を擔いで居る兵卒や將校等が來た。これが、スモレエンスクから持つて來られて、それから、何時も軍と一緒に歩いた聖像であつたのだ。後にも、前にも、それから、周圍にも、脱帽して、地面へまで頭を下げる兵卒等の群集が、歩

いたり、駈けたりして居た。

丘の頂上で、行列は止まつた、彫刻を爲した棒で聖像を擔いで居た人々が、交代した、補祭等は香を再燃

きだした、そして、式が始まつた。日の焼けるやうな光線が群集の上を垂直に打つた、微弱な、心持の好い軟風が、人々の髪を弄り、聖像を飾つて居る平紐をそよがした、語は、野天では、低く響いた。

非常な群集——將校、兵卒、民兵の——が、残らず脱帽して、周圍に立つた。少し離れた所司祭や補祭た

ちの後の方に、身分の高い人々が立つた。頸に聖ゲオルギイ勳章を掛けた禿頭の將官が、司祭の直ぐ後に立つて居た。彼は、確に獨逸人らしかつた、といふのは、多分露西亞の農夫の愛國心を鼓舞する手段としてで

あらうが、その式を聴くのが宜いと思つて、十字は切らずに、立つて、式の終るのを辛抱して待つて居たからであつた。



今一人の将官は、軍隊的の姿勢で立つて、胸の前で腕を振つて、十字を切りながら、四邊を見廻して居た。農夫等の間に立つて居たビエールは、身分の高い人々のこの一團の裡で、彼が知つて居た五六人の人々を認めた。が、彼は、さういふ人々を見無かつた、彼の全注意は、兵卒と農夫とを問はず、悉皆残らず同なじ熱心さで聖像を見詰めて居る群集の裡の顔の本氣な表情に引き付けられて居た。

懶さうな歌謡者が（それは二十度目の式であつた）緩然と、彼等の何時もの歌、「おほ、神母よ、爾の僕等ら等を災禍より救へ」を誦し始め、司祭や、補祭等が、「吾等總てが吾等の城壁、吾等の保護者として、逃がるるは、爾の膝下なればなり」と、合唱するや否や、誰の顔にも、ビエールが、モザアイスクの丘の上で見、又、その朝出會つた非常に多くの顔の上でチラ／＼見た、今や來りつゝある時の嚴肅さのその感の閃きが出て來た。多くの頭が下げられて、髪の方が軟風にそよいだ、そして、十字を切る兵卒の、溜息と、胸を打つ音が聞えた。

群集が不意に割れて、ビエールに推しかゝつて來た。

人々がさう急いで路を開けたのから見ると、多分極く傑い人らしい誰かが、聖像へ近寄つて居たのだ。

それは、陣地を見廻つて居たクツウゾフであつた、タタアリノヴァへの歸途に、彼は式に加はつたのであつた。ビエールは、直ぐにさうと判るやうな彼の特別な姿から、直ぐ彼をそれと認めた。

長い軍服で、非常に肥つた身體で、反り返つて、脱帽して、白い頭を出して、彼の圓々とした顔では殊に眼に立つ旨の白い隻眼で、クツウゾフは、何時ものヨチ／＼した歩き振りで、群集の開けた圈内へ歩いて、司祭の後に立つた。彼は、何時もの手振りで十字を切り、身體を屈め、手を地面へ着けて、深い溜息を吐いて、白髪の頭を下けた。クツウゾフは、ベニグセン及び彼の幕僚に依つて、續かれた。總司令官の居ること

は、身分の高い人々全體の注意を引いたに拘らず、民兵や、兵卒等は、彼を見ずに、祈り續けて居た。

式が終るといふと、クツウゾフは、聖像の所へ行つて、ドサリと重さうに跪つき、地面へ頭を下けた、そして、長いこと、起ち上らうと試みた、が、身體の弱つて居ること、重いことゝの爲めに、さう能き無かつた。彼の白髪の頭は、その骨折でピリ／＼動いた。

到頭彼は起ち上つた、そして、如何にも無邪氣に小兒らしい風で、唇を突き出して、聖像に接吻した、で、再、隻手を地面へ着けて頭を下けた。他の將官たちが、クツウゾフの例を追つた、それから、將校たち、それに續いて、兵卒や、民兵等が、昂奮した顔で、息をも次がず、前の方へと推しあひへし合ひ、駈け寄つた。

(三十二)

自分をも持つて行つて了まふやうに群集が推し進むので、踰越されながら、ビエールは四邊を見廻した。『伯爵。ビョートル・キリリイチ。何うして此様な所へお出でした？』と、聲が云つた。ビエールは振り返つた。

ポリイス・ツルベエツコイが、手で膝を拂ひながら（多分聖像の前での敬神の行爲の爲めに其所を塵埃だらけにしたのであらうが）、微笑みながら、ビエールの傍へ來た。ポリイスは、彼の服装は、戰場勤務に適つた式のものではあつたが、それで居て、甚く洒落た服装であつた。彼は長い軍服を着て居た、そして、クツウゾフのやうに、馬鞭を肩から吊つて居た。

クツウゾフは、その間に、村に達した、そして、一番近くの家の蔭で、一人の哥薩克騎が彼の爲めに取つて來て、今一人が急いで毛氈を敷いた腰架の上へ坐つた。立派な將校たちの非常に多數の隨行員が彼を取り



圍いた。

行列は、群集に伴はれて、向先方へと動いて行くのであつた。ピエールは、未だクツウゾフから三十歩位の所に立つて、ボリスに話を爲て居た。

ピエールは、戦に加はつて、陣地を見度いといふ彼の望みをボリスに説明した。

「それは、斯うなすつた方が宜いでせう」と、ボリスが云つた。「私のお客に貴下をしませう。伯爵ベニグセンが居られることになつて居る場所から、一番善く、何も彼も見えます。私は、彼の人に隨いて居るんです。彼の人に話ませう。で、陣地を悉皆廻つて見度いとお思ひなさるんでしたら、吾々と一緒においでなさい、吾々は今左翼へ行くところなんです。で、それから、歸つたら、今晚私の宿へ泊つて下さい、吾は骨牌の勝負でもやりませう。貴下は、勿論、ヅミイツリ・セルゲーヴィチをご存じでせうね。彼の男は彼所に泊つて居るんです。ボリスは、ゴオルキイの三番目の家を指した。

「けれども、私は右翼が見度いんです。非常に強いといふ話ですから」と、ピエールは云つた。「莫斯科川からして、陣地全體を廻り度いんです」

「え、それは後でできますが、一番大切なのは左翼ですよ」

「成るほど、成るほど。で、公爵ボルコンスキイの聯隊は何處に居ますか？。私に教へてくださる事ができますかね？」と、ピエールは尋いた。

「アンドレー・ニコラエヴィチのですか？。吾々は其所を通ります。彼の人の所へ伴れて行つてあげませう」

「左翼は何ういふ風なんでしょうか？」と、ピエールは尋いた。

「實はね、これは此所だけの談なんですがね、左翼は何うなつて居ることだか、一向解りません」と、ボリスは、聲を低くして、内所で云つた。「伯爵ベニグセンは、現在のものとは全く異つた説を持ち出したんです。彼の人は、あれ、彼所の彼の高所に砲壘を設けやうと、提議したのです、今のは全然異つて……けれども……」と、ボリスは肩を揺つた。「殿下が、さう爲やうと思は無かつた、で無くも、他の者に説き付けられたんです。……で、ね……」ボリスは、言語を終ら無かつた、それは、クツウゾフの副官のカイサアロフが、その途端に、ピエールの傍へ来たからであつた。「やア、バイシイ・セルゲーヴィチ」と、平氣な笑顔で、ボリスは、カイサアロフに云つて、「私は、伯爵に陣地を説明して居るんですよ。殿下が、敵の方略を斯れ程正確に洞察なすつたにやア、驚き入りましたねえ」

「左翼のことなんですかね？」と、カイサアロフは云つた。

「え、え、え、全くそれなんです。吾々の左翼は今非常に強いんです」

クツウゾフは、幕僚のうちの餘計な人間を淘汰して了まつただけけれども、ボリスは、クツウゾフが改革を爲した後でも、本營に於ての地位を保つて居るのに、成功したのであつた。ボリスは、伯爵ベニグセンに隨いて居た。伯爵ベニグセンは、ボリスが隨く誰もと同なじに若い公爵ヅルベエツコイをば、非常に役に立つ人物と見做して居た。

軍の主な將校の間に、劃然と區別された二つの黨派があつた、クツウゾフの黨派と、幕僚長のベニグセンの黨派とであつた。ボリスは後の黨派に屬して居たが、クツウゾフに最も卑屈な阿諛を爲て居ながら、一方では、最早晝漢は何の役にも立た無くつて、何事も實際はベニグセンの發意に因るのだといふ風に、人に暗示して行くことに於て、ボリスほど旨く成功した者は誰一人無かつた。



所で、今、戦の大切な利那が来たのだが、これは、クツウゾフの没落と、ベニグセンの總司令官への昇進とを意味するに違ひ無いものであつた、或は又、クツウゾフが戦に勝つとしてもその勝利の功勞は、旨くベニグセンに歸せしめられたに違ひ無かつたのだ。が、それは、何方にしても、明日が過ぎれば、多くの昇任が行はれ、多くの新顔の人々が先頭へと持ち出される筈であつた。で、ボリスは、その日は、終日、それはした氣の昂つた状態にあつたのであつた。

ビエールの知人たちが、彼と一緒にあつた、そして、彼は、自分の上に雨のやうに降り掛つて来る莫斯科に關するさまざまの問を答へ切る閑暇も無ければ、又彼等が彼に話さうとすることを残らず聞く閑暇も無かつた。何の顔も、昂奮と動搖の様子を帯びて居た。が、さういふ顔の或るものに依つて表はされて居た昂奮の原因は、自分々の成功の問題のうちに見出し得られるやうに、ビエールには思はれたのであつた。で、彼は、他の顔のうちで見た他の昂奮の様子——即ち、各自自身の成功の問題では無く、生死の全般的の問題を暗示して居るその昂奮の様子を忘れ得無かつた。

クツウゾフは、ビエールの姿と、彼の周圍の集團に氣が付いた。

「彼の男を呼んで来い」と、クツウゾフが云つた。

一人の副官が、殿下の意を通じた、で、ビエールは腰架の方へと行つた。が、一人の民兵が、彼より先にクツウゾフに近寄つた、それはドロオホフであつた。

「何うして、彼の男が此所に居るんです？」と、ビエールは尋いた。

「え、彼奴は狡猾な犬です、彼奴は何處へでも鼻を突つ込みます」といふのが、ビエールが受けた答であつた。「彼奴は、卒伍に、落されました、ねえ。今彼奴は再刎ね上らうとして居るんです。何か知ら策を建

てたんです……そして、夜敵の戦線内を偵察するんです……が、勇氣のある奴ですよ……」

ビエールは帽子を脱つた、そして、鄭重にクツウゾフに點頭を爲した。

「私は、この事を殿下の前へ提出しました上で、貴下が、私をお退けになるか、其様なことはとつくに知つて居ると仰しやるか、孰かでありませうとも、それでも、私には少しも損は無いと決しましたのです」と、ドロオホフは云つて居た。

「成る程」

「で、私の申すことが間違つて居りませんければ、私は祖國の爲めに、一つ盡すことになるのでございませう、私は祖國の爲めに何時でも生命を捧げることを辭せんのでございませう」

「成る程……成る程……」

「で、若し、殿下が、生命を少しも惜まん人間が御入用でしたら、何卒私のことをお憶ひだしを願ひませう……或は、私が殿下のお役に立つかも知れませんから……」

「成る程……成る程……」

そのうちに、ボリスは、彼の宮中官のやうな熟練で、ビエールと一緒に總司令官の傍へ動いて行つた、そして、前方からの談話を續けて居るかのやうに、如何にも自然な態で、ビエールに云つた——

「農夫の民兵等は、決死の覺悟で、白い襪衣を着ました。實に勇敢ですな、伯爵」

ボリスは、明白に閣下に聞かせる積りで、これをビエールに云つたのであつた。彼は、クツウゾフの注意がさういふ言語で捉へられるだらうといふことを知つて居た、と、果して殿下はボリスに話し掛けた。「民兵が何うだといふのかね？」と、彼は、ボリスに云つた。



「彼等は、明日の決死の支度のやうな風で、白い襯衣を着ましたのです」

「あゝ……驚くべき、無比な人民だ」と、クツウゾフは云つた、そして、眼を瞑つて頭を振つた、「無比な人民だ」と、彼は溜息して、繰り返した。

「貴下は烟硝の臭が嗅ぎ度いのかね？」と、彼はビエールに云つた。「さう、心持の好い香だよ。私は、貴下の奥様の崇拜者たる光榮を有して居ます。奥様は健康かね？ 私の宿舎は何時でもお使ひなさい」

で、クツウゾフは、老人が屢く爲るやうに、云つたり、爲たりすることを悉皆忘れて了まつたかのやうに、憤然して四邊を見廻し始めた。が、探がして居る目的物を憶ひ出したらしい態で、彼は、副官の兄弟のアン・ドレ・エー・セルゲイ・カイサアロフに向つて、手招した。

「何うだつたね、何ういふ言語だつたかね、マリンの彼の詩句は？。何ういふ言語だね？。彼がゲラアコフに書いてやつたのは、「君は、軍團の教師になれる」かね。云つてくれ、云つてくれ」と、顔付をば、今にも笑ひ出さんばかりに緩めて、クツウゾフが云つた。

カイサアロフは、詩句を繰り返した……クツウゾフは、微笑みながら、詩の律に合せて頭を首肯させた。ビエールが、クツウゾフの傍を離れるといふと、ドロオホフが近寄つて、ビエールの手を撃つた。

「此所でお目に掛つたのは、實に嬉しいございます、伯爵」と、彼は、他人が居るのにも構はず、著るしい決心と沈痛な様子で、聲高に云つた。「吾々の間の誰が、生残るやうに運命づけられるか、一向分らん日の前の宵に。私は、過去に於て、吾々の間に起つた誤解を私が残念に思つて居ることを、貴下にお話するこの機会を得たのが、大に嬉しいございます、で、貴下が私に對しては何の懸まりも持つておいでなさらんと思へれば、私は嬉しいのです。何うぞ宥してください」

ビエールは、何う彼に云つて宜いか分ら無いで、唯だ微笑みながら、ドロオホフを見た。眼に涙を溜めて、ドロオホフは、ビエールを抱擁して、接吻した。

ボリスは、自分の將官に一言三言云つた、そして、ベニグセンは、ビエールに話し掛けて、戦線に附いて、自分たちと一緒に行つたら何うかと、勧めた。

「なか／＼面白いでせうから」と、彼は云つた。  
「え、極く面白いです」と、ビエールは云つた。

半時間経つと、クツウゾフは、タタアリノヴァへの歸途に就き、ベニグセン及びその幕僚の方は、ビエールを一行の間へ加へて、陣地を視察して居た。

(二十三)

ゴオルキイから、ベニグセンは、小丘の上に居た將校が、ビエールに、陣地の中央だと云つて指し示した、河の縁に、好い香のする、新しく刈られた草塚の列があつた、橋へと、海道を降りて行つた。彼等はボロディノオの村へと、橋を渡つた、それから、左へ曲つた、そして、人間や、砲の非常な數を通り過ぎて、民兵等が地面を掘つて居た高い高地へと出て來た。これは、その時は未だ名が付いて居無かつたが、後では、ラエーフスキイ砲壘、又は、小高所の砲兵陣地と呼ばれた砲壘であつた。

ビエールは、この砲壘には、別段に注意し無かつた。彼は、その地點が、ボロディノオの平野の何の部分よりも記憶すべきものにならうとは、夢にも思は無かつたのだ。

それから、彼等は、セミヨノフスコエ——其所では兵卒等が小家や納屋の最後の材木を引摺り去りつゝあ



つた——へと溪を横ぎつた。それから、又、彼等は、電に打ち倒されたかのやうに踏み付けられて倒れて居たライ麦の野を横ぎつて、上がったたり、下りたりして、乗り進んで、砲兵がこの頃附けた道跡に沿ひ、鋤いた野の畝を越えて、人々が未だ働いて居る土壘の所へと行つた。

ベニグセンは、土壘の所で止まつた、そして、前面の前の日には我軍の物であつたシニヴァアルディノ砲壘を眺めた。五六人の騎兵が、その上で認められた。

將校たちは、ナポレオンやミユアラが其所に居ると云つた。で、誰も彼も騎兵のその小さい集團を見た。ピエールも又、彼等を見詰めて、その殆ど認め兼ねる人間の形の孰がナポレオンであるのか推量しやうと試みた。到頭、騎兵の集團が丘を下りて、何處かへ見え無くなつて了まつた。

ベニグセンは、彼の傍へ乗り附けて来た一人の將官へ、我軍の全陣地を説明し始めた。ピエールは、彼の言語に耳を澄まして、自分の心の有らゆる能力を緊張させて、来るべき戦の重要な諸點を掴まうと骨折つた、が、残念にも、彼は、自分の能力がさういふ爲事には適して居無きことを感じた。彼には、寸毫も解ら無かつた。ベニグセンは話し終つた、そして、ピエールの聞き入つて居た顔を見付けて、不意に彼に振り向いて、云つた——

「これは、貴下にはさう面白くは無い、さうでせうね」

「いや、何うしまして、甚く面白うございます」と、ピエールは全く眞實では無く、繰り返した。

土壘の所から、彼等は尙一層曲つて、繁つた、低く生えた、樺の森を貫いて、廻つて行つて居る道路の左方へと行つた。森の眞中で、白い脚の、鶯色の野兎が、一行の前へ跳び出した、そして、多数の馬の足音に餘りに驚いて了まつて、甚く恐れて、長い間、一行の丁度前面の路を跳んで行き、衆皆に哄笑を爲せ、そして、

て、五六人の聲がそれに向つて叫んだので、やつと、片側へ跳び退いて、繁所へ見え無くなつた。

森の裡を二露里ばかり行つてから、一行は、左翼を掩護する筈になつて居たツウチコフの軍團の兵が居た空地へ出て来た。

此所で左翼の最端で、ベニグセンは、非常に勢ひ込んで、非常に多く話した、そして、ピエールには、軍事上の見地からは非常に重要なものであつたらしく思はれた指圖を爲した。ツウチコフの兵が置かれて居た地點の丁度前面の所に、兵の占領して居無い高地があつた。

ベニグセンは、その見落しを甚く非難して、その地方を見渡すやうな高地を占領せすに置いて、その直ぐ下へ兵を置くのは、狂氣の沙汰だと云つた。二三の將官たちも同なじ説を唱へた。殊に、その一人の如きは、如何にも軍人らしい熱心で、彼等は其所で必定の全滅にまで運命づけられて居るのだと、公言した。ベニグセンは、自分自身の責任で、海道へ動き出るやうに、その隊に命じた。

左翼に於けるこの陣地の變更は、ピエールをして、尙一層、軍事上の事柄を解する自分の能力を疑はしく思はせた。丘の麓に於ける兵の位地を非難するベニグセン、其他の將官の説を聞いて居るうちに、ピエールは、さういふ人々の意見を十分に掴んで、それに賛同した。で、その兵を其所へ置いた人が何うして其様な甚い見易い間違をやつたものなのか、彼には想像し得られ無かつたのはそれが爲めであつたのだ。

ピエールは、その兵は、ベニグセンが想像したやうに、彼等の陣地を守る爲めに、其所に置かれて居たのでは無くして、不意に敵に強襲を加へる爲めに、その隠れた地點へ埋伏させて、止まらせてあつたのだといふことを知ら無かつたのだ。ベニグセンは、この計策を少しも知らずに、その變更のことは總司令官に何も云はずに、敵の眼に着く位地へ、兵を動かしたのであつた。



(二十四)

公爵アンドレーは、その晴やかな八月の夕方、彼の聯隊の陣營の一番外れのクニヤアズコヴァの村の破れかゝつた納屋の裡で、横になつて、手で身體を支へて、臥て居た。破れた壁の破隙から、彼は、生籬の三十年位の無頭の樺の木立や、周圍に燕麥の刈束のある野や、兵卒等が食物を拵へて居る燎火の煙の見える樹叢を見て居た。

今は、人生は、公爵アンドレーには、揉みくちやになつた、無用な、重荷のやうなものに見えたものではあつたが、彼は、この戦の前宵には、七年前アウステルリッツの前に感じたと同じく、神経的に昂奮して、苛々した心持になつて居た。

彼は、次の日の戦に關する總ての命令を、受けもし、出しもした。彼は最早爲ることは何も無かつた。が、考想——單純な、最も知れ切つた、その故に、最も恐しい——が、彼を捨て置いて呉れ無かつた。彼は、次の日の戦は、彼が與かつたこれまでの戦のうちの最も恐しいものであらうといふことを知つて居た、そして死が、始めて、彼の現實の生活の爲方とか、それが他人に及ぼす影響とかとの關係に於ては無く、單に彼自身との關係に於て、彼の靈魂との關係に於て、彼の前に出て來た、そして、具體的な現實にそれを爲るやうな現然した有様で、單純に、そして、恐しく、彼の前に立ちあがつた。

で、この幻想の高所から見れば、嘗て彼の心を占領したことのある物が、何も彼も、残らず、不意に、陰も無く、遠近も無く、輪廓も無く、冷たい白い光に照し出されたやうに見えた。彼の全生涯が、幻燈で、彼は、鏡面を通し、人工的な光で、それを見て居たのであつたやうに見えた。

所が、今、彼は、不意に、鏡面無しに、明るい日の光で、さういふ下手な塗りたくつた繪を見たのであつた。

「左様だ、左様だ、これなんだ、俺の心に、苦悶や、歡喜を起させた偽の形は彼奴なんだ」と、彼は一人で云つて、想像の裡で、彼の生涯の幻燈の主な繪を繰り返し、死の明るい見方の冷たい、白い、晝の日光で今それを見るのであつた。

「これがさうなんだ、何か、立派な、神祕な物のやうに見えたのは、斯様な拙く描いた形なんだ。名譽、社會の爲め、女に對する戀、祖國——何といふ壯大な繪に、彼様いふ物が見えたことだらう、何といふ深い意味で彼様いふ物が充たされて居るやうに見えたことであらう。で、それは悉皆、俺の爲めに夜が明けつゝあるやうに感ぜられる晝の冷たい光の裡では、實に單純で、色が無く、卑俗な物なんだ」

彼の生涯の三つの主な悲哀が殊に彼の注意を引いた。女に對する彼の戀、彼の父親の死、それから、佛蘭西人——今は最早露西亞の半分を持つて居る——の侵入。

「戀……神祕な力で沸き返つて居るやうに俺には見えた彼の小さい娘。俺は實に彼の娘を戀したなア。俺は、彼の娘との戀のロオマンティックな計畫や、彼と一緒に暮す幸福の計畫を立てた。あゝ、單純な心の壯年時」と、彼は、苦々しさうに、聲高に云つた。「あゝ、俺は、俺が一年も留守にして居る間、彼女を俺に對して眞實に保つて置くやうな理想的な戀があるものだ、信じて居たでは無いか。昔話の中の忠實な鳩のやうに、彼女は俺の居無いのに焦がれて居るものだと思つて居たのだ。で、彼の事は、残らず、實に單純極まることであつたんだ……残らず、實に恐しい程單純で、可厭なものなんだ」

「俺の父親でもさうだ、荒涼丘を開いて、其所が、自分の住居、自分の土地、自分の空氣、自分の農夫



等だと思つて居た。けれども、ナポレオンがやつて来て、父親の存在は知りさへし無いで、彼の路から木片のやうに彼を拂ひ去つた。そして、彼の荒涼丘は、塵埃に委ねられ、彼の全生涯は、それと共に、無に歸してしまつたのだ。公爵マリイアは、それは、天から降つた試みだと云つて居る。彼は、此の世に居らず、又、決して、此の世に来ることが無いのに、それは、何の爲めの試みなんだ？。彼は、決して再歸つては來無いのだ。彼は最早居無い。さうすれば、それは、誰の爲めの試みなんだ？」

「祖國、莫斯科の破却。けれども、俺は明日死ぬだらう、佛蘭西人に殺されるのでは無くつて、昨日俺の耳の直ぐ傍で、鐵砲を放した兵卒のやうな、吾々自身の味方の一人の爲めに殺されるかそれさへ知れ無いんだ、さうすれば、佛蘭西人が、俺の頭と踵を以つて、俺を持ちあけて、彼等の鼻前で俺が腐つてしまは無いやうにと、穴の中へ俺を擲り込んでしまふだらう、さうすると、人生の新たな状態が、此の世には起り、俺はそれを寸毫も知るまい、そして、俺は、寸毫も此の世には無いだらう」

彼は、動か無い黄色い所と緑色の所とのある、そして、白い皮を日に輝かして居る樺の樹の列を見詰めた。

「では、死ぬ、奴等に明日殺されやう、最早居無いものにならう……残らずの物をそのまゝに行かせやう、俺を結末にされて了まはう、何が構ふものか」彼は、その人生から自分の居無くなつた有様をまさしくと想像した。と、明るみと、陰とを持つて居る、その樺の木立や、巻き雲や、火の烟や、四邊の有らゆる物が、不意に、奇異に可厭な、物凄なものに見えだした。戦慄が背部を走り降つた。急に起きあがつて、彼は、納屋を出た、そして、其所邊を歩き始めた。

彼は、納屋の蔭で、幾人かの聲を聞いた。

「誰だ？」と、公爵アンドレーエは、聲を掛けた。

前には、ドロオホフの中隊の長であつたが、今は將校の缺乏の爲めに大隊長に進められた將校の赤鼻の大尉ティモオフィンが、納屋へオゾ／＼と入つて來た。彼の後には、副官と、聯隊の主計が隨いて來て居た。

公爵アンドレーエは、急いで起きて、將校等が來た用に関する事柄を聞き、二三の指圖を爲、そして、彼等を歸さうとしたが、その途端に、納屋の蔭で、聞き慣れた、舌の廻らぬやうな聲を聞いた。

「畜生」と、何かに蹴躓いた誰かの聲が云つた。

納屋から外方を覗いた公爵アンドレーエは、その時丁度地面に置いてあつた棒に蹴躓いて殆ど倒れ掛つて居たピエールを見た。公爵アンドレーエは、自分自身の仲間から來た人々、殊に、彼が、莫斯科での最後の逗留の時分に過した苦しい時のことを彼に憶ひ起させるピエールに、逢ふのは、可厭であつた。

「やア」と、公爵は叫んだ。「何うしたことで此様な所へ君はやつて來たのかね？。君に逢うとは思ひ掛けが無かつたね」

彼が斯う云つて居る間、彼の眼や、顔ぢうに、冷淡といふより以上の、全くの敵意が表はれた、それには、ピエールが直ぐ氣が付いた。彼は、非常な熱心で納屋へ近寄つたのであつたのだが、今、公爵アンドレーエの顔を見るといふと、彼は、隔てが出來たやうに感じて、窮屈な心持になつた。

「僕は來たんだ……ねえ……唯だ……僕は來たんだよ……面白いね」と、ピエールは云つた、彼は、その「面白い」といふ言語を、左程の意味も無く、最早その日は幾度繰り返したか分ら無かつたのであつた、「戦を見度かつたんでね」

「成る程、成る程、でも、君の共済組合の同胞たちは、戦争のことを何う云つて居るね？。何うして、戦争



「避けられるね？」と、公爵アンドレーエーは、皮肉に云つた。「さア、君、莫斯科の話をして聞かせ給へ。で、僕の家の者は？。結局莫斯科へ着いたかね？」

「左様だよ。ジュリイ・ブルベエツコイから、さうだと、聞いたよ。僕は、お訪ねしたがね、お目にかかれ無かつた。君の莫斯科の領地へ行つて了まはれたんだ」

(二十五)

将校等は、歸らうとしたが、公爵アンドレーエーは、自分の信友と差し向ひになることが厭ならしい風で、衆皆に止まつて、茶を飲めと勧めた。腰架が置かれ、茶が持つて來られた。将校たちは、少し驚いた風で、ビエールの大きい、肥つた身體を見、彼の莫斯科の談話や、彼が觀察し得た我軍の陣地の談話を聞いて居た。

公爵アンドレーエーは黙つて居た、そして、彼の顔は、ビエールが、ボルコオンスキイに向つてよりは、單純な心のティモオフィンに向つて、多く自分の考を話した程、それ程無愛想なものであつた。

「では、君は軍の全體の位地が解つたのかね？」と、公爵アンドレーエーは、語を挟めた。

「空様なんだ。少くともさ、何ういふ意味かね、君の問は？」と、ビエールは云つた。「僕は軍人で無いか、十分に解るとは云ひ得無いんだ、が、それでも、僕は全體の配置が解るんだ」

「うん、左様なら、君は、誰よりも多く知つて居る譯だ」と、公爵アンドレーエーは云つた。

「え」と、ビエールは、眼鏡越しに公爵アンドレーエーを見て、疑はしさうに、云つた。「所で、クツウゾアの任命を君は何う思ふね？」と、彼は尋いた。

「僕は、彼の人の任命されたのを大變喜ばしく思つて居るよ、僕の知つて居るのは唯だそれだけさ」と、公爵アンドレーエーは云つた。

「うん、では、バルクレエド・トオリイに就ての君の説を聞かして呉れ給へ。莫斯科では彼の人に就て實にさまざまの噂があるんだがね。君は彼の人を何う思つて居るね？」

「其所の人たちに尋き給へ」と、公爵アンドレーエーは、云つて、將校等を指さした。

ビエールは、誰もが、ティモオフィンに話し掛けるやうな、態々同地位に下るやうな疑はしさうな笑顔で、ティモオフィンを見た。

「殿下が就職されましたのは、閣下、閣中での一道の光であつたのであります」と、ティモオフィンは、始終オゾくと彼の聯隊長を横眼で一す々々見ながら、云つた。

「それは、何ういふ譯でね？」と、ビエールは尋いた。

「え、先づ燃料の木と、食物の點で云ひますとね。何うでせう、スヴェンツィヤンから吾々が退却して來るうち、一度も、吾々は、小枝一本、薬一束、其他、何にも手を觸れ得無かつたのであります。吾々は退却中でせう、だから、何も彼も奴の物になつて了まふんです、左様でせう、閣下？」と、ティモオフィンは云つて、彼の公爵に振り向き、「けれども、誰も其様な物に手を觸れてはなら無いのであります。吾々の聯隊では、將校が二人左様いふ事の爲めに、軍法會議へ廻されました。所が、殿下が、就任されてからは、左様いふ點は、實に簡單明瞭になつたのであります。吾々は、夜が明けたやうな心地です……」

「では、何故禁じたんですか？」  
ティモオフィンは、左様いふ問には何う答へて宜いか、困り果てたといふ態で、ドギマギして、四邊を見返



つた。ピエールは、同なじ問を以つて、公爵アンドレエーに向いた。

「なアに、それは、吾々が敵の手に渡す地方を荒さんで置かうといふ爲めなのさ」と、公爵アンドレエーは、腹立つた皮肉な調子で、云つた。「決して奪掠を容るさず、兵をして、劫掠に慣らさしめ無いやうにする、それが、第一の主義なんだ。で、スモレエンスクでも、彼の男は、佛蘭西軍が我軍よりも強いから、我軍は負けて了まふのだといふ判断を下したのだがね、それは、至極理詰な判断さね。が、彼の男には、斯ういふことが、解ら無かつたんだ」と、公爵アンドレエーは、不意に甲走つた聲で、云つて、「彼の男には、吾々が始めて露西亞の領地内で戦つて居るのだといふことや、兵の心に未だ嘗て見たことの無い精神が出来て居ることや、吾々が續けざまに二度佛蘭西軍を撃退したことや、その成功が吾々の力を十倍に増て了まつたことなどは、何うしても解ら無かつたのだ。彼の男は、退却を命じた、總ての吾々の努力、吾々の咒咀、悉皆無益であつた。彼の男には、謀叛するなどといふ考想は更に無かつたのだ、有らゆる事を一番良い方法でやうとし、あらゆる事を善く考へ盡した上でやつたのであつた。けれども、全くその爲めに、彼の男は、何の役にも立た無かつたんだ。彼の男は、有らゆる事を、有らゆる獨逸人が考へ無ければならんやうに、健全に正確に考へたのだが、全くその爲めに何の役にも立た無かつたのだ。何う云つたら、君に解るか知ら……うん、君の御親父が獨逸人の侍僕を使つて居たとし給へ、そして、その男は、非常に良い侍僕で、君よりも自然好く、御親父の有らゆる用を辨するのだ、それで、平常は、實に結構至極なんだ、けれども、若し、一朝御親父が大病に罹れたとすると、君は、その侍僕を追い退けて、君自身で、君の不器用な、不慣な手で、御親父の看病を爲るが宜いんだ、さうすれば、その方が、幾ら熟練した人でも、他人の手にかゝるよりか、御親父には、安心が能きるものなんだよ。吾々が、バルクレエーを罷したのは、さういふ風のものなんだ。露

西亞が無事であつた限りは、外國人を使つて居ても宜くつて、その外國人が、實に良い大臣であつたんだが、一朝國が危険に遭遇することになるや否や、その骨肉の人間を要することになるんだ。では、君の俱樂部では、彼の男を謀叛人にしてしまつて居るんだね。彼等は、今、彼の男を謀叛人だと云つて謗つて居るんだが、やがて、そのうち、その間違つた非難に恥ぢ入つて、彼等は、彼の男を、英雄とか、天才とか云つて、不意に讚めあけるだらうよ、けれども、それは、彼の男に對して尙一層不公平に當るんだ。彼の男は、唯だ一個の正直な、綿密な獨逸人に過ぎ無いんだ……」

「彼の男は、傑い將軍だといふんぢやア無いか、でも」と、ピエールは云つた。

「一體傑い將軍といふのは、何ういふものなのか、僕は知らんね」と、公爵アンドレエーは皮肉に云つた。

「傑い將軍かね」と、ピエールは云つた。「うん、それは、有らゆる起りさうな事を先見する人……うん、敵の計畫を洞察する」

「けれども、其様なことは能きるもんぢやア無いよ」と、最早夙くの往時から極まつて居る事柄のことを云ふかのやうに、公爵アンドレエーは云つた。

ピエールは吃驚して、彼を見た。

「だが、君」と、ピエールは云つて、「戦争は將棋のやうなものだといふぢやア無いか」

「それは、さうだよ」と、公爵アンドレエーは云つた。「が、少し違ふのは、將棋では、何の手も、能きるだけ長く考へて居ることが能きるし、時に限りが無いし、それから未だ違ふのは、將棋では、馬の駒は何時でも歩一つよりも強く、歩二つは歩一つより何時でも強いことなんだ、けれども、戦争では、一大隊が、時に



依ると、一師團より強いことがあると同時に、一中隊より弱いことがあるんだ。誰も、決して軍隊の關係的の強さを確めることは能き無いんだ。で、實際」と、彼は云つて、「總司令部である手配次第で何うかなるといふ物が何かあるといふのであつたら、僕は彼方に居て、その手配の手傳を爲すのだけれども、僕は、それを爲すに、此所に居る諸君と一緒に、此所で此の聯隊で勤務する光榮を有して居るんだぜ、で、僕は、明日の勝敗は實際吾々次第であつて、彼等の働きの如何に一向關し無いと思ふね……成功は、未だ嘗て、陣地や、武器の如何は素より、兵數の如何にさへ依つたことも無く、又、將來も、さういふ物に依ることは無いんだ、殊に、陣地の如何などは、一番成功に無關係のものなんだ」

「では、何に依るのかね？」

「僕や、此の人や」と、公爵アンドレーエは、ティモオフィンに指さして、「それから、各々の兵卒のうちにある感情に依るんだ」

公爵アンドレーエは、自分の聯隊長を、驚愕と、怪訝とで、見詰めて居たティモオフィンをジロリと見た。公爵アンドレーエは、何時もの控へ目な沈黙とは打つて變つて、今は昂奮したらしく見えた。彼は、不意に彼の心の裡に起つて來た考案を云はずには何うしても居られ無いらしい態であつた。

「戦は、何うしても勝つと固く決心した方が勝つものなんだ。何故、吾々はアウステルリッツの戦に負けたのか？。吾軍の損害は、佛蘭西軍の損害と殆ど同等であつた、けれども、吾々はその日極く早いうちに、この戦は負けたと、吾々自身云つた、で、吾々は負けた。で、吾々の負けたのは、その時には、吾々が何の爲めに戦ふといふ確乎としたことが何も無かつたからなんだ、吾々は、唯だ能きだけ早く戦をしまひ度いといふのみであつたのだ。吾々は敗れた、だから、逃げやう」で、吾々は逃げた。若し、吾々が晩までさう

いふことを云は無かつたのであつたら、負けたか何うだかそれは決して分から無かつたのだ。が、明日は、吾々は決してそれを云は無い。君は、吾々の左翼の陣地が弱くつて、右翼が廣がり過ぎて居るといふんだが」と、彼は、話し進んだ。「左様なことは總て愚なことなんだ、左様なことは總て何でも無いことなんだ。けれども、明日吾々を待つて居るものは何だらう？。非常に雑多な不慮の事件の何千何百萬が起つて、それが、彼等が逃げるか、それとも、吾々が逃げるかを、一轉瞬の間に決し、この人が殺されるか、彼の人々が殺されるかを、瞬間に決して了まふのだ、けれども、今爲されつゝある事は、何も彼も悉く唯だの見戲なんだ。事實は斯うなんだ。君が今日一緒に陣地を視察して廻つた彼の人々は、事の進行に對して何を爲さ無い、彼の人々は全くの邪魔になるのだ。彼等は、皆各自の卑しい利害にばかり眼を着けて居るんだ」

「此様な大切な場合に？」と、ピエールは、苦々しさうに、云つた。

「此様な大切な場合に？」と、公爵アンドレーエは繰り返した。「彼等に取つては、これが、唯だ、競争者をたゞき落し、勳章なり、綬章なりを、もつと多く得る爲めの機會に過ぎ無いんだ。僕から見れば、明日起るべきことは、斯ういふんだ、即ち、十萬の露西亞軍と、十萬の佛蘭西軍とが戦ふ爲めに出會ふのだが、事實は、さういふ二十萬の人間が戦つた上で、最も烈しく戦つて、最も身を惜ま無い方が勝利を得ることなんだ。で、何なら、僕は云つて置かうが、何ういふことが起るにせよ、何ういふ混亂を彼方の奴等がやらうとも、吾々は明日の戦には勝つ、何ういふことがあらうとも、吾々は、勝利を得るんだ」

「閣下、それは、全く眞實であります、神聖な眞實であります」と、ティモオフィンが口を挟めた。「誰が今身を惜みませう。私の大隊の兵は、實際ですよ、露西亞酒を飲まんです、これは、尋常一様の日では無いんだからと、云ひましてな」



衆皆黙まつて居た。

將校たちは起つた、公爵アンドレエーは、彼等と一緒に納屋から出て行つて、副官に最後の命令を與へた。

將校たちが行つて了まふといふと、ピエールは、公爵アンドレエーの傍へもつと寄つて、談話を始めやうと爲た、が、その途端に、二人は、路の上の餘まり遠く無い所で馬の足音を聞いた、そして、その方角を見るときふと、公爵アンドレエーは、一人の哥薩克騎を伴れたウオルツォーゲンとクラウゼウィツツを認めた。彼等は二人の直ぐ傍を、尙且話しながら、乗つて通つた、で、ピエールと公爵アンドレエーは、獨逸語で次のやうな言語を傍聞きせざるを得無かつた——

「戦争は、廣い地方に互つて行はなければならぬ。この意見は、吾輩が何様な言語を以つてしても、その大切さを十分には言ひ切れ無い程大切なものなんだ」と、一人が、獨逸語で云つた。

「いや、全く左様だ」と、今一つの聲が云つて、「目的は敵を疲らすにある以上は、私人の損害などを斟酌しては居られぬのだ」

「全く左様だとも」と、最初の聲が同じた。

「廣い地方に互つて行ふ」と、彼等が乗り通つて了まふといふと、公爵アンドレエーは憤然とした鼻息で繰り返した。「その廣い地方の内、僕は、荒涼丘に、父親と子息と、妹を持つて居たんだ。彼奴は、其様なことなんぞは何とも思は無いんだ。此所が正に、先刻君に話した所なんだよ、彼様いふ實に良い獨逸人だが、明日の戦に勝つのでは無い、奴等は、奴等の能き得る限に於て、唯だ事件を混亂させて了まふばかりなんだ、何故なれば、奴等の獨逸の頭腦の裡には、腐つた卵一つの價値さへ無いやうな計算の外何にも無く、

奴等は、奴等の心の裡に、明日無ければならぬ物——即ち、ティモオフィンが持つて居るやうな一物——を持つて居無いらなんだ。彼奴等は、全歐羅巴をナポレオンの奴に明け渡して了まつて、それで、今は、吾々を教へに来たんだ——實に結構な教師どもぢやア無いか」と、彼は云ひ足した。彼の聲が再甲走つて來た。

「では、君は、明日の戦は勝利だと思ふんだね」と、ピエールは云つた。  
「左様さ、左様さ」と、公爵アンドレエーは、憤然して云つた。「若し、僕が權力のある位地に居るのであつたら、是非行り度いと思ふことが一つあるね」と、彼は、再始めた。「僕は、捕虜を決してこしらへ無いね。捕虜をこしらへるのは一體何ういふ意味なんだらうね。それは、武士道だといふんだ。が、佛蘭西人は僕の家を破壊した、そして、今莫斯科を破壊する爲めに來りつゝあるのだ、奴等は、僕に凌辱を加へた、又、刻々僕に凌辱を加へつゝあるのだ。奴等は僕の敵だ、奴等は、僕の考へ様から云へば、罪人なんだ。で、ティモオフィンもさう思ふんだし、軍全體も又さう思つて居るんだ。奴等佛蘭西人は、殺すべきものなんだ。奴等は、僕の敵であるが故に、何うしても僕の友ではあり得無いんだ、ティルシットの決議が何だらうが、彼だらうが」

「左様だ、左様だ」と、ピエールは云つて、輝く眼で公爵アンドレエーを見た。「僕は全く同感だ」  
モザアイスクの丘以來、その日終日ピエールの心を攪き亂して居た問題が、今は、全く明瞭な、十分に解決されたものとなつて、ピエールを打つた。彼は、今、この戦争と、今差し迫つて居る戦の意義の全體及びその重大さの全體を見たのだ。彼がその日見た物全體、彼が一寸々々窺ひ得た嚴峻な沈痛な顔の全體が、今は全く新たな光明の下に彼に現はれた。彼は、物理學の語を借りて云へば、彼がそれ迄に見たさういふ人々の總てのうちに愛國心の潛熱を見た、そして、そこに、彼等が皆死の用意を爲て居る落着と、外觀的の氣輕



さの説明を見出したのであつた。

「吾々は捕虜を取つてはいけ無い」と、公爵アンドレーエーは云つた。「その變化ばかりで、戦争の全光景が一變されて、戦争がより少く残酷なものになるのだ。が、戦争を弄そぶ、それが陋悪なことなんだ、寛仁といふやうなことを弄そぶ、それが不好いんだ。さういふ寛仁や、感じ易い事は、積の殺されるのを見ると病氣のやうになつてしまふ——血を見るのが能き無い程、優しい心でありながら——その同なじ積の肉が細切煮になると旨がつて食ふ上流の婦人の寛仁や、感じ易い事と、同なじなんだ。世間の奴等は、戦争の法規だの、武士道だの、休戦旗だの、負傷者に對する人道だのといふやうなことを、屢く云ふ。それは、悉皆、愚劣なことなんだ。僕は、千八百〇五年に、武士道も、休戦旗も、十分見たんだ、敵は吾々を欺むき、吾々も敵を欺むいたんだ。奴等は、吾々の郷土を掠奪し、偽貨を發行し、それから、何よりも悪い事に、奴等は僕の小兒等を殺し、僕の父親を殺し、さうして置きながら、戦争の法規だとか、倒れた敵に對する寛仁だとかいふやうなことを云ふんだ。一人も捕虜を取らなからず、而して、死を與へ、死に出會ふべく行け、これだなければ不好いのだ。同なじ苦痛を経て、僕が斯う思ふやうになつた通りに、この事を思ふやうになつた者は、誰でも彼でも……」

敵が、スモレンスクを取つたやうに莫斯科を取らうが、何うだらうが、一向構は無いと考へたことのある公爵アンドレーエーは、咽喉が神經的に塞へたので、談話の途中で、不意に止まつてしまつた。彼は、黙まつて、幾度も彼方此方と歩いた、が、彼が再話し始めるといふと、彼の眼は、熱のあるやうな光輝を持ち、唇はピリ／＼震へた。

「戦争に、斯ういふ風に寛仁を弄そぶといふやうなことが一切無かつたら、吾々は、今のやうな、必定な

死に面するに足るべき何物かに向つての外は、決して戦争に出無いに違ひ無いんだ。さうなつて来れば、バアヴェル・イヴァー・ニイチがミハイル・イヴァー・ニイチを侮辱した位なことで、戦争が起るやうなことは無いだらう。けれども、若し、今のやうな戦争が起つた以上は、それをして眞に戦争たらしめるが宜いんだ。で、さうなれば、戦争の烈しさは、今とは全く違つたものになるだらう。ナポレオンが今、吾々を攻るが爲めに率て来て居る總て彼れ等のウエストフリア人や、ヘッス人は、露西亞で吾々と戦ひに来無かつたらう。又、吾々も、何の爲めだといふことを知らずに、奥地利や、普魯西で戦をやりには行か無かつたらう。戦争は上品な遊戯では無い、人生に於ける最も陋悪なものなんだ、吾々はそれを理解して居て、戦争を弄そぶではないんだ。吾々は、それを、恐しい萬已むを得ざる事として、峻厳に、嚴肅に、受け納れ無ければならぬのだ。で、結局は、斯うなるんだ、虚偽は止せ、そして、若し、戦争となつたなら、その時は、それは戦争であつて、遊戯では無いといふことになるんだ、左も無くば、戦争は單に、怠惰者や、輕佻な奴等の好きな遊戯に過ぎ無いことになるんだからね……軍職は最も光榮ある職業なんだ」

「所で、戦争とは何だ、戦争に於て成功するには何ういふものが必要なのか、軍人界の道義は、何ういふものなのか？。戦争の目的は殺人だ、戦争で用ゐる手段は——諜偵、誑詐、さういふこととの獎勵、國の破却、軍の維持の爲めに、住民を掠奪し、剽盜を爲す事、それから、軍略と稱する所の欺策と、虚言なんだ、軍人社會の道義といふのは——獨立の一切無いこと、即ち、規律、怠惰、無知識、残忍、放埒、それから、大酒なんだ。が、それにも拘らず、最高の階級だと云つて、誰からも尊敬されて居るんだ。……一番多く人を殺した者が、一番大きい褒美を貰ふんだ……」

「彼等は、吾々が明日爲るやうに、相互に殺し合ふ爲めに、出會ふんだ、彼等は、何萬といふ人間を屠殺



し、惨殺し、さうして置いてから、自分等が殺した人間の数の多いのに對して、感謝の式を神に捧げる（剩つさへ、彼等は、話ではその數を増していふんだ）で、殺した人の數が多ければ多いだけ、功績も從つて大きいんだと、想像して、勝利を光榮がるんだ。何うして、神が天から見ても、彼等の祈禱を聽れるものか」と、公爵アンドレーエは、甲走つた、人の胸を貫くやうな聲で、叫んだ。「あゝ、君、人生は、先頃から、僕には實に苦いものであつた。僕は、餘り物が解り過るやうになつたと思ふんだ。善惡の知識の木の實を味ふのは、人間に取つては、善く無いことなんだ……いや、なに、最早長いことでは無い」と、彼は云ひ足した。「だが、君は、眠くなつたらう、僕も床へ入る時分なんだ。ゴオルキイへ歸り給へ」と、公爵アンドレーエは不意に云つた。

「いゝや」と、ピエールは云つて、心配さうな同情に満ちた眼で、公爵アンドレーエを見詰めた。

「是非歸り給へ、戦の前には、十分に眠無いと不好いものなんだ」と、公爵アンドレーエは繰り返した。彼は、突とピエールの傍へ寄つて、彼を抱擁して、接吻した。「左様なら、行き給へ」と、公爵アンドレーエは叫んで、「吾々が再逢うとも、又、此つ切りにならうとも……」で、急いで振り向いて、彼は、納屋へ行つて了まつた。

最早暗くなつて居た、で、ピエールは、公爵アンドレーエの顔容が、憤つた態であつたか、それとも、優しかつたか、見別ることが能き無かつた。

ピエールは、少時黙まつて立つて、公爵に隨いて行つたものか、ゴオルキイへ歸つたものかと、躊躇して居た。「いゝや、彼の男は俺に居て貰ひ度く無いんだ」と、ピエールは思ひ定めて、「で、これが吾々の最後の會合に違ひ無いぞ」。彼は、深い溜息を吐いた、そして、ゴオルキイへ乗り歸つた。

公爵アンドレーエは、納屋の裡で敷氈の上で横になつた、が、眠れ無かつた。

彼は眼を瞑つた。幻象の一行が、他の列に次で、次ぎ／＼に彼の心に起つて來た。或る一つの心算の上に、彼は、長く、そして、嬉しく、止まつて居た。彼は、現然と彼得堡での或る宵を憶ひ起したのだ。ナタアシヤが、熱心な、昂奮した顔で、前の夏、茸菌を探しに行つて、大森林の裡で路に迷つて了まつた時のことを、彼に話して居たのであつた。ナタアシヤは、断片的と、森の暗い奥や、自分の感や、自分が出會つた養蜂者との談話を、話した、そして、始終、物語を断つて、斯う云ひ／＼した。「いゝえ、駄目ね、眞實のことが話せ無いわよ、いゝえ、これぢやア貴下には解ら無いことよ」、公爵アンドレーエは、彼には、善く解かるのだと、ナタアシヤに安心させやうと試み、そして、實際、彼には、ナタアシヤが彼に解らせやうと思つた儘で、のことが、善く解つたのだけれども。

ナタアシヤは、自分の言語に不満足であつた、自分の言語は、今言ひ表はさうとする、自分が、その日知つた熱烈な、詩的感情を傳へ無いやうに感じたのであつた。

「何も彼も、何とも云へ無い好い心持だつたのよ、その老翁も、森は眞實に暗かつたの……そして、眞實に親切な顔付てな有りませんでしたの、その……いゝえ、不好ないわ、何うしても云へ無い」と、ナタアシヤは、赤くなつて、感動して、云つたのであつた。

公爵アンドレーエは、その時、ナタアシヤの眼を見詰めながら、彼が微笑んだと同なじ幸福な笑顔を今も爲た。

「俺は彼の女を理解した」と、公爵アンドレーエは思つて「いや、彼の女を理解する以上であつた、彼の精神上の力、彼の率直、彼の心の開いて居たこと、彼の女の肉體と固く結び付けられて居るやうに見えた彼



の女の眞の靈魂、俺が彼の女に於て戀したのは、その眞の靈魂なんだ……彼様に深く、彼様に熱烈に戀したのは……」と、不意に、彼は、自分の戀が何う終つたかを思ひだした。

「彼奴はさういふことなどは、何とも思は無かつたんだ。彼奴は、それを少しも見無かつた、それに就ては、全然何の考想も無かつたんだ。彼奴は、彼の女に於て、綺麗な若い生娘を見たのみで、永久に、自分の生涯を、それと共にしやうなどいふ考想は更に無かつたんだ。それなのに、俺は……それなのに、彼奴が未だ健康で、幸福で居やがる」

公爵アンドレーエーは、不意に火傷でも爲たかのやうに、跳び上がった、そして、再納屋の前を彼方此方と歩き始めた。

(二十六)

八月の二十五日、ボロディノオの戦の前宵に、佛蘭西の宮庭の監理長官のモシウ・ド・ボオセエと、大佐フ・ヴィエーが、前者は巴里から、後者はマドリイドから、ヴァル・エフのナポレオンの屯營に着いた。

宮庭の制服に着換へてから、モシウ・ド・ボオセエは、皇帝に對して彼が持つて来た幾つかの包を、皇帝の前へ持つて行かすやうに命じた、そして、自分は、ナポレオンの天幕の取付きの部室へ入つて行つて、其所で、侍従武官と話しながら、セツセと包の捆を解いて居た。

フ・ヴィエーは、天幕の入口で、知り合ひの將官たちと談話を爲て居た。

皇帝ナポレオンは、未だ寢室を出無かつた、彼は、身粧を終りつゝあつた。満足の唸るやうな鼻息で、彼は、最初には彼の肥つた背部を、その次には、彼の圓々とした、毛むくじやらの胸を、侍従が彼の身體を擦

つて居た身體掃の方へと向けて居た。今一人の侍従が、指一本掛けて、屨を持つて居て、自分ばかりが、何處へ、又、何れ程、オー・ド・コロオニユを撒り掛けるべきかといふことを知つて居るのだと云ふやうに見える顔容で、皇帝の美食で膨れた身體へ、オー・ド・コロオニユを撒り掛けて居た。ナポレオンの短い髪は、濕つて、額の上で、梳き堅められて居た。が、彼の顔は、膨れて、黄色かつたけれども、肉體上の満足を表して居た。

「もつと、強く、もつと……」と、彼は咽喉を震はして、咳拂を爲て、彼を擦つて居る侍従に云つた。

直ぐ前の戦に取つた捕虜の數を、皇帝に報告しに寢室へ来て居た副官は、彼の使の旨を傳へてから、戸口に立つて、退く許可が出るのを待つて居た。ナポレオンは、顔を擧めて、肩の下から、副官を、ジロリと見上げた。

「一切捕虜は取らん」と、彼は、副官の言語を繰り返した。「奴等は、自分自身で滅亡するやうに爲て居るのだ。露西亞軍に取つては、ますます、氣の毒なことなのだ」と、彼は云つた。

「もつと強く、もつと強く擦れ」と、彼は云つて、侍従の方へ、彼の肥つた肩を圓めて出した。「宜しい。

ボオセエを來させろ、フ・ヴィエーも一緒に」と、彼は、副官に云つて、頷いた。

「長まりました、陛下」で、副官は出て行つた。

二人の侍従が陛下に手早く衣服を着せた、そして、近衛の淺黄の制服で、彼は、確乎した、速い歩調で、謁見室へと歩き込んだ。

ボオセエは、それまで、皇帝が入つて来る丁度正面に當る二個の椅子の上へ、自分が皇后の許から持つて来た贈り物を、大急ぎで飾り立て、居たのであつた。が、皇帝が、衣服を着て了まつて、入つて来るのが、



意外に速かつたので、ボオセエは、ナポレオンを驚かすやうな物を飾り上げて了まふ間隙が無かつたのであつた。

ナポレオンは、ボオセエ等が何を爲して居るのか直ぐ気が付いた、そして、彼等の準備が未だ出来て居無いのだから見て取つた。彼は、彼等が、彼に向つて心持の悪い驚愕になる物を用意することに於て持つ愉快をば、彼等から奪つて了まひ度く無かつた。彼は、ボオセエの居るのに気が付か無いやうな態を爲した、そして、フ、ヴィエーを自分の傍へ招き寄せた。

ナポレオンは、厳格に顔を擧めて、フ、ヴィエーが、歐羅巴の他の端のサラマンカで戦つて居るナポレオンの軍の勇猛や忠節に就て話すことを、黙まつて、聽いて居た、フ、ヴィエーの云ふのでは、彼等は、唯だ一つの望——彼等の皇帝を辱しめざる働を爲たいといふこと——それから唯だ一つの恐怖——皇帝の意に違はざること——しか持つて居無いといふのであつた。

戦の結果はさんくなものであつた。ナポレオンは、自分が居無ければ、何うしてもさう爲るだらうと豫期して居たかのやうに、フ、ヴィエーの報告中に、皮肉な評を挾れた。

「私は、莫斯科でその埋め合せを爲る」と、ナポレオンは、云つた。「では、又」と、彼は、云ひ足した、そして、最早その時には、彼は飾り上げを拵へあけて了まつて、椅子の上へ、布で掩つた何物かを立て、了まつて居たボオセエを喚び寄せた。

ボオセエは、ボルボン家の古い侍臣のみがその爲方を知つて居るやうな、官中官の低い點頭を爲て、ナポレオンに近寄つて、手紙を捧げた。

ナポレオンは、快活にボオセエに言葉を掛け、彼の耳を捻つた。

「實に速く来たな、好く来た。時に、パリでは何と云つて居るかね？」と、彼は云つたが、彼の厳格な顔容が、不意に、非常に親みのある表情に變つた。

「陛下、パリぢうが陛下の御不在を残念がつて居ります」と、ボオセエは、何うしてもさう云は無ければならん義務があるかのやうに、云つた。

が、ナポレオンは、ボオセエは、義務として必然其様なやうなことを云ふだらうとは知つて居たけれども又、本氣な場合であつたら、それが虚言だといふことを知つたのであらうけれども、それでも、ボオセエの口から斯ういふことを聞くのが嬉しかつた。彼は、再耳を捻る光榮をボオセエに與へた。

「遠い旅を爲せて氣の毒だつたな」と、ナポレオンは云つた。

「陛下、實めて莫斯科の門で謁見を仰せ付けられ、ば宜しいがと思つて居りました」と、ボオセエは云つた。

ナポレオンは微笑んだ、そして、頭を愕然と擧げて、右へと振り向いた。

侍従武官が、金の喫烟草函を持つて恭やしく近寄つた、そして、それを捧げた。ナポレオンはそれを取つた。

「左様、お前は運が好かつたんだ」と、彼は云つて、開いた喫烟草函を鼻へ附けた。「お前は旅行が好きだな、三日のうちに莫斯科を見せて遣るぞ。お前は、亞細亞の都を見やうとは思ひも掛け無かつただらうね。面白い旅行だらうよ」

ボオセエは、自分の旅行好きであることに對するこの眷顧に向つて、感謝して、叩頭を爲た（尤も、その時までは、自分の旅行好きであることは、自分でも知ら無かつたのだが）。



「やア、何だね？」と、ナポレオンは、宮中官等が衆皆覆被の下に隠されて居る何物かを見詰めて居るのに気が付いて、云つた。

ボオセエは、宮中官らしい敏速さで、背部を見せず、半身で二歩退いた。そして、同時に覆被をサツと引き除け、斯う云つた——

「皇后から陛下への御贈物でございます」

それは、ゼラアルが極彩色で畫いた、ナポレオンと奥地利皇帝の娘との間の見——誰もが何ういふ理由でか、羅馬王と呼んで居た小さい男の兒——の肖像であつた。

シクスツスのマドンナの裡の基督のやうな眼の、非常に可愛い、捲髪の頭の小兒が、劍球をやつて居るところが畫いてあつた。球は地球儀になつて居、他の手にある劍は、笏になつて居るのであつた。畫家が、何ういふ積りで、所謂羅馬王が、笏の上へ地球儀を投て居るところを畫いたものなのか、それは、何うも明瞭で無かつたのだが、その寓意が、巴里でその肖像を見た誰にもさうであつた如く、ナポレオンには、全く明瞭で、非常に心持の好いものであるらしかつた。

「羅馬王だ」と、彼は云つて、如何にも形の好い手態で、肖像を指さした。「觀事な出来だ」。何時でも自由自在に表情を變へ得る伊太利人の特質的の伎倆で、彼は、肖像の傍へ行つて、うち沈んだ優しさの態を爲した。

彼は、自分が、その刹那に、云ふか、爲るか、したりする事は、歴史のものになるだらうといふことを感じた。彼が、その刹那、彼の壯大の絶頂——彼の小兒が、地球を劍球にして弄そんで居る程大きい彼の壯大の絶頂——に於て、爲し得る最も良い方向は、その壯大とは全く反對に、最も單純な、父親の優しさを表した。

はすのであるのだといふことに、彼は直ぐ思ひ付いた。

彼の眼は、感情で曇らされた、彼は、前へ動いて、椅子をと振り返つた（椅子は、自然に彼の下へ飛び出て来たやうであつた）、そして、肖像に向いて、腰を下した。彼からの唯だ一つの手眞似で、衆皆は足を蹠て後へ下つて、その偉人をば、一人で思ひのまゝに感情に耽らせた。

其所に少時坐つて居て、彼自身にも何故とも分ら無かつたのだが、畫のザラ／＼した表面を撫で／＼から、彼は起つて、再ボオセエと、當番の侍從武官を喚び出した。

彼は、彼の近所に屯して居る古親兵等が、彼等の崇拜して居る皇帝の子息であり、繼嗣であるところの羅馬王を見ることの幸福をば、彼等から奪つて了まはぬやうにと、肖像をば、彼の天幕の正面へと持ち出すやうにと命じたのであつた。

彼が陪食を仰せ付けたボオセエと一緒に朝食を食つて居る間、彼は、豫期した通りに、肖像を見に駆け集まつて来た古親兵の兵卒や將校等の熱心な喚呼を聞いた。

「皇帝萬歲。羅馬王萬歲。皇帝萬歲」と、熱心な聲々が叫んだ。

朝食の後で、ボオセエの前で、ナレポオンは、軍への勅諭を口授した。

「簡潔に、そして、強い」ナポレオンは、自分が口授した勅諭を、直させずにそのまま取つて、讀み返して了まふといふと、斯う斷じた。それは、次のやうなものであつた。

「兵士等よ。これは、爾等が非常に待ち望んで居た戦である。勝利は爾等の手中にあるのだ。勝利は、吾には何うしても得無ければならぬものだ、それは、吾々に無くてならぬものを、吾々に與へるのだ、居心の好い宿舎と、吾々自身の國へ直きに歸れることゝが、それなのだ。爾等は、アウステルリッツや、マリイド



ランドや、ヴァイテブスクや、スモレンスクで働いたやうに、働け。而して後世をして、この日に於ける爾等の功績を、矜誇を以つて、回想せしめよ。而して、又、彼等をして、爾等の各個に就いて、斯く云はしめよ、彼は、莫斯科の前の大戦に加はつたのだ、と」

「莫斯科の前」と、ナポレオンは、繰り返した、そして、旅行が非常に好きなボオセエをばナポレオン自身と一緒に馬に乗つて、視察に出やうと誘つて、ナポレオンは、外方で、彼等を待つて居る鞍を置いた馬へと、天幕を出た。

「優渥な御意で」と、ボオセエは、皇帝と一緒に來いといふ誘ひに答へて、云つた。彼は、甚く眠かつた。彼は、馬を旨く乗れ無かつたし、又、馬が怖かつた。

が、ナポレオンは、旅人に向つて頷いた、で、ボオセエは、騎ら無い譯には行か無かつた。ナポレオンが天幕から出るといふと、彼の子息の肖像の前の古親兵の喚呼は、更に高まつた。ナポレオンは顔を擧げた。「この見を彼方へ伴れて行け」と、彼は、如何にも形の好い、氣高い手態で、肖像を指さして、云つた。「戦場を見るには未だ早過ぎる」

ボオセエは、眼瞼を下け、頭を下けて、何れ程善く、自分が皇帝の言語を、了解し、且それに感服するかを表はす爲めに、深い溜息を吐いた。

(二十七)

その日、即ち、八月二十五日ちうを、ナポレオンは、歴史家等の傳ふるところでは、馬上で送つて、地勢を視察したり、彼の元帥たちから提出した諸方略を批評したり、彼の將軍たちに、自身で命を與へたりし

たのであつた。

カロオチヤ川に沿うた露西亞軍の兵の配置の元の線は、破られて了まつた、そして、前の日に於けるシヅアルディノ砲壘の陥落の結果として、その線の一部——左翼——が、忽然後へ退けられた。線のその部分は少しも強められ無かつた、最早川では掩護され無かつた、そして、前より廣々とした、平坦な地面がその前に横たはつて居た。

佛蘭西軍が攻撃すべきものは、戦線のその部分であつたといふことは、軍人であると無いとを問はず、誰にでも明白なことであつた。誰でも、この結論に達するには、太して考へるに及ばぬことで、皇帝や、彼の元帥等の配慮や心配は無用であり、そして、人々がナポレオンに歸するのが非常に好きであつた天才と稱する才能の特種な高い度の全く要ることは無いと思つたに違ひ無い。所が、後になつて、この戦を斂した歴史家等や、その當時ナポレオンを取り繞りて居た人々や、そしてまだ、ナポレオン自身までもが、左様は思は無かつた。

ナポレオンは、戦場を乗り廻つて、非常に考へ込んだ態で、地形を見詰め、一人で頭を得意氣に、或は、疑はし氣に振つた、そして、自分の判断にまで自分を案内した推論の深遠な経過をば、自分の周圍に居た將軍たちには知らせ無いで、唯だ最後の結論のみを命令の形式で、彼等に傳へたのであつた。

今はエクムウル公と稱せられて居たダヴウが提出した露西亞軍の左翼を包圍しやうといふ意見に對してはナポレオンは、何故その必要が無いかといふことは説明せずに、唯ださう爲る必要は無いのだと云つた。

が、將軍コムバン（敵の先頭の掩堡を攻撃する筈になつて居た）の、自分の師團を森の裡を通過させやうといふ提議に對しては、所謂エルチンゲン公、即ち、ネエが、森を通して軍隊を動かすことは危険を冒す



ことであつて、師團の隊形を崩すことになるだらうといふ異論を唱へたに拘らず、ナポレオンは、コムパンの意見を裁可した。

シエヴァアルデイノ砲壘の前面の地形を精査してから、ナポレオンは、少時の間黙つて考へ込んで居た、そして、露西亞軍の掩堡に對して砲撃する爲めに明日二個の砲兵陣地を置くべき地點と、それと一線を爲して野戦砲兵を配列すべき地點とを、指し示した。

それと、尙其他の命令を與へてから、彼は自分の宿營へ歸つた、そして、兵の配置が、彼の口授の下に書き留められた。

この配置——それに就いては、佛蘭西人は熱心を以て、歴史家等は深い尊敬を以て、語るのだが——は、次のやうな諸命令で成り立つて居るのであつた——

「エクムウル公に依つて占領せられたる平原に夜のうちに置かるべき二個の新砲兵陣地は、黎明に、前面の敵の二個の砲兵陣地に向つて砲撃を開始すべし」

「それと同時に、第一軍團の砲兵司令官たる將軍ベルネティは、コムパン分團の砲三十門と、ドセエス及びフリアン分團の全榴弾砲と共に、前進して、砲撃を開始し、敵の砲兵陣地の上に、破裂弾を雨下すべし、而して、その敵の砲兵陣地に向つては左の如き諸砲の攻撃あるべし——

即ち、親兵の砲兵の二十四門、  
コムパン分團の三十門、及び

フリヤン及びドセエス分團の八門、  
——總計六十二門——

「第三軍團の砲兵司令官たる將軍フウシニーは、總計四十門の砲を向て、左方の掩堡を砲撃すべき砲兵陣地の兩翼に、第三及び第八軍團の全十六門の榴弾砲を置くべし」

「將軍ソルビエーは、何時にても、命令次第、親兵の砲兵の全榴弾砲を以て、敵の掩堡の孰れかに向ふやう、準備し置くべし」

「以上の砲撃中、公爵ポニヤトオフスキイは、森林中の村に進んで、敵の陣地の後方に出づべし」  
「將軍コムパンは、森を横断して、第一の堡壘を占領すべし」

「以上の諸戦線に攻撃開始せられたる後、尙その上の命令は、敵の行動に依りて、與へらるべし」

「左翼に於ける砲撃は、右翼の砲聲の聞ゆるや否や、開始すべし。モラン分團の及び總督の分團の狙撃兵は、右翼の攻撃開始を見ると共に、猛火を開くべし」

「總督は、ポロディノの村を陥れ、その三橋梁に依つて、流を越え、モラン及びセラアル分團と同高地に進み、後者は、總督の指揮の下に、砲壘に進み、而して、軍の他の諸隊と同一線に出づべし」

「以上一切の行動は、能き得る限り、遊軍を置いて、整然たる秩序を以て、これを爲すべし」  
「モザアイスク附近の大本營に於て、千八百十二年、九月六日」

これ等の命令——若し、誰でも、ナポレオンが彼の軍隊を配置する天才に對する迷信的畏怖を投げ捨てさ



へすれば、これ等の命令が、如何にも混雑して居て、曖昧なものであることに気が付くであらうが——は四個の點——四個の命令に縮めることが能きる。所で、左様いふ命令は、一個だにも、實行せられ無かつたか、實行し得られ無かつたかであつた。

第一の命令は——

ナポレオンが選んだ地點に置かれた二個の砲兵陣地は、それに合同すべきベルネティ及びフウシーの砲と共に、合計百〇二門の砲で、射撃を始めて、露西亞軍の掩堡や、砲壘を破壊するといふのだ。

これは、實行が能き無かつたのであつた。何となれば、ナポレオンが極めた地點からでは、爆弾は露西亞の掩堡までは達し無かつた、で、さういふ百〇二門の砲は、唯だ空中へ發砲されたのみで、到頭、一番近い司令官が、ナポレオンの命令に反いて、前進を命ずるに至つたからなのだ。

第二の命令は——

ボニヤトオフスキイは、森の中の村へ進んで、露西亞軍の左翼を包圍するといふのだ。

これも、實行され無かつたし、又、實行することも能き無かつた、何となれば、ボニヤトオフスキイは、森の中の村へ進んで見ると、ツウチコフが、自分の進路を塞いで居るのを見出した、で、露西亞軍の陣地を包圍し無かつたし、又包圍することも能き無かつたからなのだ。

第三の命令は——

將軍コムバンは、第一の露西亞の堡壘を占領する爲めに、森の中へ進むといふのだ。

コムバンの分團は、第一の堡壘を取ら無かつた、反つて、撃退されたのであつた、何となれば、森を出るといふと、敵の葡萄彈の砲火の下に隊伍を整へ無ければなら無かつたからなのだ、そして、敵の葡萄彈のこ

となどは、ナポレオンは、更に豫期して居無かつたのであつた。

第四の命令は——

總督は、村(ボロディノオ)を占領し、それから、其所の三橋梁に依つて、流を越え、モラン及びフリアンの分團と同じ高地へ出て、(彼等が、何處から、何時、進むべきかといふことは更に云つて無いのだ)、それから、その合同隊は、總督の指揮の下に、堡壘に進んで、他の諸隊と同一線に出るといふのだ。

誰でもが、この混雑した句節からといふよりは寧ろ、自分へ與へられたその命令を總督が實行しやうとした企から、推定し得るところでは、總督は左方から、ボロディノオを通過して、堡壘に向つて進み、モラン及びフリアンの兩分團は、それと同時に、前面から進むといふのであつたらしい。

總て、これは他の命令と同様に、實行が能きることでは無かつたのだ。

ボロディノオを通過した後で、總督は、カロオチャ川で撃退されて、それより前へは一步も進め無かつた。モランとフリアンの兩分團は、堡壘を取り得ずに、撃退された、そして、戦の終期に於て、その堡壘は、騎兵が陥れた(多分ナポレオンは、豫想しても居無かつたし、又、聞きも爲無かつたらうと思はれる戦闘に於て)。

で、斯ういふ風に、出された命令は、一つだも、實行され無かつたし、又、實行され得無かつたのだ。

が、その方略の中には、戦が始まつてから後で、尙その上の命令が、敵の行動に随つて與へらるゝといふ項がある、で、總て必要な命令が、戦中にナポレオンから與へられたのだと、想像する人があるかも知れ無い。所が、さうでは無かつたし、又さうはあり得無かつたのだ、何となれば、戦全體の間、ナポレオンは、戦の進行を少しも知ら無かつた(それは後になつて分つたことなのだ)程、實戰場から離れた所に居



たので、戦中に彼が與へた命令は、唯一つでも、實行され得べき筈では無かつたからなのであつた。

(二十八)

多くの歴史家は、佛蘭西軍が、ポロディノオで失敗したのは、ナポレオンが風を引いて頭が悪くなつて居た爲めであつて、若し、彼が風邪を引いて居無かつたのであつたら、彼が、戦の前及び間に、與へた命令は、尙一層天才の著るしく顯れたものであつて、露西亞はそれが爲めに滅亡して、世界の地圖が變つたに違ひ無かつたのだと、主張して居る。

露西亞が一人の人——彼得大帝——の意志で變られて了まつたとか、佛蘭西人が一人の人——ナポレオン——の意志で共和國から帝國に爲り、佛蘭西軍が露西亞へ進軍したのだとかいふやうなことを主張し得るやうな歴史家等にまでは、ナポレオンが八月の二十六日に甚い風邪を引いて居たが爲めに露西亞が一強國として残り得たのだといふ結論が、争ひ難き、確定的のものに見えるかも知れ無い。

ポロディノオで戦ふか、戦は無いか、ナポレオンの意志次第であつたら、又は、彼が、この命令とか、彼の命令とかを、與へることが、彼の意志次第のものであつたら、彼の意志の表現を妨けた風邪は、露西亞の滅亡を救つたことになるのは、明白であつて、その結果としては、二十四日に、雨靴をナポレオンに穿かせることを忘れた侍僕が、露西亞の救主だといふことになるのだ。

その論法で行けば、斯ういふ推定は何うしても避け難い、さういふ推定は、ゾオルテールが、冗談に主張した(彼は何を嘲弄して居るのか自分では知覺して居無かつたのだが)聖バアソロミューの惨殺はチャールス九世が胃病に悩んで居た結果であるといふ議論と、全く同なじやうに避け難いものなのだ。

が、露西亞が、一人の人——彼得大帝——の意志で造り變られたとか、一人の——ナポレオン——の意志で、佛蘭西帝國が造られ、露西亞との戦争が始まつたとかいふやうなことを受け容れることの能き無い心の人々にまでは、さういふ議論は、薄弱で、不合理であるのみならず、尙又人事の自然に全く反對したものと見えるだらう。史的事件の原因は何ういふものから成り立つて居るか? といふ問題は、彼等に他の答を暗示するだらう、そして、その答たるや、此の世の事件の進行は、天から前以つて定め置かれたものであると同時に、さういふ事件に干はる人々の總ての意志に依るものであつて、さういふ事件に於てナポレオンの勢力が最も重大であるといふことは、全く外形的な、空想的なものであると、いふ觀念に基いて居るものだ。

聖バアソロミューの惨殺(それに對する命令はチャールス九世から出たのであるが)は、彼の意志の結果では無く、彼が與へた命令が、その惨殺の原因であつたといふのは、彼の想像に過ぎ無かつたといふ説、及び、ポロディノオの八萬人の屠殺は、ナポレオンの意志に歸するのでは無く(戦を始める命令は彼が與へただけれども)、その屠殺は彼の所行だといふのは彼の想像に過ぎ無いといふ説は、一見しては、餘程奇異に見えるが、然し、人間の威權——それが吾々の誰もが、人間たる點に於てはナポレオンと少しも異ら無いものであることを吾々に告げて呉れるのだ——が、この問題に對する上のやうな解答を受け容れるのだ、そして、史的研究は、十分に、上の説を確保して居る。

ポロディノオの戦では、ナポレオンは誰に向つても發砲せず、又、誰をも殺さ無かつた。さういふことは悉皆彼の兵士が爲たのだ。だから、彼様いふ人々を殺したのは、ナポレオンでは無かつた。佛蘭西軍の兵士は、ナポレオンの命令の爲めでは無く、彼等自身の欲望で以つて、ポロディノオで、彼等の



同人類を殺しに出たのだ。進軍の爲めに、飢ゑ、衣服が襤褸になり、疲憊れ切つて居た軍全體——佛蘭西人、伊太利人、獨逸人、波蘭人——が、莫斯科への彼等の途を塞いで居る敵軍を見ると、「酒は抜かれた、飲まざるを得ぬ」と、感じたのであつた。で、若し、ナポレオンにして、その場合になつて、彼等に露西亞人と戦ふことを禁じたのであつたら、彼等は彼を殺して、そして、露西亞人と戦ひに行つたに違ひ無い、何となれば、さうすることが彼等に取つては何うしても避け難いことであつたからなのだ。

彼等は、彼等が莫斯科の前の戦に加はつたのだと、後世が云ふぞといふことを、人の身體を切つたり、こきざいたり、人を殺したりすることに對する慰藉として、彼等に提供するナポレオンの宣言を聞いた時に、「皇帝萬歲」と叫んだのだが、彼等は、地球で劍球をやつて居る小さい男の兒の畫を見た時も、丁度同様にやうに「皇帝萬歲」と叫び、又、何様な愚劣なことが云はれた場合でも、丁度前の場合と同様に、「一々皇帝萬歲」と叫んだのだ。

彼等に取つては、その場合は、「皇帝萬歲」と叫んで、そして、莫斯科で、征服者として、食と休息を得るより外に方は無かつたのだ。だから、彼等が彼等の同人類を殺したのは、ナポレオンの命令の故では無かつたのだ。

それから、戦の進行を定めたのも、ナポレオンでは無かつた、何となれば、彼の命令は一つだも實行されず、そして、又彼は、彼の前を過ぎ行きつゝあつた事件を寸毫も知ら無かつたからなのだ。

だから、これ等の人々が相互に屠殺し合つた方法は、ナポレオンの意志の如何に依つたものでは無くしてその事件に加はつた何十萬といふ人々の意志に因つて、ナポレオンには何の交渉も無く進行したのだ。總てこれが彼の意志に基いたのだといふのは、ナポレオンに唯ださう思はれたといふに過ぎ無い。

故に、ナポレオンが風邪で頭が悪くなつて居たか居無かつたかといふ問題は、歴史上の關係に於ては、兵站部の最下級の兵卒の風邪の場合と、何等の輕重も無いのである。

ナポレオンの風邪が、戦の前及び戦の間の彼の方略及び命令が、常例よりも弱いものであつた原因なのだといふ或る著述家等の議論は、全然無論據だ。

此に出して置いた彼の諸命令は、同なじやうな多くの方略——それに依つて、ナポレオンが過去に於て勝利を得たもの——に、決して寸毫も劣つて居無いどころでは無く、反つて優つたものであつたのだ。又、戦の間に彼が與へたと想像されて居る命令も、彼が前々の戦の裡で與へた命令に決して寸毫も劣つて居無いで、常例と全く同なじなものであつた。が、唯だポロディノオが、ナポレオンが勝た無かつた最初の戦であるが爲めのみに、これ等の諸命令が、劣つたものだ、想像されて居るのだ。何様な立派な、深遠な方略でも、それで以つて、戦が勝たれ無かつた時には、極く拙劣な方略のやうに見えて、何様な軍學者でも、道理らしい顔付で、それを非難することが能きる、又、之に反して、何様な愚劣な方略でも、それでやつた戦が偶然勝利を得た場合には、非常に巧妙な方略のやうに見えだして、眞面目な著述家が、その優れたものであることを證明する爲めに、幾巻もの書をその議論で埋めるのだ。

アウステルリッツでウアイエロオテルが立てた方略は、それ自身の範圍に於ては、模範的のものであつた。けれども、それが完全を極めた點に於て、即ち、細微な點まで餘りに精到であつた爲めに、非難されたのであつた。

ポロディノオでは、ナポレオンは、彼が前々の諸戦で爲したと同なじに、いや、それよりも優つて居る位に、最高の権力の代表者としての彼の務を盡したのであつた。彼は、戦の進行の邪魔になりさうなことは何にも



爲無かつた。彼は、最も氣の利いた助言を容れた、彼は、途を失は無かつた、矛盾した行爲はし無かつた、落着きを失は無かつた、又、戦場から逃げ去りもし無かつた、で、彼は、戦全體の最高の統御を行つて居るやうに見せる役目をば、彼の大手腕と、軍事上の經驗とで、平然として、且、威嚴を以つて、勤めたのであつた。

(二十九)

戦線の二度目の慎重な視察から歸つて来て、ナポレオンは云つた——  
「駒は盤上に列んだ、勝負は明日始まる」

彼は、パンチを云ひ付けた、そして、ボオセエを喚び寄せて、それと巴里のことを話し始め、自分が皇后の宮中に施さうと思つて居た種々な改革のことを相談して、宮中の事柄の極く微細なことまで記憶して居ることで、宮庭長官を驚かした。

ナポレオンは、些事に興味を持つて居ることを見せ、ボオセエの旅行の好きなことを冷やかに、何の心配も無さうに、氣輕に無駄話を爲た、その様子は、丁度、誰か、名高い、上手な、自信のある外科醫が、患者が手術臺へ結び付けられつゝある間、自分の袖をたくし上げ、胸當を掛けながら、冗談口を聞くことのある態と同じであつた。

「私は、何も彼も悉皆心得て居る、この事は私の頭の裡では、全然明瞭に、極まつて居るものなんだよ。私が、行り出せば、誰にも能き無いやうに旨くやる、が、今は、冗談口をきいて居て宜いんだ、で、私が落着いて冗談口をきけばきくだけ、君たちは、安心して、落着いて、私の天才に對する嘆稱の念を感すべきも

のなんだよ」

二杯目のパンチを飲み干してから、ナポレオンは、彼が次の日にはあると思つて居た重大な事件に遭遇する前に一息して置かうとした。

彼は、自分の前に横たはつて居る事件に心を占領されて、眠られ無かつた、で、風邪が、夜の濕氣さと共に悪くなつたにも構はず、三時に起き、甚く發癢をしながら、天幕の裡の重なる間へ出て行つた。彼は、露西亞軍が退却したか、何うか、尋いた。敵の烽火が尙且前と同じ場所にあるといふのであつた。彼は、會心らしく頷いた。

當番の侍從武官が天幕へ入つて来た。

「やア、ラップ、お前は、吾々が明日勝利を得ると思ふかね？」と、ナポレオンは彼に云つた。

「勿論でございます、陛下」と、ラップが答へた。

ナポレオンは、彼を眺めた。

「スモレエンスクで私に仰せられたことをお覚えでございますか？」と、ラップは云つた、「酒が抜かれた、飲まざるを得ぬ」

ナポレオンは顔を擧めた、手に頭を埋めて長いこと黙つて居た。

「この哀れな軍、スモレエンスクから此方餘程減つた。幸運の神は、浮氣な女郎だぞ、ラップ。私は、何時、もさう云つて居つた、そして、私は、今それを感じだした、けれども、親兵だ、ラップ、親兵は其儘で居るかね？」と、彼は、疑はしうに云つた。

「左様でございます、陛下」と、ラップは答へた。



ナポレオンは、錠剤を取つて、口へ入れ、そして、懐中時計を見た。彼は、眠く無かつた、で、朝まではまだなか／＼であつた、けれども、最早何も彼も命令され、今は既に實行されつゝあるのだから、時を過す爲めに命令を書くといふ譯には行か無かつた。

「乾菓と米を親兵の各聯隊に配分たか？」と、ナポレオンは、厳しく尋いた。

「左様致しましてございます、陛下」

「米もか？」

ラップは、彼が皇帝の命令を與へたことを答へた、が、ナポレオンは、自分の命令が實行されたか、何うかを、疑つて居るかのやうに、納得し無い風で、頭を振つた。僕がパンチを持つて入つて來た。ナポレオンはラップの分を今一杯云ひ付けた、そして、黙つて自分のを二口三口啜つた。「私は、味覺も、嗅覺も、無い」と、酒杯を嗅ぎながら、云つた。「この風邪には、弱つた。藥を飲めと切りに云はれる。けれども、風邪を醫せなければ、藥が何だ？。コルヴィサルが私にこの錠剤を呉れたんだが、何にもならん。奴等は、何が醫せるんだ？。何にも醫し得無い。吾々の身體は生きる爲めの器械なんだ。それは、その爲めに組み立てられて居る、それは、その天性なんだ、生命を邪魔をせずそのまゝにして置くが宜い、生命をして自から衛らせるが宜いんだ、治療法でそれを麻痺させたり、それを妨げるより、その方が宜い。吾々の身體は、或る極まつた時の間動くやうに爲てある完全な懐中時計なんだ、時計師はそれを開ける力は無い、唯だ、盲目的に、それを撫でるやうにして、それを扱ふことが能るのみなんだ。吾々の身體は生きる爲めの器械だ、たゞそれだけだ」

で、彼が甚く好きであつた定義を下す何時もの辭に落ちた爲めらしく、彼は、不意に新たな問題を持ちだした。

した。

「お前は知つて居るかね、ラップ、何から兵術が成り立つて居るのか？」と彼は尋いた。「それは、或る刹那に於て敵より強くなることの術なんだ。唯だそれだけだ」

ラップは何とも答へ無かつた。

「明日吾々はクツツツを相手にするんだ」と、ナポレオンは云つた。「何様なものかな。お前、覺えて居るかね、彼の男は、ブラウナウで統率官であつたが、三週間の内に一度だつても、自分の軍の防禦工事を視る爲めに、馬に乗つたことは無かつたんだ。何様なものかな」

彼は懐中時計を見た。未だ艱然四時であつた。彼は、眠く無かつた、パンチは飲み終られた、で、尙且何にも爲る事が無かつた。彼は、起ち上り、彼方此方歩き、厚い外套を着、帽子を冠つて、天幕の外へ出て行つた。夜は暗くつて、濕潤かつた、微弱な霏雨が殆ど音無く降つて居た。直ぐ傍の佛蘭西親兵の所では、燎火が薄朦乎と燃えて居たが、遠方の方では、露西亞の戦線に沿うて、燎火が、烟の裡で、明るく燃えあがつて居た。空氣は靜であつた、そして、幽な物の動く氣配と、足音が、陣地を占る爲めに動き始めた佛蘭西軍の諸隊から、瞭乎と聞えて居た。

ナポレオンは、天幕の前を彼方此方歩き、燎火を見、足音を聴き、毛皮帽の、背の高い親兵——彼の天幕の哨兵——の傍を通つた、と、その哨兵は、皇帝を見るといふと、黒い柱のやうに、直立した。後者は、それに面して、立ち止まつた。

「何年からお前は軍隊に居るんだ？」と、彼は、彼が兵士に話し掛ける、軍人らしい打ち切り棒と、心安さを裝つた何時もの態で、尋いた。兵卒はそれに答へた。



「あゝ、老功兵の一人だね。お前たちは悉皆聯隊で米を食つたか？」

「はい、陛下」

ナポレオンは、頷いて、歩み去つた。

五時半に、ナポレオンは、シヴァアルディノの村へと騎つた。明るくなりだした、空は晴れて、唯つた一つの暴風雲が東の地平線の上に横たはつて居た。捨てられた火は、朝の蒼白い明のなかで、自然に燃え盡きて了まつた。

唯つた一つ深い砲聲が、右方で鳴つて、空にさまよひ、沈靜の裡へ消えて了まつた。五六分過ぎた。第二、第三と、砲聲が聞えて、空気が震動に満ちた、第四、第五が、直ぐ右方で、崇巖に鳴り渡つた。

最初の諸砲聲が消え去らぬうちに、他のが、次第に續いて轟きだして、その音が相互に追ひ付いて、混り合つた。

ナポレオンは、隨員と共に、シヴァアルディノ堡壘へ騎り込んで、其所で、馬を下りた。勝負が始まつたのだ。

(三十)

ピエールは、公爵アンドレエーに逢つてから、ゴオルキイへ歸ると、彼の馬を用意して置いて、翌朝極く早く起きて呉れと、馬丁に云ひ付けた、そして、直ぐ、ボリイスが彼に工面して呉れた、突障の陰の隅で、グツスリ睡込んで了まつた。

ピエールが、翌朝すつかり目を覺した時には、小家の裡には、誰も居無かつた。小さい窓の硝子がビリビ

り鳴つて居た。馱者が彼の傍に居て、彼を揺り起して居た。

「閣下、閣下、閣下……」と、馬丁は、一生懸命に云ひ續けて、ピエールを起すことは到底も駄目だと諦めたらしい態度で、彼を見もせずに、唯だ、肩へ手を掛けて、揺すぶつて居た。

「やア、始まつたのか？。最早其様な時か？」

「砲聲をお聞きなさい、閣下」と、老兵であつた馬丁は、云つた。「旦那方は最早何方も行つておしまひです、殿下も最早夙くにお出かけです」

ピエールは急いで衣服を着て、そして、門口へ駆け出た。晴やかな、新鮮な、露の多い、心持の好い朝であつた。太陽は、今丁度、それを隠して居た雲を破つた所であつた、そして、光線は、裂けた雲に篩されて、街の向ふ側の屋根を超えて、路の露に沾つた塵埃へと、家々の垣根や、窓へと、それから、小舎の傍に立つて居たピエールへと、さしたのであつた。砲の轟音は、戸外では、一層亮乎と聞えた。副官が哥薩克騎を一入後に從へて、街を駆け通つた。

「始まつたです、伯爵、始まつたです」と、副官は叫んだ。ピエールは、馬を持つて隨いて來いと云ひ付けて、彼が前日戰場を見渡した小高所へと、街を通つて、歩いた。この高所には將校等の群集が居た、ピエールは、總司令部の人々の佛蘭西語の饒舌を聞いた、そして、肩の間へ沈み込んだクツウゾフの頭と、赤い紐飾の附いた彼の帽子を見た。クツウゾフは、望遠鏡で、彼の前の街道を見渡して居た。

高所へ登つて行く段々を登つて、ピエールは、自分の前面を見た、と、彼は、光景の美しさに、歡喜の戦慄を感じた。

それは、彼が前日その高所から見たのと同じ景色であつた。が、今はパノラマ全體が、軍隊と、砲烟で



満たされて居た、そして、澄み渡つた朝の空気の裡で、ピエールの左方の後にあつた太陽の斜の光線は、そのパノラマの上に、黄金と桃色の色度に満ち、そして、所々長い、黒い、影で破れた、パツと明るい光を注いで居た。

景色を劃つて居る遠方の森は、地平線の上に半月形をなして横たはつて、何か、黄色——緑の寶石から刻み上げたやうに見える、そしてその中央、ヴァルエフの後に、スモレエンスタへの大道が走つて居て、それが隙間も無く、軍隊で被はれて居た。

前景には、太陽に輝いた黄金の野や、小森が横たはつて居た。右も、左も、前面も、何處も彼處も、兵卒であつた。光景全體が、壯快で、印象深く、豫想外であつた、が、何よりも一番ピエールを驚かしたのは、戦場それ自身、即ち、ポロディノオ及び、カロオチャ川の兩側の低地の光景であつた。

カロオチャ川の周圍、ポロディノオ及びその兩側に於て、殊に、左方の——ヴォイナ川がカロオチャ川へ沼

澤勝の地を通して流れ込んで居るところには、霧が未だ、その邊全體に掛つて居て、それが解けたり、分れたり、輝いた日光の裡で燦々したりして、その間から見える種々な物の形姿に、仙界のもの、やうな美しさを與へて居た。砲煙がこの霧と混り合つた、そして、何處でも彼處でも、太陽の光が、水から、露から、川の兩岸や、ポロディノオに群が居る兵卒等の銃劍から、照り返されて、燦めいて居た。

この霧の間から、白い教會堂や、其所所にポロディノオの田舎家の屋蓋が見えた。そして、時々、兵卒のヒシと集まつた隊圍や、緑色の彈藥函や、砲が、チラ／＼見えた。そして、霧と煙が廣い平野を漂つて行くに従つて、全光景が、動いて行き、又は、動いて行くやうに見えたのであつた。

霧の裡のポロディノオの周圍のこの低地のなかでも、その上でも、それから、殊に、左方の全線に沿うて、

森の裡でも、下の牧場でも、諸所の高地の頂上でも、煙の雲が、間斷無しに、何にも無い裡から、或は一つ、或は一週に幾つもの、或は、長い間隔を置き、やがて又、迅速連続で、飛び上つて居た。斯ういふ煙の雲は、パツ／＼と出、捲き返り、相互に溶け合ひ、それから、別れて、廣い平原ちうへ漂つて行くのであつた。これ等のパツ／＼と出る煙や、それに續いて聞える音が、不思議なことに、全光景に主な心持好さを與へるものであつた。

「パツ」なかに紫と、灰色と、乳汁色の陰のある、圓い、塊つた煙の球が、不意に、飛び上つた、そして、「ブーン」と、一分後に、砲の轟が續いた。

「パツ、パツ」と、煙の二つの雲が、上つて、一つに合つて、混つた、そして、「ブーン、ブーン」と、音が、眼が見た所の物を繰り返した。

ピエールは、彼が一秒前には、圓い、塊つた球として見た最初にパツと出た煙の方を見返つた、と、最早その場所では、煙の幾つもの環が一方へ漂ひ去つて居るところであつた、それから、パツ……（其後間を置いて）パツ、パツ——今三つ飛び上つた、そして、一度に今四つ出た、で、相互の後に同なじ間を置いて、ブーン……ブーン、ブーンと、調子の好い、確乎した、強い音が、轟いた。或る時は、それ等の煙の雲が平野を疾走して行くやうに見える、やがて又、それは止まつて居て、森や、野や、ギラ／＼する銃劍の方が、その傍を飛んで行くやうにも見えたのであつた。

左の方から、さういふ煙の幾つもの大きい雲が、間斷無しに、その各の後に、壯大な音を轟かして、野や、木立の上を飛んで居た。尙一層近くの、低い牧場や、森の裡では、銃火からの小さい煙がパツ、パツと突ひ出して居たが、それは、煙の球にはなら無かつた、そして、その煙の各も、又、その後で反響する小



さい音を持つて居た。ツラ……タ……タ……と、銃の爆る音が、頻繁な間で、響いた。が、それは、音律を整へたやうな砲の轟に比べると、まばらで、不規則であつた。

ビエールは、彼方の煙や、ギラ／＼する銃剣や、動きや、音の真中に居度くなつた。彼は、自分の印象を他の人々と比べて見やうと思つて、クツウヅフとその幕僚を見返つた。誰も彼も、ビエールと同じに、前の野を見て居たが、それは、彼と同じ感情を以てだと、彼は想像した。何の顔も、今は、ビエールが、前日認めた、公爵アンドレーエーとの談話の後で理解した感情のその「潜熱」で、輝かされて居た。

「行け、我友よ、行け、成功を祈りますぞ」と、クツウヅフは、自分の傍に立つて居た將官に、一度も戰場から眼を離さずに居ながら、云つた。

この命令を受けた將官は、ビエールの傍を通つて、高所から駈け下りた。

「騎り通るんだ……」と、將官は、幕僚の一人からの問に答へて、冷然と、厳しく云つた。

「俺も、俺もさうしやう」と、ビエールは思つた。で、同じ方へ行つた。

將官は、哥薩克騎が彼へと引いて來た馬に騎つた。ビエールは、自分の馬を持つて居た馬丁の傍へと行つた。彼は、孰の馬が溫和しいかと尋いて、それに騎つて、馬の鬣を掴み、馬の腹へ自分の踵を押し付け、そして、眼鏡が滑り落ちさうに思ひ、鬣と手綱を放すことは到底も能き無いと思ひながら、高所から彼を見詰めて居た參謀たちの微笑に送られて、將官の後を馬を飛ばした。

(三十一)

ビエールがその後を追つて駈けた將官は、早足で坂を下りた、そして、キユツと左方へ曲つた。で、ビエールは、それを見失つて、自分の前を行進して居る歩兵の大隊の真中へ駈け込んだ。彼は、その裡から脱け出やうと爲て、左方へ向いたり、右方へ向いたりした。が、何處も彼處も、兵卒ばかりで、それが皆な、何か見え無い、然し、明白に重大な事柄で、心を領された同様な心配さうな顔で居るのであつた。彼等は皆な、何の譯だか知れず、彼の馬の蹄の下に自分等を蹂躙つて居る白い帽子のその大兵な男を、迷惑さうな不審の表情で見て居た。

「何の爲めに、彼奴は、大隊の真中へ騎り込まうとするんだい？」と、一人の兵卒が、ビエールに向つて、怒號つた。今一人は、銃の臺尻で、彼の馬を突き飛ばした。で、ビエールは、鞍の前穹へ身體を伏せ、艱つとのことで跳び退さる馬を押へ付けて、兵卒たちの前面にあつた開いた場所へと駈け出た。

ビエールは行方に橋を見た、橋の上には、兵卒等が射撃しながら立つて居た。ビエールは、その方へと騎つた。彼は、さうとは知らずに、ゴオルキイとボロディノの間で、カロオチャ川を渡る橋へと騎つたのであつた、この橋が、最初の戦鬪で佛蘭西軍から攻撃を受けたのであつた。

ビエールは、自分の前面に橋があつて、兵卒等が、橋の兩側や、又牧場では、彼が前日見た新しく刈つた草の積層の裡で、煙の裡で何か爲て居るのを見た。が、其所に行なはれて居た間斷無き銃火に拘らず、ビエールは、其所が戦の中心であらうとは更に思ひ掛けが無かつた。彼は、八方で唸つて居る銃丸や、自分の頭上を飛んで居た破裂弾には、氣が付か無かつた。彼は、川の彼方側に敵を見無かつた、そして、彼の直ぐ傍で倒れた者が多かつたのに、彼は、死者や負傷者を餘程経つてから後で無ければ、見無かつた。彼は尙且顔に微笑を含んで四邊を眺めて居た。



「彼奴は戦線の前面で何を爲てるんだい？」と、誰かが再びビエールに向つて、叫んだ。

「左方へ」「右方へ」と、兵卒等が、彼に向つて叫んだ。ビエールは右方へ行つた、そして、期せずして、將軍ラエーフスキイの副官——自分の知人——の傍へ乗り寄つた。副官は憤然としてビエールを見た、そして、彼も又ビエールを怒號りつけやうとするらしかつた、が、ビエールをそれと認めためたので、彼は、頷いた。

「何うして此様な所へ来たんです？」と、彼は云つて、駆け去つた。

ビエールは、自分の居るべき場所無く、又、何の役にも立たぬ身だと思ひ、且、再誰かの邪魔になつてはならぬと思つて、副官を追つ駆けた。

「何です、此所は？。一緒に行つて宜いんですか？」と、彼は尋いた。

「今直ぐ、今直ぐ」と、副官は答へた、そして、牧場に居る肥つた聯隊長へと乗り附けて、何か命令を傳へて置いて、それから、ビエールに話し掛けた。

「何うして此様な所へ来るやうになつたんです、伯爵？」と、彼は微笑みながらビエールに云つた。「貴下は尙且好奇心が強いんですか？」

「左様です、左様です」と、ビエールは云つた。

が、副官は、馬の頭を立て直して、もつと前方へと乗つて行つた。

「此所は大丈夫なんです」と、副官は云つた。「けれども、左翼、バグラアチオンの分隊では、非常な激戦です」

「實際ですか？」と、ビエールは云つた。「何處です、それは？」

「いや、私と一緒に彼の高地までおいでなさい、彼所なれば見えます。けれども、吾々の砲兵陣地では未

ださう甚いことはありません」と、副官は云つた。「行きますか？」

「え、え、行きます」と、ビエールは云つて、四邊を見廻して、自分の馬丁を見付けやうと爲た。やつとその時になつて始めて、ビエールは、負傷者等を見た、或る者等は、踰越しながら歩いて居り、他の者どもは擔架で運ばれて居た。彼が前日通り通つた好い香のする干草のある牧場の裡には、干草の塚を横切つて、帽子の無い頭を、無態に後反した一人の兵卒が横たはつて居た。

「何故彼を伴れて行かんですか？」と、ビエールは云はうとした、が、同なじ方向を見て居る副官の影り上げたやうな動か無い顔を見て、黙まつて了まつた。

ビエールは、自分の馬丁を見付け得無かつた、で、副官は一緒にラエーフスキイの砲壘の方へと、低地を乗り進んだ。彼の馬は副官のより後れた、そして、不規則な間を置いて、彼を鞍の上で、ヒヨコリくとさせた。

「貴下は乗馬には馴れておいで無いでせう、伯爵、さうらしいね？」と、副官が尋いた。

「いや、それは大丈夫です、けれども、變にビョイ〜跳ぶやうなんです」と、ビエールは、不審さうな顔容で、云つた。

「え、……いや、負傷して居ますぜ」と、副官は云つて、「右の前脚、膝の上の所で。銃丸、それに違ひありません。お目出度う、伯爵」と、彼は云つて、「最早火の洗禮をお受けなすつたんですぜ」

二人は、烟の裡を前進して来て、耳を聳する砲撃を續けて居た砲兵の後を、第六軍團の中を通つて、小さい森へ乗り込んだ。其所は、涼しくつて、靜で、秋の物の香に満ちて居た。ビエールと副官は、馬を下りて徒歩で丘を登つた。



「將軍はおいでかかね？」と、副官は砲壘に達すると、尋いた。

「唯今までおいでよしたたが、彼方へ行かれました」と、誰かが答へて、右方を指さした。

副官は、ビエールを何うしたものと、思ひ惑つたらしい態で、彼を見返つた。

「僕のご心配無く」と、ビエールは云つた。「僕は、高地へ登ります、宜いでせうか？」

「え、さうなさい。彼所からなら何も彼も見えます、それに、さう危険ではありません、私は直き又伴れに來てあげますから」

ビエールは砲兵陣地へと行つた、副官は乗り去つた。二人は、それ限り會は無かつた、唯だ餘程後になつてから、ビエールは、その副官が、その日、隻腕を無くしたといふことを聞いたのであつた。

高地——後になつて、露西亞軍の間では、砲壘丘、若くは、ラエーフスキイ砲壘として知られ、佛蘭西軍の間では、「大砲壘」、「不運なる砲壘」、又は「中央砲壘」などとして知られたもの——は、その上では、何萬といふ兵が殺され、又佛蘭西軍は、それを陣地の要鍵と見て居た、名高い地點であつた。

その砲壘は、高地と、その三方に掘られた塹壕とで成り立つて居た。掩堡の中には、十門の砲が立つて居て、掩堡の間に残されて居た間隙から射撃して居た。

砲壘に列んだ兩側に、砲が立つて居て、それも又間斷無き砲撃を續けて居た。砲列の少し後に歩兵の隊が居た。

この高地に登つた時には、ビエールは、小さい塹壕に圍まれ、僅の砲で守られて居たこの場所が、戦場での一番重要な地點であらうとは、更に思ひ掛けが無かつた。

彼は、全く（唯だ彼が其所に居ることになつたのから見て）それは、少しも重要な地點では無いのだと想

像して居た。

ビエールは、砲壘を圍んで居る掩堡の端に坐つて、我知らずの會心の笑顔で、四邊に行はれて居る事件を眺めて居た。時々ビエールは立ち上つて、そして、顔に同なじ微笑を含んで、砲に装弾したり、撃つたり、又は、始終霰や弾薬を持つて彼の傍を駈けて通つたりする兵卒等の邪魔になら無いやうに爲ながら、砲壘の中を歩いた。砲は、絶えず、相續いて、耳を聳する轟で發火して、烟の雲で四邊の地方を悉皆包んで居た。砲壘を掩護して居る歩兵等の苦しさうな恐怖の顔容とは打つて變つて、人の僅な數がそれ／＼の爲事に忙しく掛つて居て、掩堡の他の部とは、全然切り離されて居る砲壘の裡では、熱心な昂奮の一般的の感情と、誰も共に持つて居る家族的感情のやうなものがあつたのだ。

ビエールの軍人らしく無い姿や、彼の白い帽子の、様子が、始のうちは、この小さい集團にビエールに取つて不利益な印象を與へた。兵卒等は、彼の傍を駈けて行きながら、驚愕や、まだそれどころでは無く、不安の、横眼を、彼に注ぐのであつた。主任の砲兵將校の、背の高い脚の長い、痘痕のある男は、掩堡の端の砲の働を查べやうとするかのやうな風で、ビエールに近寄り、不審さうに彼を見詰めた。

未だホンの少年の、士官學校からホンの此頃出たばかりらしい、そして、自分の指揮して居る二門の砲を監視するのが非常に綿密であつた、童子のやうな、圓顔の、小さい將校は、ビエールに厳しく聲を掛けた。

「何卒、傍へお寄りください、貴下」と、彼は云つて、「此所においでなすつては不好ません」

兵卒等は、ビエールを見ては、面白からぬ態で、頭を振つた。が、白い帽子の男は、何の悪い事も爲すに、唯だ溫和しく掩堡の斜面に坐つて居るが、恥かしさうな、丁寧な笑顔で道を讓つて兵卒を通らせて、廣小路を散歩でも爲て居るかのやうに平然として、砲火の下の砲壘の裡を歩くのであるのだといふ確信が段々増し



て来るに従つて、兵卒等の疑を含んだ敵意の感情が、彼等が何時でも、聯隊と運命を共にする犬や、雄鶏や、山羊や、その他の動物に對して持つ感情に極く近い、面白半分な、親切な親しさに、勝たれ始めた。兵卒等は、彼等自身の心の裡で、ピエールをば、彼等の小さい集團の裡の一人として、受け容れ、彼等自身の一人と彼を爲し、彼に名を付けた、「吾々の旦那」と、彼等は彼を呼び、そして、彼等自身の間で、彼のことを、機嫌よく面白さうに、笑つたのであつた。

砲彈がピエールから二歩程の所で地を跳ね飛ばした。衣服から地を拂ひ落しながら、ピエールは、笑顔で四邊を見廻した。

「何うして、怖く無えだね、旦那、實際に？」と、幅の廣い、赤ら顔の兵卒が、莞爾として、強い、白い齒を見せて、云つた。

「いや、では、お前は怖く無いかね？」と、ピエールは尋いた。

「いや、そりやア勿論怖いさ」と、兵卒は答へた。「いや、彼女は、人に向つて情も容赦もありやアし無えだ。彼女は、人を粉微塵にしちまうだ、貴下の腸をおつ飛ばしちまうだよ。誰だつて怖がらずに居られるもんかね」と、彼は笑ひながら云つた。

五六人の兵卒が、面白がつた、親切な顔で、ピエールの近くで、立ち止まつて居た。彼等は彼が他の者と同なじやうに話しを爲やうとは、思ひ掛が無かつたやうに見えた、で、彼の行爲が非常に彼等を面白がらせた。

「それは、私たちの爲事なんだ——私たちは兵卒だからね。だが、旦那家では——それは、驚くべきことなんだ。旦那家では不思議なんだ」

「任務の場所へ」と、小さい將校の少年は、ピエールの周圍に集まつて居た兵卒等に、叫んだ。此の若者が將校の任務に就たのは、これが最初か、精々二度目であつたらしい、で、彼は、兵卒等に向つても、自分の長官に向つても、能きるだけ固苦しく、儀式張つて、舉動ふのであつた。

砲の轟と、銃の音が、戰場全體で、殊に、バグラアチオンの土壘のある左方の方で、だん／＼高くなりつゝあつた、が、ピエールが居た所からは、烟の爲めに、殆ど何も見え無かつた。

その上に、全世界から掛け離れて砲壘の裡に閉ぢ込められて居る人々の小さい兄弟のやうな集團を見守ることが、ピエールの全注意を占領して居た。戰場の光景や、音に對する最初の我知らずの喜悅が、彼が草野に横たはつて居た唯一人の死んだ兵卒を見てから以來といふもの、今一つの感情に負けて了まつた。今掩壘の斜面に坐つて、彼は自分の周圍を動いて居る人々の姿を見守つて居た。

十時までには、二十人位の人々が、砲壘から擔ひ去られた、砲が二門破壊された、そして、だん／＼度々破裂彈が砲壘へ落ちて來だした、砲彈が、遠方から、ヒユウ／＼、ブン／＼と、飛んで來た。が、砲壘の裡の人々は、それには一向氣が付かぬやうに見えた、賑かな饒舌と冗談が、八方で聞えた。

「此方ちやア無えや、別嬪」と、一人の兵卒が、自分等の方へと唸りながらやつて來た榴彈に向つて、怒號つた。

「歩兵の方へも行つてやれ」と、今一人が、榴彈が、飛び越して、歩兵の隊列の裡へ落ちた時に、クスクス笑ひながら、云ひ足した。

「何だ、友人でも來たのか、おい？」と、今一人の兵卒が、飛んで來た砲彈を見ると頭を低くした農夫に、擲擲つた。



五六人の兵卒等が、掩堡に集まつて、先頭で何か爲されて居るのを見て居た。  
 「奴等は前哨陣地を取つたぜ、見ろ、退却してる」と、彼等は云つて、掩堡の上から指さした。  
 「自分等の任務に氣を付ろ」と、年老つた軍曹が彼等に怒號つた。「奴等が歸つたとしても、そりやア後に退つて爲ることが何か有るからなんだぞ」

で、軍曹は、兵卒等の一人の肩を掴まへて、膝で突き飛した。哄と笑ふ聲が爲た。  
 「第五號砲、前へ」と、彼等が一方で叫んで居た。

「さア、ううんと引け、皆な一緒に」と、砲に装藥して居る人々の快活な聲々が叫んだ。

「やア、彼女は既でのごとくに、吾々の旦那」の帽子を持つてくるところだつたぞ」と、赤ら顔の、道化た兵卒が笑つて、齒を見せた。「やい、無態な醜婦奴」と、彼は、砲車の輪と、兵卒の脚を打つた砲弾に向つて、叱るやうに、云ひ足した。

「やい、其處の狐ども」と、今一人が笑ひながら、砲の間を負傷者の收容にと、這ふやうにして入つたり出たりして居た農夫の民兵等に、聲を掛けた。「何うだ、俺たちの粥を食つて見無えかい、おい？。やア、烏ども、氷つて固まつちやつたか、やい」と、兵卒等は、脚を撃ち切られて了まつた兵卒を見て躊躇つて居る民兵等に怒號つた。「うう……うう……若者」と、彼等は、農夫等の口眞似を爲て、叫んで、「俺たちは何うしても厭だ、何うしても」

ピエールは、兵卒等の眞中に砲弾が落ちる毎に、兵卒が失はるゝ毎に、一般の得意の状態は、だん／＼著しくなるのであつたのに、氣が付いた。

暴風雲が彼等の上に近く襲ひ掛かつて來れば來る程、これ等の人々の顔の面に電光のやうに輝つて來た

熱——恰も、彼等の危険に出會ひ、且、それに抵抗する爲めに呼び出されたやうな——のきらめきは、尙一層光り輝いて、頻繁に出て來るのであつた。

ピエールは、前面の戦場の方を見無かつた、彼は、其所で行はれて居た事柄には最早何の興味も持た無くなつた。彼は、その燃え立つ火——彼も自分の心の裡にも燃えて居るのを感じた——を靜觀すること、全然心を占領されたのであつた。

十時には、砲壘より先頭に居た、木立や、カアメンカ川の附近に居た歩兵が退却した。砲壘からは、銃で負傷者等を擔つて、傍を駆け通つて行く彼等を見ることが能きた。

幕僚を伴つた將官が、砲壘へやつて來た、そして、聯隊長に談話を爲、ピエールを腹立たしさうに見てから、敵の砲火にもつと身を露らさ無いやうにする爲めに、伏して居ると、砲壘の後に立つてそれを掩護して居る歩兵に命令して置いて、再去つて了まつた。その後で、太鼓が、砲壘からもつと右方の歩兵の隊列の間で聞えた、それから、叫聲が號令を與へた、そして、砲壘からは、歩兵の隊が前方へ動いて行くのが見えた。ピエールは掩堡の上から見た。一人の姿が殊に彼の眼を捉へた。それは、蒼い、小兒のやうな顔で、後方へ歩いて來る將校であつた。彼は、劍を下へ向けて持つて、四邊を不安さうに見返り／＼して居た。

歩兵の列は烟の裡へ見え無くなつた、が、彼等からの引張つた叫聲と、急な銃火を聞くことが能きた。五分経つと、負傷者の群と、一隊の擔架とが、その方向から歸つて來た。

破裂彈がだん／＼頻繁に砲壘の内へ落ちだした。五六人が地の上に横たはつたが、收容され無い。兵卒等は、砲の周圍でます／＼忙はしく、ます／＼敏活に、働きたした。最早誰もピエールなどを顧みるものは無くなつた。二度、彼は、邪魔だといつて、烈しく怒號り付けられた。主任の將校は、顔を擧めて、一つの砲



から他へと、速く大股で歩いた。少年の將校は彼の頬が一層眞赤になつて、兵卒等に、ますます綿密に、命令を與へた。兵卒等は、彈藥を持つて來、廻り、裝彈し、そして、非常な敏活で、自分等の任務を盡した。彼等は、發條装置で動かされるやうに、動いた。

暴風雲は、濃く襲つて來た、そして、ビエールが氣を付けて居た例の心火は、誰の顔にも一層カッカと燃えだした。ビエールは、主任將校の傍に立つて居た。小さい少年將校が、手を帽子へ舉げて、上官に敬禮しながら、駈け寄つた。

「ご報告致しますが、聯隊長、唯つた八發しか残つて居りません、砲撃を続けませうか？」と、彼は尋いた。

「葡萄彈」と、主任將校は叫んで、掩堡越しに、彼方を見た。

忽ち變な事が起つた。少年將校は、唸いた、そして、翼を撃たれた鳥のやうに、クルクルと廻つて地板に坐つた。總てが、ビエールの眼の前では、不思議に、悄然と、薄暗くなつたやうに思はれた。

砲彈がドン／＼續いて唸つて來て、掩堡を撃ち、兵卒等を撃ち、砲を撃つた。それ迄はさういふ音が殆ど一向耳へ入ら無かつたビエールに、今は、それより他は何も聞え無くなつた。砲臺の右側では、兵卒等が、

「萬歳」の喚呼を以つて、駈けて居た、が、それは、前方へでは無く、後方へのやうに、ビエールには見えた。

一個の砲彈が、掩堡——その前にビエールが坐つて居た——の全くの縁を撃つた、そして、地を飛ばした、暗い、圓い塊つた物が、ビエールの眼の直ぐ前で閃めいた、と同時に、何物かヘツシリと飛んだ。砲臺へ來掛かつて居た民兵等は、駈け歸つた。

「悉皆葡萄彈で」と、將校が怒號つた。

軍曹が、將校へ駈け寄つた、そして、怖れた囁語で、(丁度給仕長が、馳走の時に、命ぜられた種類の酒が最早無いことを、亭主に告げることがあるやうに)最早砲彈が少しも無いことを云つた。

「惡黨ども、何を爲てやがるんだ？」と、將校は、怒號つて、ビエールに振り向いた。主任將校の顔は赤くつて、汗が流れて居、彼の鋭い眼はキラ／＼して居た。「豫備隊へ行つて、彈藥函を持つて來い」と、彼は、

ビエールの眼を避けて、兵卒に向つて、憤然となつて、怒號つた。

「私は去きます」と、ビエールは云つた。將校は、何とも返答せず、大股で他の側へ去つた。

「撃方止め……待て」と、彼は、叫んだ。

彈藥を取りに行くと命ぜられた兵卒は、駈け出さうとして、ビエールに突き當つた。

「あ、旦那、此様な所に居るんぢやありません」と、彼は、駈け去らうとしながら、云つた。

ビエールは、少年將校が坐つて居る場所を避けて、兵卒の後に隨いて、駈け出した。

ビエールが駈け降りて居るうちに、一個の砲彈、それから第二、それから第三と、彼の頭上を飛んで前と、兩側と、後の地上へ落ちた。「何處へ行くのかな？」と、彼は不意に思ひ惑つた、丁度その時には、緑色の彈藥函へと走り掛つて居た。彼は、後へ戻らうか、前方へ行かうか、決し兼ねて、立ち止まつた。不意に、恐しい激動が、彼を地板へ後さまに刎ね飛ばした。同時に、閃の閃が彼の眼を眩めかした、轟と、シユウ／＼いふ音と、物の碎ける音とが、彼の耳の裡へビリ／＼と徹へた。

我に返ると、ビエールは、地板へ手を突いて坐つて居る自分を見出した。彼の傍に在つた彈藥函は何處かへ行つて了まつて居た。其所には、二個三個の焦けた緑色の板切と、襪襦が、焦けた草の上に、散らばつて居た。一匹の馬が、轅の折れた斷片をガラ／＼と引摺りながら、駈け去つて居ると、今一匹の馬は、ビエー



ルと同なじに地板に臥て、耳を劈くやうな、引張つた叫聲を出して居た。

(三十二)

ビエールは、恐怖で狂氣のやうになつて、跳び起きて、自分を圍んで居る恐ろしい事からの唯だ一つの避難所として、砲壘へと駆け戻つた。

砲壘へ駆け寄つた途端に、ビエールは、砲壘からは、射撃の音が少しも無く、人々が其所で何か爲て居るのに、気が付いた。彼は、それが何ういふ人々であつたか、識別の間隙が無かつた。彼は、主任將校が、彼の方へ背部を向けて、下の何物かを擬乎と見詰めて居るかのやうに、土壁の上に臥て居るのを、見付けた、それから、ビエールは、一人の兵卒が、自分を捉まへて居る人々から身體を振りもぎらうとしながら、「仲間」と叫んで居るのを認めた、又、ビエールは、その外に變なことを見た。

が、彼が、聯隊長は殺されて居たのであるし、「仲間」と叫んで居た兵卒は捕虜になつて居たのだといふことを、覺る間隙の無いうちに、今一人の兵卒が、彼の眼の前で、背後から銃槍で刺し貫かれた。ビエールが、砲壘へ駆け寄つた途端に、青い制服を着た、黄色い、汗の流れた顔の、瘠せた男が、何か怒號りながら、手に劍を持つて、ビエールへと駆け寄つた。ビエールは、本能的に防ぎながら、相互にぶつかり合つた時に、兩手を伸ばして、その男（それは佛蘭西軍の將校であつた）の肩と喉を掴んだ。將校は、劍を落して、ビエールの襟頭を掴んだ。

二三秒間、雙方相互の見たことの無い顔を、恐れた眼で見詰め合つた、そして、雙方とも、自分等が何ういふことを爲て居るのか、何ういふことを爲すべきのか、分らずに、思ひ惑つて居た。「俺が捕虜なつたのか、

それとも、俺の方がこの男を捕虜に爲たのだらうか？」と、二人とも、思ひ惑つて居た。が、確に、佛蘭西軍の將校の方が、自分が捕虜になつたのだと、信する方へもつと傾いて居るらしかつた、何故だといふと、ビエールの力の強い手が本能的の恐怖に動かされて、將校の喉をだん／＼強く締め付けて居たからであつた。佛蘭西人は何か云はうと爲た、が、その途端に、不意に、砲彈が二人の直ぐ頭の上を恐ろしい唸を爲して飛んだ、と、佛蘭西人の首が、それに持つて行かれて了まつたやうにビエールには見えた、それ程急に彼は頭を下けたのであつた。

ビエールも、又、頭を下けて、手を離した。孰が捕虜になつたのかといふ問題などは最早その上少しも思はずに、佛蘭西人は砲壘へ駆け歸り、ビエールの方は、死者、負傷者——それは彼の足を掴むやうな気がしたのだが——に躓きながら、坂下へと、飛んで行つた。

が、彼が麓に達し無いうちに、彼方から来る露西亞の兵卒の群集に行き逢つた、その兵卒等は、相互に躓き合ひ、跳ね倒し合ひながら、砲壘の方へと、非常な賑やかな様子で、駆け寄つて居た。（これが、エルモオロフが、この働を爲し得させたのは、自分の勇敢と好運とのみだと云つて、自分の勳功だと唱へた攻撃であつた、それは、彼が、彼の衣囊の裡にあつた聖ゲオルギイ勳章を砲壘ちうへ撒き散らしたと想像されて居る攻撃であつた）。

砲壘を奪つて居た佛蘭西人は逃げた。吾軍の兵卒等は、それを止めるのが艱然のことであつた程までの砲壘を越えた遠くの方まで、佛蘭西人を追撃した。

彼等は砲壘から捕虜等を伴れて下りて居たが、その中に、將校等に圍まれて、負傷した佛蘭西の將官が居た。



佛蘭西人並に露西亞人の多勢の負傷者等——その中には、ピエールには前に見た者だと識別された人たちが居た——は、或は歩き、或は這ひ、或は砲壘から擔架で運ばれて居たが、彼等の顔は、苦痛で歪んで居た。ピエールは、彼がそれまでに其所で一時間餘を送つた砲壘の内へ行つたが、自分等の一人として彼を受け取つたその兄弟のやうな小さい一隊の中で、残つて居る者は一人も無かつた。其所には、彼が前には見無かつた多くの死人が在つた。が、五六人は、前に見たものだと、ピエールに分つた。少年將校は、土壁の縁で、血の溜の裡に、身體を縮こめたやうになつて、尙且坐つて居た。赤ら顔の、快活な兵卒は、尙且、身體をピクリピクリやつて、腕いて居た、が、人々は、彼を運び去ら無かつた。

「やア、今こそ、奴等は止めるだらう、今こそ、奴等は、自分等の爲たことに慄へあがつて了まふだらう」と、ピエールは思つて、戰場から動き去つて居た擔架の群の後へ、何といふ目的も無しに、隨いて行つた。が、太陽は未だ烟の幕の後に高く懸つて居た、そして、前面では、左方の方では尙一層、それから、セミオオノフスコエ附近では、尙且烟の裡で、混闘が湧き立つて居た、そして、砲の轟や、銃火の音は、なかなか衰へるところでは無く、最後の必死の努力として、耳を震するやうな一つの絶叫に全力を籠める人のやうに、尙一層高く、尙一層絶望的に烈しくなつて居た。

(三十三)

ポロディノオの戦の主な戦闘は、ポロディノオとバグラアチオンの掩堡との間の、廣さ七千英尺の場所で行なはれたのであつた。

その土地の外では、一方では、戦の最中に、ウヴァーロフの騎兵の方で戦闘があり、他方では、ウティイツァの後方で、ポニアトオフスキイとツウチコフとの間の小衝突があつた、が、その二つの戦闘は、本戦とは全く離れたものであつて、戦場の中央で起つたものに比べれば、何等の重みも無いものであつた。その戦の主な戦闘は、ポロディノオと森の傍の掩堡との間の、兩軍から見え得る、打開けた場所、最も單純な、最も無技巧な風で戦はれたのであつた。

戦は、兩軍に於ての數百門の砲からの砲撃で始まつた。

それから、平野全體が烟で被はれて了まふといふと、佛蘭西軍の方では、ドセエスとコムバンの二分團が、右方から、掩堡へと進撃し、そして、左方からは、總督の諸聯隊が、ポロディノオへ進撃した。

掩堡は、ナポレオンが立つて居たシヅヴァルディノ堡壘から、一露里あつた、が、ポロディノオは、直線で、二露里以上離れて居た、だから、ナポレオンは、其所で何があつて居るのを見ることが能き無かつた、殊に、霧に混つた烟が、平野のその部分全體を隠して居たに於てをや。

掩堡へと進撃して居たドセエス分團の兵卒等は、彼等が、彼等と掩堡との間に横たはつて居た低地の裡へ見え無くなるまでは、見えて居た。彼等が低地へ落ちて了まふや否や、掩堡での砲と銃の烟が、低地のその側の傾阪全體を隠して了まつたほど濃くなつた。

烟の間隙から、黒い何物か——多分人であらう——の形がチラ／＼見え、それから、時々、銃劍のきらめきが、認め得られた。が、それ等が止まつて居るのか、動いて居るのか、それ等が露西亞人であるのか、佛蘭西人であるのか、シヅヴァルディノからは見る事が能き無かつた。

太陽が煌々と昇つた、そして、その斜の光線が、手を翳して掩堡の方を見て居るナポレオンの顔へ眞向



にさした。

烟が掩堡を被つて懸つて居た、そして、或る時は、動いて居るのは烟であるかのやうに見え又或る時は、軍隊が烟の裡を動いて居るやうにも見えた。時々叫喚が、射撃の間から聞えた、が、其所で、何ういふ事が爲されつゝあるのか、更に分ら無かつた。

ナポレオンは、堡壘の上に立つて、望遠鏡で眺めて居た、そして、硝子の小さい圈の裡に、烟と人間——時には、自分の方の兵、時には、露西亞人——を見た。が、彼が見たところのものが、何處にあつたのか、彼が今一度肉眼で見ると、少しも分ら無かつた。

彼は、堡壘から降りた、そして、その前を彼方此方と歩いた。

時々、彼は、立ち止まつて、銃砲の音に聞き入り、それから、戦場の方を凝乎と見て居た。

下の、彼が立つて居たところからも、上の、彼の將官の五六人が立つて居た砲壘からも、掩堡の状態が何ういふ風であるのか、見定めることは全く不可能であつた、が、掩堡それ自身——今、生きて居るのや、死んだのや、負傷したのや、佛蘭西人と露西亞人とに、同時に占領されて居るかと思れば、又忽ち、佛蘭西人と露西亞人とに交りくゝに占領されて居た——では、怖氣た、狂氣のやうになつた兵卒等が、自分等が何を爲て居るのか少しも知らずに、働いて居た。

間斷無き砲火や銃火の最中に於て、五六時間絶え間無しに、露西亞人と佛蘭西人、歩兵や、騎兵が、交り交りその地點を取つた、彼等は其所へ突進し、倒れ、射撃し、接戦し、相互に相手を何うして宜いか分らず、絶叫し、そして、再逃げ歸つた。

戦場からは、副官等が、元帥等からの戦鬪の経過に關する報告を持つて、絶えずナポレオンのところへ駈

けて来て居た。が、さういふ報告は何れも此も、當になら無いものであつた、が、それは、戦の烈しさの最中では、或る極まつた利那に於ける状態を云ふことは不可能である爲めでもあり、又、副官等の多數は、一度も實際の戦場には達せず、單に他の者どもに聞いた事柄を繰り返すに過ぎ無かつた爲めでもあり、尙又副官がナポレオンのところへと二三露里を駈けて居るうちに、戦場の状態が變つて了まつて、彼が持つて行つた情報は最早虚になつて居た爲めでもあつたのだ。

さういふ風で、副官は、總督のところから、ボロディノオが取れて、カロオチャ川の橋が佛蘭西軍の手に落ちたといふ情報を以て、駈けて来た。副官は、ナポレオンに、軍隊は橋を越して宜いのか何うか、尋いた。ナポレオンの命令は、彼方側で陣形を整へて、待つて居ろといふのであつた、が、彼がその命令を與へたよりすつと前に、副官がボロディノオからホンの今出立つたばかりの時分に、ピエールが、その戦の始に於て加はつた小衝突に於て、露西亞人の手で、その橋は破壊されて、焼き棄てられたのであつた。

一人の副官が、蒼い、怖氣た顔で掩堡から駈けて来て、攻撃が撃退されて、コムパンは負傷し、ダヴウは殺されたといふ報告をナポレオンに齎した、而るに、それと同時に、掩堡は他の分團の手で取れて居て、ダヴウは、ホンの一寸とした擦り剥き傷を受けた外は、全く無事で、ピンくして居るのであつた。

斯ういふやうな已むを得ず人に間違を爲せる報告の上に、ナポレオンは、彼の命令を基かせたのであつたが、さういふ命令は大抵、彼がそれを發するより前に既に誰かの手で實行されて居たか、で無くば、決して全く實行され無かつたか、或は、實行され得無かつたか、孰かであつたのだ。

戦鬪の實地に近い所には居たが、尙且ナポレオンと同一じやうに、實際に戦鬪に加はつては居無いで、唯だ時々小銃の彈着距離内へ乗り込むきりであつた元帥や將官たちが、ナポレオンには尋かずに、方略を立て



て、何處から、何の方向へ、射撃しろとか、何處へ騎兵は駆けろとか、何處へ歩兵は突貫しろとか、命令を與へるのであつた。が、彼等の命令も亦、ナポレオンのと同様に、極く稀に、そして、極く僅な範圍に於て、實行されたのみであつた。

十中八九は、實際に起つた事件は、彼等が爲ると命令した事柄とは正反對のものであつた。進撃しろと命ぜられた兵卒等が、葡萄弾の砲火の下に自分等自身を見出して、逃げ戻つた。一地點に止まつて居れと命ぜられて居た兵卒等が、不意に露西亞人が自分等の前へ現はれたのを見て、逃げ去つた時もあり、又、その方へ突貫した時もあり、そして、騎兵が、命令を受けずに、逃げて行く露西亞兵を追撃した。

斯ういふ風で、騎兵の二個聯隊が、セミヨオノフスコエの低地を横断つて、駆けて、丘の頂上に達するや否や、振り返つて、驀地に再駆け戻つた。

歩兵も、同なじ風で、彼等が動けと命ぜられた方向とは正反對な方向へ動いたことが、時々あつた。

總ての決定、例へば、何時、何處へ、砲を動かすとか、何時、歩兵を射撃にやるとか、何時、露西亞の歩兵を踏み散らす爲めに騎兵を遣るとか——總てさういふ決定は、隊伍の裡に居る一番近い將校等に因つて、ナポレオンは愚か、ネエヤ、ダヴウヤ、ミュラアにさへ、少しも相談せずに、爲されたのであつた。さういふ將校たちは、命令を實行し無い爲めに、後で困難な位置に陥ることも、自分が總ての責任を負ふ爲めに、後で困つたことになることも、恐れはし無かつた、何故だといふと、戦の裡で、賭せられて居るものは、誰にと取つても一番貴重なもの——即ち、各自の生命であるからなのだ、で、或る時は、後部へ逃けることが安全であるかのやうに見え、又、或る時は、前方へ逃けることが安全であるかのやうに見えるし、それで、混戦の渦中にあるさういふ人々は、刹那々々の氣質次第で、行動したのであつた。

實際は、前方へ行つたり、再後方へ戻つたりするさういふ一切の行動は、軍隊の位置を進めもし無ければ又、それに何等の影響を及ぼさぬものであつたのだ。相互にやり合ふさういふ一切の殺倒は、何の害も爲無いものであつた、害、死、負傷は、それ等の人々が彼方此方と駆け廻つて居た廣々とした場所のあたり全體を飛んで居た砲弾や銃弾の所爲であつた。彼等が、その何の掩蔽も無い場所——その上を砲丸や銃弾が飛んで居た——の外へ出るや否や、上位の將校が、彼等に隊伍を整へさせ、總ての規律を恢復し、そして、その規律の勢力の下に、再彼等を砲銃火の下へ率ゐ戻した、それから再、死の恐怖の勢力の下に、彼等は一切の規律を失つて、群集のその時々衝動に従つて、彼方此方と烈しく飛び歩いたのであつた。

（三十四）

ナポレオンの將軍等、砲火の下その區域に近く居り、時には、その區域内へも騎り込んだダヴウ、ネエ、ミュラアは、その區域内へ幾度も隊伍の整々とした軍隊の非常な大團を率ゐて入つた。が、彼等のこれまでの總ての戦の時にあつたこと、は打つて變つて、敵が潰亂しつゝあるといふことを聞くどころか、味方の軍隊の規律ある幾つもの隊團が、規律の無い、狼狽した群集になつて、歸つて來るのであつた。

彼等はその群集を再整然たる隊伍に編成した、が、その兵數は、ドン／＼減つて行くのであつた。戦の眞中頃に、ミュラアは、援兵を請求する爲めに、ナポレオンの許へ、副官を遣つた。

ナポレオンは、堡壘の下に坐つて、パンチを飲んで居た、と、其所へ、ミュラアの副官が、彼の許へ駆けて來て、陛下が、今一分團を出して呉れ、ば、露西亞人は潰亂するからといふ使命を傳へた。

「援兵？」と、ナポレオンは、突慥に云つて、副官の言語が解ら無いかのやうに、ミュラアと同なじに、



黒い髪を、長い、風に飜るやうな捲髪に延して居た奇麗な、少年らしい副官を見詰めた。「なに、援兵だ」と、ナポレオンは、思った。「奴等は、露西亞軍の弱い、援助の無い一翼へ、最早我軍の半分を集中させて居るのに、それにまだ援兵が要るとは、一體何うした事なんだ」

「ネエブルス王に云へ」と、ナポレオンは、荒つほく云つて、「未だ正午にはならん、俺は、俺の將棋盤を瞭乎とは未だ見無いのだと。行つて宜しい」

長い捲髪の、奇麗な、少年らしい副官は、深い溜息を吐いた、そして、手を帽子へ舉げたまゝで、戦場へと、駆け歸つた。

ナポレオンは、起ち上つた、そして、コオランクウルとベルチエーを喚び出して、戦とは一向關係の無い事件を話し始めた。

ナポレオンの興を増し始めた談話の最中に、ベルチエーの眼は、幕僚を従へて、汗の流れて居る馬で、堡壘へと駆けて来る將官の方へ引き付けられた。

それはブリアルルであつた。馬から下りて、彼は、皇帝の傍へと急いで歩いた、そして、高い聲で、援兵が絶対に必要であることを遠慮無く説明し始めた。

彼は、皇帝が自分等に今一個分團を持たせて呉れさへすれば、露西亞軍は全滅するといふことを、自分の名譽に懸けて誓つた。

ナポレオンは肩を揺つた、そして、返答を爲すに、彼方此方と歩き續けた。ブリアルルは、聲高に、一生懸命に、自分の周圍に立つて居る皇帝附の將官たちと話し始めた。

「お前は氣が早い、ブリアルル」と、ナポレオンは、再ブリアルルの傍へ戻つて、云つた。「激戦中では随分間

違へ易いものだぞ。行つて、今一度見て、それから、又来いよ」

ブリアルルの後影が未だ見えて居るうちに、今一人傳騎が戦場の他の部分から駆け附けて來た。

「やア、今度は何だ？」と、ナポレオンは、度々談話の腰を折られるのにぢれた人の調子で云つた。

「陛下、公が……」と、副官は云ひ始めた。

「援兵を請ふのだらう？」と、ナポレオンは、憤然となつた身振りで、云つた。副官は肯定的に頭を下けた、そして、自分の使命を傳へやうと爲た、が、皇帝は後へ振り向いて二三歩歩み去つて、立ち止まり、そして、ベルチエーに向つて手招きした。

「豫備軍を出さにやアならん」と、彼は、一寸と手眞似を爲て、云つた。「誰を遣つたら宜からう、何う思ふね？」と、ナポレオンは、彼が後になつて呼んだ「俺が驚に爲てやつた鵝鳥の仔」のベルチエーに、尋いた。

「クラバレエドの分團、陛下」と、總ての分團、聯隊、大隊を、悉皆暗んじて居たベルチエーが、云つた。ナポレオンは、頷いて承認した。

副官は、クラバレエドの分團へと駆けて行つた。で、少し経つと、堡壘の後部に止まつて居た若い親兵が、動きたした。ナポレオンは、黙つて、その方を見詰めた。

「いや」と、彼は不意にベルチエーに云つて、「クラバレエドは遣れ無い。フリアン分團を遣れ」

クラバレエド分團よりフリアン分團を遣る方が別に利益があるといふのでも無いし、且クラバレエドを轉回させて、フリアンを遣るのは不便でもあり、又それでは時間が空費になるといふことに見易いことであつたに拘らず、その命令は實行された。ナポレオンが、前に、醫者がその所謂特效薬で自然の進行を妨げる



ことを、看破り、且それを非難したのは、傑かつたのだが、それで居ながら、彼は、自分が今自分の軍隊に對して爲て居ることは、その醫者の所業と同なじであることには、氣が付か無かつた。

フリアン分團は、他のものと同なじに、戦場の烟の裡へ見え無くなつて了まつた。副官等は依然、八方から駆けて來續けた、そして、誰も彼も、云ひ合はしたかのやうに、同なじことを云つた。誰も彼も、援兵を請うた、誰も彼も、露西亞人が、確乎踏み止まつて居て、地獄のやうな猛火を續けて居るので、佛蘭西軍は、その猛火の下にだん／＼消え去りつゝあると、云ふのであつた。

ナポレオンは、陣用椅子に掛けて、考慮に沈んで居た。所謂の名だゝる旅行好きの、モシユウ・ド・ボオセエは、早朝以來斷食であつた、で、皇帝に近寄つて、彼は、恭やしく、陛下に朝飯を勧めて見た。

「最早、御勝利の御祝詞を申しあげまして宜しからうと存じますが」と、彼は云つた。

ナポレオンは、頭を振つた。その否定は、勝利にのみ對するもので、朝飯に對するのでは無いのだと想像して、モシユウ・ド・ボオセエは、恭しく、朝飯が能き得る場合に、朝飯を食ふことを妨げる理由は、何處にも無いのだ、といふ冗談口をきいた。

「馬……」と、ナポレオンは、陰氣に云つて、ボオセエに背部を向けた。ボオセエは、同情と、遺憾と、歡喜の、聖僧のやうな微笑で、顔を晴々とさせながら、ゆらくした歩調で、他の將官たちのところへと退つて行つた。

ナポレオンは、これまで運の好かつた賭博者が、向ふ見ずに金錢を賭けて、何時も勝つて居た後で、彼が綿密に有らゆる偶發事項を考量し盡してやつた丁度その時に、不意に、思ひも掛けず、彼が自分の進路を考

へれば考へる程、自分の負になることがますます／＼確になつて來ることに、氣が付いた場合のやうな情け無い感情を経験しつゝあるのであつた。

兵卒等も同なじであつた、將官等も同なじであつた、同なじ準備であり、同なじ兵の配置であり、同なじ「簡潔で、道勁」な、宣言であつた。ナポレオン自身も同なじであつた——彼はそれを知つて居た、彼は、往時よりは今の方が、確に覺然經驗が増し、熱練が加はつて居たことを知つて居た。敵さへも、アウステルリッツや、フリードランドの時と同なじであつた。が、彼の手の抵抗し難い振りも、魔術の爲めに、パツタリその力を奪はれて了まつたやうに見えた。

何時も／＼成功に迎へられた往時からの兵の操縱の總て、即ち、一點への砲の集中、敵線を破る爲めの豫備軍の進撃「鐵の人」の騎兵突貫、總てさういふ方略は皆な用ゐられた、が、それで、勝利が確に得られぬどころでは無く、將官たちが殺されたとか、負傷したとか、援兵が必要であるとか、兵が潰亂しかけて居るとか、露西亞人は頑として退く氣色が無いとかいふ、同なじ情報に四方八方から、ドン／＼降るやうに來るのであつた。

從來は、二つ三つ命令が與へられ、二つ三つ言語が出されるといふと、元帥たちや、副官等が、大得意な顔で、祝詞を述べに駆け付けて來て、勝利の表徴として、全軍團の捕虜があり、旗や、鷲の旗が、束にする程獲られ、砲や彈藥が山ほど獲られたといふ報告を爲し、そして、ミユアが、敵の輜重を奪る爲めに騎兵を遣る許可を請うのであつた。ロディでも、マレンゴオでも、アルコオレでも、エナでも、アウステルリッツでも、ウァグラムでも、何處でも彼處でもさういふ風であつたのだ。が、今は、何だか奇異な事が、ナポレオンの軍の上に來りつゝあるのであつた。



掩堡が取れたといふ情報に拘らず、ナポレオンは、戦の状態が、前々の諸戦とは少しも同なで無いのを見た。彼は、自分が感じて居た事柄をば、自分の周囲に居た軍事に経験のある人々は又、感じて居るのを見た。誰の顔も皆沈み切つて居た、誰も彼も、相互に眼を避け合つて居た。起りつゝあつた事柄の意義を掴み得無かつたのは一人ボオセエのみであつた。

ナポレオンは、戦争に就ての彼の長い間の経験に依つて、ありと有ゆる手段を盡して、八時間努力した後で未だ成功し無い攻撃が一體何ういふことであるかといふことを、善く知つて居た。彼は、これが、殆ど敗軍に等しいものであること、ホンの偶然の機会が、今、この戦の危機一髪の場合に於て、彼自身及び彼の軍の覆滅になるかも知れぬことを知つて居た。

彼が、一度の勝利も得られ無かつた、二月の間旗一本、砲一門、軍團一つ、奪れ無かつた、この不思議な露西亞戦役の全體を心の裡で繰返した時に、彼が、彼の周囲の人々の顔に表はれた隠された陰氣の様子を見、露西亞人が、未だ踏み止まつて居るといふ報告を聞いた時に——うなされる夢の裡で経験されるやうな恐ろしい感が、彼を襲つた、そして、自分の破滅になるかも知れ無いと思はれるやうなさまざまの運の悪い偶發事項が、心に思ひ寄せられて来た。

露西亞人が、彼の左翼を襲ふかも知れず、彼の中央を破るかも知れず、流弾が彼を殺すことさへあるかも知れ無い。總てさういふことは有り得べきことであつた。前の諸戦では、彼は、成功の可能ばかりを考へたのであつた、今は、運の悪い偶發事項の非常な数が、彼の心へ出て来た、そして、彼はさういふものを悉皆豫期した。然り、それは、夢のなかで、誰か、自分に打ち掛つて来るので、腕を振り上げて、敵手を殴り倒すに違ひ無いと思ふやうな力で一撃するといふと、腕が襁褓のやうに、ダラリと下つて力無く落ちて、避け

難い死の恐怖が、爲方無しに身に襲つて来るといふやうな、うなされる夢のやうなものであつた。

露西亞人が佛蘭西軍の左翼を攻撃して居るといふ報知は、ナポレオンの心にさういふ凜然とする恐怖を起させた。彼は、堡壘の下で、腕を膝に置き、頭を手の間へ沈めて、陣用椅子の上に、黙つて掛けて居た。ベルチエーが、彼のところへ来て、戦情を確める爲めに、戦線を視察しては、何うだらうと、云つた。

『何だ？。何と云つたね？』と、ナポレオンは云つた。『左様、私の馬を持つて来るやうに云つて呉れ。彼は、馬に乗つて、セミオノフスコエへ騎つて行つた。』

徐々と晴れて行く烟の裡で、ナポレオンが騎り過ぎた平野全體に互つて、人間や、馬が、或は一つ、或は重なり合つて、血の溜のなかに、倒れて居た。斯様な恐ろしい光景、此様な狭い場所に其様な多数の死人の倒れて居るのは、ナポレオンも、彼の將官の誰も、未だ嘗て見たことは無かつた。十時間止間の無かつた砲の轟音は、耳を疲らし切つた、そして、光景に特別な性質（生きた繪に合した音楽のやうな）を與へた。

ナポレオンは、セミオノフスコエの高地へ騎り上つた、そして、烟を通して、彼は、見慣れぬ色の制服の兵卒の隊列を見た。彼等は露西亞人であつた。

露西亞人は、セミオノフスコエと、堡壘の後で、密集隊團になつて立つて居て、彼等の砲は、その全戦線に沿つて、絶え間の無い轟音と烟を續けて居た。それは戦では無かつた。それは、佛蘭西軍にも露西亞人にも、孰らにも何の益にも立た無い引延された戮殺であつた。

ナポレオンは、馬を控へて、そして、再深い物思に沈んだ。彼は、彼の前、彼の周囲に爲されつゝあつたその事柄、彼に依つて指揮され、彼の心次第で何うにでもなるものと、考へられて居たその事件、不成功の後で、こゝに始めて、餘計な、恐ろしいものとして、彼を驚かしたその事件を、最早止めることは能き無か



つた。

ナポレオンの傍へ乗り付けて来た將官の一人が、古親兵が、戦鬪に進んだら、何うだらうといふ意見をもち出した。直ぐ傍に立つて居たネエとベルチエーは、顔を見合せた、そして、この將官の亂暴な意見に對して、蔑視んだ笑顔を爲した。

ナポレオンは、頭を垂けて、黙つて、坐つて居た。

「佛蘭西から八百リイグ、私は、私の親兵を全滅させる氣は無い」と、彼は云つた、そして、馬を振り向けて、シエヴァアルディノへと騎り歸つた。

(三十五)

クツウゾフは、ピエールが朝彼を見たと同じ場所、白髪の頭を下げ、重い、肥つた身體をグダグダと沈ま、毛氈で被つた腰架に掛けて居た。彼は、一つも命令を出さ無かつた、そして、唯だ、彼に向つて建言された事柄に對して、自分の承諾を與へたり、或は、それを控へたり、して居たばかりであつた。

「左様、左様、さう爲て呉れ」と、彼は、さまざまの意見に對して、云ふのであつた。「左様左様、行つてね、そして、見て呉れ、君」と、彼は、時々、彼の近くに居た副官等に、次ぎ／＼に云ふのであつた、で無くば「否、さう爲ん方が宜い、少し待つて見やう」と、彼は、云ふのであつた。彼は、自分の所へ持つて来られる種々な報告を熱く聞いた、そして、命令が請はれると、それを與へた。が、彼は、報告を聞いて居る時も、云はれて居る言語の意義には何の興味も持つて居無いやうに見えた、それよりも、話し人の顔の表情、聲の調子のなかの何物か、より多く彼の注意を引いたやうであつた。長年の軍事上の經驗からして、彼は

一人の人が、死と奮闘して居る何萬といふ人々を指導することの能きもので無いことや、戦の運命なるものは、總司令官の命令だの、軍隊が置かれて居る場所だの、砲の數だの、死者の數だの、決せられるものでは無くして、それは、軍の精神と呼ばれて居るその眼にも見えず、手にも觸れぬ無形の力に因つて決せられるものであることを、知つて居て、そして、その事實を老巧の知慧で確乎認めて居た。で、彼は、その無形の力の後に隨き、彼の權力の及ぶ限り、その力を指導したのであつた。

クツウゾフの顔の大體の表情は、集中した、平穩の注意と、精力のそれであつて、艱然弱い老年の身體に打勝つて居るといふ態であつた。

十一時に、佛蘭西軍は、前にそれが奪つた掩堡から再追ひ拂はれて了まつた、けれども、バグラアチオンが負傷したといふ報告が来た。クツウゾフは唸つて、頭を振つた。

「公爵ピョートル・イヴァアニイチの所へ行つて、確なことを見て来て呉れ」と、彼は、副官の一人に云つた、それから、自分の後に立つて居たウルテンブルヒ公へ振り向いた。

「殿下は第一軍を指揮して頂きますまいか？」

公が出發した直ぐ後で——彼が未だ何うしてもセミヨオノフスコエに達した氣遣は無いと思はれるほど直ぐ後で——彼の副官が、もつと兵をクツウゾフに請ふ彼からの使命をもたらした。

クツウゾフは顔を顰めた、そして、ドフツウロフに第一軍の指揮を爲るやうにといふ命令を與へ、公には斯ういふ大切な時機に公が傍に居て呉れ無ければ何うにもなら無いことが分つたからと云ふので、歸つて来て呉れるやうにと、頼んだ。

ミュラアが捕虜になつたといふ報告が来て、總司令部附の人々が、クツウゾフに祝詞を云つた時に、クツ



ウゾフは微笑んだ。

「まア待ちなさい、諸君」と、彼は云つた。「戦が勝つて、ミュラアが捕虜になつたといふことは、別に異常なことでは無い。けれども、喜ぶのは、もう少し待つた方が宜い」。それでも、彼は軍にその報知を知らせる爲めに、副官を遣つた。

シチエルビイニンが、佛蘭西軍の爲めに掩堡も、セミヨオノフスコエも奪られたといふ報告を以つて、左翼から駈け付けて来た時に、クツウゾフは、悪い報知だといふことを、戦場の音や、シチエルビイニンの顔容で察して、自分の脚を伸す爲めかのやうに、起つて、シチエルビイニンの腕を撃つて、片側へ伴れて行つた。

「君、行つて」と、彼はエルモオロフに云つて、「何うにかならんか、見て来て呉れ」

クツウゾフは露西亞軍の陣地の中央であつたゴオルキイに居た。我軍の左翼に對する攻撃は幾度も撃退された。中央では、佛蘭西軍はボロディノオより先へは進ま無かつた。ウヴァーロフの騎兵が、左翼から佛蘭西軍を逃走させた。

三時に、佛蘭西軍の攻撃は止んだ。戰場から来た總ての人々、并に、自分の周圍に立つて居る人々の顔の面で、クツウゾフは、最高度にまで緊張された努力の表情を讀んだ。彼自身も戦の豫想外の成功に満足して居た。が、老人の體力はだんく弱つて居た。幾度も、倒れるかのやうに、頭が下がつた、そして、彼は眠つて了まつた。晝食が彼のところへ持つて來られた。

上級副官のウォルツォーゲン——戦争は國中へ廣がら無ければならんと云つて居たのを公爵アンドレーエが聞いた人、それから、バグラアチオンが非常に嫌つて居た人——が、クツウゾフが晝食を爲て居る最中に、

騎り附けて來た。ウォルツォーゲンは、左翼に於ける戦闘の経過を報告する爲めに、バルクレエド・トオリイのところから、來たのであつた。機敏なバルクレエド・トオリイは、負傷者の群集が逃げ歸るのを見、兵の隊伍の崩れたのを見、そして、その場合の有らゆる状況を考察して、戦は負けたのだと、決定した、で、さう報告する爲めに、總司令官の許へ自分の氣に入りの副官をよこしたのであつた。

クツウゾフは、一生懸命に炙雞雞肉を噛んで居た、そして、彼の眼は、ウォルツォーゲンをみると、少し氣の浮き立つたやうな表情で、見張られた。

半ば蔑視んだやうな微笑で、ウォルツォーゲンは、碌に帽子へ手を挙げもせず、無雜作にクツウゾフの傍へ歩いて來た。

彼は、殿下に對して、一種の態とらしい無作法な態度で、擧作ふのであつたが、それは、彼は、自分は非常に教育のある軍人であるから、この無用な老人クツウゾフを何れ程傑い者と思はうが、それは露西亞人に任せて置くのだが、自分自身は、自分の對手たるクツウゾフの價値で實際何様なものであるのか、熱く知り抜いて居るのだといふことを、見せやう爲めであつたのだ。「老爺」さん——ウォルツォーゲンの獨逸人連中は、クツウゾフのことを斯う云つて居た——「平氣で居やアがるわい」と、ウォルツォーゲンは思つた、で、クツウゾフの前の皿を嚴かしい顔で見ながら、彼は、老人にバルクレエからの使命と、自分の印象や意見を、報告し始めた。

「我軍の陣地の有らゆる肝要の地點は、敵の手に落ちました、敵を撃退することはできません、さうするだけの兵が無いからです。兵は逃げて居ます、けれども、それを止めやうが無いのです」と、彼は報告した。



クツウゾフは、嚙んで居るのをバツタリと止めて、自分に向つて話されて居た事柄が何のことだか一向解らぬかのやうに、呆れた風でウォルツォーゲンを見詰めた。ウォルツォーゲンは、老人の昂奮を認めて、微笑みながら云つた。

「私は、自分で見た事柄を、殿下に隠す権利は無いと思ふのです……軍は全然潰亂しました……」

「君は見たといふのか？。君は見たといふのか？……」と、クツウゾフは、叫んで、急に立ち上がった。ウォルツォーゲンの傍へ歩み寄つた。「何うして……君は左様なことが云へる……」と、打ちもかゝりさうな凄惨な権幕の手真似を爲し、呼吸を塞らせて、彼は叫んだ。「何うして、貴下、私に其様なことが云へるのですか？。君には何も解つて居ない。バルクレエ・ド・トオリイに、私からだ云つて、彼の人の報告は間違つて居る、總司令官たる私が、彼の人より餘程熱く戦の経過を知つて居るのだ、と云つて呉れ」

ウォルツォーゲンは、何か反論しやうと爲た、が、クツウゾフはそれを遮ぎつた。

「敵は左翼では撃退され、右翼では敗績した、貴下が若し見損なつたとしても、君自身に解つて居ない事柄を、私に話すことは止めて呉れ。何卒、將軍バルクレエのところへ歸つて、私が、明日佛蘭西軍を攻撃する斷乎とした決心で居ることを、彼の人に傳へて呉れ給へ」と、クツウゾフは言語荒く云つた。

衆皆黙つて居た、喘いで居る老將軍の重い息使ひの外何にも聞え無かつた。

「敵は有らゆる地點で撃退された、これは神のお庇護と、わが勇敢なる人々の功である。敵は敗北した、明日、吾々は、露西亞の聖なる國から奴を追ひ出してやる」と、クツウゾフは云つて、十字を切つた、で、不意に、彼は、湧き出て来た涙からの泣き聲を立てた。

ウォルツォーゲンは、肩を揺すり唇を突き出して、老人の高慢な頑冥に呆れながら、黙つて、歩み去つた。

「やア、来たね、我が勇士が」と、クツウゾフは、肥つた、奇麗な、黒い髪の將官が、丘腹を登つて来た時に、云つた。

それは、終日戦場の最も重要な部分で送つたラエーフスキイであつた。

ラエーフスキイは、兵が頑としてその陣地に踏み止まつて居て、佛蘭西軍は、その上攻撃を敢てし無いで居ることを、報告した。

クツウゾフは、その報告を聞いて了まふといふと、佛蘭西語で斯う云つた——「君は、或る人々のやうに吾々は退却し無ければならんとは、考へ無いのだね？」

「いや、何うしまして、閣下、勝敗の決し無い戦では、一番頑強であるものが、何時でも勝者なんであります」と、ラエーフスキイは答へた、「それで私の意見では……」

「カイサアロフ」と、クツウゾフは、自分の副官に聲を掛けて「坐つて、明日の命令を書いて呉れ。それから、お前は」と、彼は、今一人の副官に振り向き、「戦線を騎り廻つて、明日我軍は敵を攻撃することを、宣言して置いて呉れ」

クツウゾフがラエーフスキイに談話を爲し、そして、命令を口授して居るうちに、ウォルツォーゲンは、バルクレエの所から歸つて来た、そして、將軍バルクレエ・ド・トオリイは、元帥から與へられた命令を覺書にして貰ひ度いと云つて居ると、傳へた。

クツウゾフは、ウォルツォーゲンの方を見も返らずに、この文書にした命令——即ち、前總司令官が、實に用心深くも、それで以つて、自分の肩上にかゝるべき有ゆる責任を避ける爲めに取つて置き度いと思つた文書——を作製するやうに、副官に云ひ付けた。



で、全軍を通して、軍の元氣と稱ばれ、そして、戦争の主なる筋力を成して居る同なじ氣分を維持するところの、何とも云ひやうの無い、不可思議な連鎖に因つて、クツウゾフの言語や、次の日の戦に對する彼の命令が、瞬く間に、軍の一端から他端へと、傳へられたのであつた。

命令の語や、句は、それ等のものが連鎖の一番の極端に達した時分には、決して、元の通りのものでは無かつた。勿論、人々が、軍の一端から他端へと、次ぎくりに繰り返して行つて居た物語の中には、クツウゾフが實際云つたものに似て居る言語は一つも無かつた。が、彼の言語の意味は、何處へも廣がつた、何故だと云へば、それは、クツウゾフが云つたことは、惻かな考量の結果では無くして、總司令官の心の裡に深くそして又、有ゆる露西亞人の心の裡に深く、横はつて居たところの一つの感情から溢れ出たものであつたらぬのだ。

で、明日我軍が敵を攻撃するのだといふことを知り、軍の上官等から、自分等が信じ度いと思つて居たことの確めを聞いて、惚れ切つた、逡巡して居た人々が、慰藉を得て、再勇氣を恢復した。

(三十六)

公爵アンドレエーの聯隊は、豫備軍に入つて居たが、その豫備軍は、二時までは、砲の猛火の下に、セミオオノフスコエの後方で、全く何も爲すに駐止して居た。二時になる前に、最早その時までには、二百人以上を失つて居た聯隊は、セミオオノフスコエと高地堡壘との間の場所——その上では、その日何千とも知れぬ人が殺された、そして、今は、敵の砲の數百門から集中した砲火を注がれて居た場所——のなかの、踏み荒

された燕麦畑へと、進ませられた。

その地點を離れず、又、一度の一齊射撃も爲さずして、聯隊は、此所で又其兵數の今三分の一を失つた。前面では、特に右側では、砲が、決して晴れ無い畑の裡で轟き續けた、そして、前面の土地を全然隠してしまつて居た畑のその不可思議な領分から、速く鳴つて来る砲弾や、徐々と唸つて来る破裂弾が飛んで来た。時には、人々に息を吐く間隙を與へやうとするかのやうに、十五分間程の間引續いて、總ての砲弾と破裂弾が残らず彼等の頭上を飛び越して行つた、が、その次には、唯つた一分のうちに、聯隊の中から五六人が拂ひ去られて、人々は、始終、死人を引摺り除け、負傷者を擔ひ去るのに忙しかつた。

各の新たな打撃毎に、生存の機會は、未だ殺され無い人々に取つて、だんく少くなるのであつた。聯隊は、三百歩離れた二個の大隊に分たれて居た、が、それに拘らず、聯隊全體が同なじ氣分に支配されて居た。聯隊の人々は誰も彼も残らず同なじやうに、陰鬱で、黙つて居た。唯だホンの時々、隊伍の間に、談話聲がしたのみであつたが、その聲も、何かドシンと落る音と「擔架」といふ叫聲が聞える度毎に、パツタリ止むのであつた。

時の大部分、兵卒等は、將校たちの命令で、地板に坐つて居た。一人は、帽子を脱いで、丁寧にその敷を緩めて、それから、それを伸した、今一人は、手で干いた土を揉み崩して、それで銃劔を擦つた、又今一人は、自分の肩の吊紐の扣鈕の位置を變へて、それを締めた、と、又、他の一人は、自分の脚絆を解いて、再締め、それから、靴を取り代へた。

或る者は、勦かれて居た畑の土塊で小さい家を建てたり、刈り株の藁を編んだ。彼等は衆皆さういふ爲事に全く心を占領されて居るやうであつた。人々が殺ろされても、負傷しても、擔架が傍を徐々と通つても、



我軍の隊が退却しても、敵の非常な集團が烟の裡から見えて来ても、誰もさういふ状態を顧みるものは無かつた。

我軍の砲兵か、騎兵かが進撃するとか、我軍の歩兵が進むのが見えるとか、だと、奨励の言語が八方で聞えるのであつた。が、人々の注意を一番多く引いたのは、戦とは一向關係の無い全く離れた事件であつた、それは、宛然これ等の精神の緊張し切つた人々は、反つて、日常の生活の平凡な事件のうちに安慰を見出すかのやうであつた。

砲兵の一隊が、彼等の隊列の前を通つた。彈藥車の一つで、馬が引き綱へ足を搦ませた。

「やアい。引き馬を見ろやい……足を外して遣れよ。倒れるぜ……やアい。奴等にやア見え無えんだ……」。叫聲が、聯隊ちうの隊伍の中から起つた。

その次には、衆皆の注意が、何處から来たとも知れず、隊伍の前を、後尾を立て、忙がしさうに駆け廻つて居た小さい犬へと引きつけられた。不意に、砲彈がその近所に落ちた、と、犬は、キヤン／＼鳴いて、後尾を脚の間へ入れて、飛んで去つてしまつた。哄笑の轟と叫聲が、全聯隊から、鳴り渡つた。

が、斯ういふやうな氣晴しは、一分以上は續か無かつた、そして、人々は、死の恐怖は一瞬の間も緩まずに、八時間の間食物も無く、爲事も無しで、居たのであつた。で、衆皆の蒼い、瘦れた顔が、ますます蒼く、ますます瘦れて行くのであつた。

聯隊の他の誰も同なじやうに蒼く、瘦れた公爵アンドレーは、手を背後で組み合はせ、眼を地面に見据ゑて、燕麥畑の隣の牧場の裡を、一つの境界線から他のそれへと、彼方此方歩いて居た。命令を出す必要は少しも無く、又、彼の爲べきことは何にも無かつた。何も彼も自然に爲されたのであつた。死者は隊列の

後へ引き除けられ、負傷者は外へ移され、そして、隊列の空所が充たされた。誰か兵卒等が逃げたにしても、それは、直ぐ元の位置へ急いで歸つた。

最初のうちは、公爵アンドレーは、兵の元氣を維持し、自分自身から模範を示めすが、自分の義務だと思つて、隊伍の間を歩き廻つた。が、直きに、彼は、彼等に教へることの能きことは何にも無いのを感じた。彼の精力全體が、何の兵卒の精力全體とも同なじに、自分の位置の恐ろしいことを注視し無いやうにするこの方へ、知らず／＼向けられたのであつた。

彼は、脚を順々に引摺つて、草をがさ／＼させ、自分の靴を被つた塵埃を見詰めながら、牧場を歩き廻つた。それから、彼は、大股で歩きながら、牧場の中の草刈人の足跡の上を歩かゝしたり、又は、自分の歩數を勘定して、一露里にするには、一の境界の溝から他のそれへと幾度歩か無ければなら無いか、計算したり、又は、溝に生えて居たウームウッドの花を切つて、手でそれを揉み潰して、苦しい、強い香氣を嗅いだりした。

前日のさまざまな考想は、總てその痕跡も止め無かつた。彼は、全然何にも考へて居無かつた。彼は、懶氣に、何時も同なじであつた音、砲の轟音の上に聞える破裂彈の唸を聞き澄まし、第一大隊の人々の顔——それは、彼が最早飽き切つて見詰めて居た——を見て、そして、待つて居た。

「やア、来たぞ……此奴は再俺たちの方へ来るぞ」と、彼は、烟の領分から飛び出して来る何物かの唸を聞きながら、思つた。「一つ、又一つ。今一つ。落ちた……」

彼は、ピタリと止まつて、隊伍の方を見た。「いや、飛び越して行つた。が、彼奴は落ちたぞ」で、彼は、再彼方此方と歩き始めて、十六歩で、次の境界線へ達しやうと爲た。



ヒユウ、それから、ドシン。彼から五歩の所で、砲弾が地へ沈んで行くので、乾いた土が投げ上げられた。彼は、隊伍を見た。多分幾人か撃たれたのであらう。人々が第二大隊で一個所へ群れて居た。

「副官殿」と、彼は、叫んで、「一緒に集まらんやうに兵に云つて呉れ給へ」

副官は、この命令に従つて、公爵アンドレエーに近寄つて居た。他の側からは、大隊長の少佐が騎り付けて來つゝあつた。

「危ないぞ」と、一人の兵卒からの怖氣た叫聲が響き渡つた、そして、速い、ふるくと鳴る翼で地上へ下りて來る鳥のやうに、破裂彈が、少佐の馬の傍、公爵アンドレエーから二歩位の所へ、鈍いツシンといふ音で落ちた。

馬は、恐怖を見せるのが、善いか悪いかといふ問題などには一向構はず、ヒインと鳴いて、少佐を跳ね落さんばかりにして、後へ跳り上つて、駆け去つた。馬の恐怖は兵等にも傳染つた。

「伏せ」と、副官は叫んで、自分の身體を地板へ投げ倒した。

公爵アンドレエーは、決し兼ねて、立つて居た。破裂彈は、牧場と畑の間の溝の中のウオームウッドの株の傍で、公爵と伏して居る副官との間で、煙ながら、獨樂のやうにクルクル廻つて居た。

「これが死だらうかなア？」と、公爵アンドレエーは思ひ惑つて、全く今までに無い、悲しい感で、草を見、ウオームウッドを見、廻つて居る獨樂から巻き上がつて居る煙の絲を見て居た。

「俺は死ね無い、俺は死度く無い、俺はこの生命を愛する、俺はこの草、この土地、この空氣を愛する……」

彼は、さう思つた、そして、尙それと同時に、人々が自分を見て居ることを忘れ無かつた。

「見苦しいぞ、副官殿」と、彼は副官に云つた、「何ういふ……」

彼は云ひ終ら無かつた。同時に、陶器の微塵になるやうな、物の裂ける、碎ける音と、息を止めるやうな煙が、バツと出た、そして、公爵アンドレエーは、くるくると廻つて、刎ね飛ばされ、隻腕をはね上げて、うつむけに倒れた。

五六人の將校等が、彼の傍へ駆け寄つた。血の大きい汚染が、彼の腹の右側から、草の上へ広がつて居るのであつた。

民兵等が、將校等の後で、擔架を持つて立つて居た。公爵アンドレエーは、顔を草の裡へ埋めて、うつむけに倒れて居た、彼は未だ、苦しうな、歎かれた呼吸を爲て居た。

「おい、何んで待つてるんだ、來いよ」

農夫等は、傍へ行つて、彼の肩と脚を捉まへた、彼は、さも慄れな呻き聲を出した、で、農夫等は相互に顔を見合せて、再彼を下へ置いた。

「擔ぎ上ろ、擔架に入れろ、何方でも同なじなんだから」と、誰かが叫んだ。彼等は、肩を捉まへて、彼を持ち上げて、擔架に入れた。

「あゝ、やれく。やれく。何うしたんだ……」腹だね。では、到底駄目だ……「あゝ、やれく」と、いふ言語が、將校等の間で、聞えた。

「僕の耳許を擦つて行つたぜ」と、副官は云つて居た。

農夫等は、肩へ擔架を擔いで、自分等が今まで踏んで來た路を辿つて、救護所へと急いだ。

「歩を揃へろよ……おい……この農夫どもは」と、一人の將校が、彼等が、擔架をガタリくさせながら、



ヒコリ／＼歩いて行くところを、彼等の肩を捉まへて、怒號つた。

『歩を揃へろよ、フィオドル、おい』と、眞先の農夫が云つた。

『さうだ、一等だぞ』と、一番後のが云つて、歩を揃へた。

『閣下？。え、公爵？』と、駈け寄つて、擔架の上から覗き込んでティモフィンの振へ聲が云つた。

公爵アンドレーは、眼を開けた、そして、擔架——彼の頭はその裡へ落ち込んで居た——から、さう言つた人を見た、で、再眼瞼を閉ぢた。

民兵等は、運搬車と救護所の在つた森へ、公爵アンドレーを擔いで行つた。救護所は、白樺の森に張つた三つの天幕から成つて居た。森の裡には、負傷者運搬車と、馬が立つて居た。馬どもは、糧囊から燕麦を嚙んで居た、と、雀どもが、その傍へ飛んで来て、馬が落した穀粒を拾つて居た。幾つかの鳥が、血を嗅ぎ付けて、白樺の間を、彼方此方と飛んで、遽然しく鳴いて居た。

天幕の周圍、五エーカー以上に互つて、其所には、さまざまな服装の、血だらけになつた人々が、坐つたり、臥たり、して居た。

彼等は、擔架に隨いて來た氣の銷沈つて居るらしい、凝乎と光景を見て居る兵卒等の群集に取り圍かれて居た。將校等は、秩序を保たうと爲て、その兵卒等をその場所から追ひ拂ひ追ひ拂ひ爲た、が、それは、無益であつた。兵卒等は、將校等には一向構はず、擔架に凭りかゝつて立つて、この光景のうちで或る難解な問題を解かうとするかのやうに、自分等の眼の前にある物を、凝乎と見詰めて居た。天幕からは、高い、怒つた唸り聲や、怒れ氣な呻吟が、聞えて來た。時々、醫者の助手が、水を取りにと

か、次に擔ぎ込まるべき者を指す爲めとかに、駈け出て來た。天幕の傍で、順番の來るのを待つて居た負傷者等は、歎かれた唸聲や、呻吟聲を出し、泣き、怒號り、罵り、又は、露西亞酒を乞ひ求めて居た。五六人は、狂氣のやうに讒語を云つて居た。

公爵アンドレーは、聯隊長として、未だ手術を受け無い負傷者の間を擔いで行かれて、天幕の一つへ持つて行かれ、其所で、彼を擔いで行つた者どもは、命令を待つた。公爵アンドレーは、眼を開けた、で、長い間、自分の周圍で行なはれて居る事項が更に合點が行か無かつた。牧場の、ウームウッドだの、黒いぐるぐる廻る球だの、人生に對する愛の熱烈な急中が、心の裡へ、返つて來た。

彼から二歩程の所に、背の高い、奇麗な、黒髪の軍曹が、頭を纏帶されて、樹の枝に凭り掛かつて、立つて居た。その軍曹は、頭と脚に負傷して居たが、大聲で話を爲て居て、衆皆の注意を引き附けて居た。負傷者や、擔架卒の一群が、彼の周圍に集まつて、一生懸命に彼の言語に聞き入つて居た。

『俺たちは、眞個に奴を擲き付けたんだぜ、で、奴は何も彼も捨て、逃げちまやアがつたんだ、俺たちは、お前、王さへ捕虜にしちやつたんだ』と、軍曹は、熱病のあるやうにギラ／＼する黒い眼で、四邊を見廻して、怒號つて居た。『豫備軍さへ間に合つたらばな、お前、奴の生きてた印は断片一つだつて残るんぢやア無かつたんだ、何だつて、夫やア、全くのところ……』

公爵アンドレーは、話者の周圍に立つて居た人々の總てと同なじやうに、その軍曹を輝いた眼で見詰めて、そして、慰安の感を感じた。『だが、最早何うでも宜いことでは無いか？』と、彼は思つた。『彼の世に何ういふことがあるのだらう、此の世に何があつたのか？。何故、俺は生命を失ふのが可厭なのか？。この世には、俺には、前にも解ら無かつたし、今も依然解ら無い事柄があつたのだ』



「醫者の一人が、血だらけの胸當と、小さい、血だらけの手で、天幕から出て来たが、彼は、片方の手に、葉巻を、それも血に染んで了まは無いやうにと、親指と小指とでさも大切さうに抓んで居た。この醫者は、頭を擧げて、四邊を見廻した、が、それは、負傷者の列を越してであつた。彼は、少時休息し度いのであつたらしかつた。少時の間頭を右方から左方へと振り向けてから、再眼を下けた。

「宜しい、今直ぐ」と、彼は、公爵アンドレーエを指さした助手に答へて云つた、そして、擔架卒に彼を天幕の裡へ擔ぎ込ませた。

「呟き聲が、待つて居る負傷者の群集から起つた。

「彼の世でも、旨いことのあるのは、依然旦那衆だらうぜ」と、一人が云つた。

公爵アンドレーエは擔ぎ込まれた、そして、今の先、助手が、掃除して、洗つたばかりの卓子の上に置かれた。公爵は、天幕の裡に何ういふものがあつたのか、瞭乎とは見ることが能き無かつた。八方でする怒れ氣な唸聲と、自分の腰や、腹や、背部での扶ぐるやうな苦痛とが、彼の注意を攪き亂した。彼が自分の周囲で見た有らゆる物が、彼の眼には、裸の、血だらけな、人間の肉の唯だ一つの概括的印象に溶け込んで居た、そして、さういふ人間の肉が、低く張つた天幕全體に充滿て居るやうに見えた状態は、丁度、數週間前に、彼の暑い八月の日に、裸の人間の肉が、スモレエンスク海道の路傍の、汚い池に充滿て居たのと同様であつた。左様、それは同様な肉、同様な大砲の餌肉であつて、それを見ると、公爵アンドレーエの心には、慄然とした恐怖の感が起つたのであつたが、その感が、今彼が感じる心持を、豫告したものゝやうに思はれ

たのであつた。

天幕の裡には、卓子が三脚あつた。二個は塞がつて居た、第三のものへ、人々は、公爵アンドレーエを置いた。少時の間、彼は、他の二個の卓子でやられて居る事柄の、我からでは無い實見者として置いて置かれた。一番近い卓子の上に、一人の韃靼人が坐つて居たが、それは、その直ぐ傍に投げ落してあつた制服で見るといふと、何うも哥薩克聯隊の兵らしかつた。四人の兵卒が彼を捉まへて居た。眼鏡を掛けた醫者が、彼の鳶色の、筋骨の逞しい背部で、何か切斷て居た。

「ううん。ううん。ううん……」と、韃靼人は、宛然、豚の唸るやうな聲を出した、そして、不意に横平つたい、赤白い、日に焦けた顔を振り擧げ、白い齒を露出して、腕き、ピン／＼し始めて、甚い金切り聲の、長い、叫聲を出した。

今一つの卓子——その周圍には幾人かの人々が立つて居た——には、大きい、肥つた男が、頭を後反せて、仰向に臥て居た。その髪の色や、縮れ方や、その姿形が、公爵アンドレーエには奇異に見慣れたものであつた。

五六人の助手が、その男を捉まへてその胸を上から推し伏せて居た。白い、肉付の良い、一本の脚が、絶えず、速い、痙攣的な、ピク／＼した風で、動いて居た。この男は、身悶えをして、泣いたり、息をつまらせたりして居た。二人の醫者——一人は、顔が蒼くなつて振へて居た——が、黙つて、その男の今一つの、血だらけの脚を何うにかして居た。

韃靼人の方を了まつて、その上へ外套が掛けられるといふと、眼鏡の醫者は、手を拭きながら、公爵アンドレーエのところへ來た。



彼は、公爵アンドレーエーの顔を、ジロリと見て、急いで、彼方へ向いて。「衣服を脱がせろ。何故ぐづついで居るんだい？」と、彼は、助手を甚く怒號り付けた。

助手が、袖をたくし上げて、急いで公爵アンドレーエーの扣鈕を外し、彼の衣服を脱せた時に、極く小さい、極く往時の小児の時分のことが、公爵アンドレーエーの心へ戻つて来た。醫者は、傷のところへ顔を近く持つて来て、それに觸つて見て、深い溜息を吐いた。それから、彼は、誰かに向つて暗號を爲した。

それから、腹の裡の扶ぐるやうな苦痛が、公爵アンドレーエーに知覺を失はせた。彼が知覺を恢復した時には、彼の腰骨の折れ肩は取り去られ、醬のやうになつた肉の断片は断り去られて、傷は繃帯されて了まつて居た。

水が、彼の顔へ振り注けられた。公爵アンドレーエーが、眼を開くや否や、醫者は、彼の上へ顔を下けて、何にも云はずに、彼の唇に接吻し、そして、急いで去つて了まつた。

苦痛が、全く無くなつて了まふといふと、公爵アンドレーエーは、彼が最早長いこと覺えたことの無かつたやうな幸福な平和を感じた。

彼の生涯の一番良い、一番幸福な刹那、殊に、彼の極く小さい幼児の時分の、衣服を脱せられて、寢床へ入れられた時や、彼の乳母が見守り歌を詠つて寝かし付けて呉れた時や、彼が枕へ頭を埋めて、生きて居るといふ知覺のみで幸福に感じた時などのことが、過去のことどころか、宛然今現在のことででもあるかのやうに、彼の想像の前へ、立ち上つて来たのであつた。

醫者たちは、その頭が公爵アンドレーエーには何と無く見慣れたものやうに思はれ負傷者に、一生懸命に掛つて居た、彼等は、その男を抱きあげて、慰めやうと爲て居た。

「見せてください……ううう。お。ううう」といふ、その男の、嘔り泣きが間に挟まる、恐れた、見苦しく苦しんで居る呻吟が、公爵アンドレーエーに聞えた。

その男の呻吟を聞くと、公爵アンドレーエーは泣き度くなつた。自分が、光榮無しに斯ういふ風に死んで行くのであつた爲めなのか、或は、生命を失ふのが可厭であつた爲めなのか、或は決して再び歸つて来ない幼児の時分の記憶の爲めなのか、或は、自分が苦痛の裡にあつた爲めなのか、或は、他の人々が堪へて居るのに、その男がそれ程慄れ氣に呻いて居た爲めなのか、公爵アンドレーエーは、幼児のやうな、善い、殆ど幸福な涙を泣き度かつたのであつた。

人々は、切斷された、靴のまゝの、全體に乾いた血のこびり付いて居る脚を、その負傷者に見せた。「お、お、おとお」と、彼は女のやうに嘔り泣いた。彼の傍に立つて居た醫者は、彼の顔へ物を被せて置いて、外へ去つて了まつた。

「やア。これは何うだ？。何うして、彼の男が此所に居るんだらう？」と、公爵アンドレーエーは怪しんだ。脚を今断られたばかりの、その慄れな、嘔り泣いて居る、見苦しい男に於て、公爵アンドレーエーは、アナトオル・クラアギンを認めたのであつた。人々が、抱き上げて、水の杯をさし付けて居るのだが、その振へる、膨れ上つた唇ではその杯の縁へ唇を付けて居ることの能き無いその男が、アナトオルであつたのだ。アナトオルは、嘔り泣く、ハア／＼いふ苦しきさうな呼吸使ひであつた。

「左様だ、彼の男だ、左様だ、彼の男は、何うにかいふ譯で、俺と、密接に、苦しい關係があるんだつたな」と、公爵アンドレーエーは、自分の前にある事柄には未だ十分合點が行かずに思つた。「彼の男と、俺の幼児の時分や、俺の生涯との間に、何様な關係があるのかな？」と、彼は、端緒を見出し得無いで、自ら問う



た。と、不意に、純潔と愛のその小兒のやうな世からの新な、思ひ掛の無かつた記憶が、公爵アンドレーエの前へ起つて来た。彼は、自分が千八百年に初めて舞踏會でナターシャを見た時の、ナターシャの、細りした頸と、細りした腕で、歡喜的な享樂に直ぐ没入しやうとして居るやうな、オドくした、嬉しさうな顔付をして居た姿を、憶ひ出した、と共に、ナターシャに對する戀と愛情が、今までよりも尙一層強く、尙一層懐かしく、公爵アンドレーエの心の裡へ、覺ざめて来た。彼は、今、膨れ上つた眼に満ちて居る涙の間から自分を愕然と見て居るこの男と、自分との間に存在して居た縁由を憶ひ出した。公爵アンドレーエは何も彼も憶ひ出した、そして、その苦しんで居る男に對する熱烈な憐愍と愛が、自分の幸福な心に満ちた。公爵アンドレーエは、最早堪へ切れ無かつた、で、同人類に對し、自分に對し、彼等の間違、自分自身の間違に對する涙を流した。

「吾々の同胞に對する、吾々を愛して呉れる人々に對する、同情、愛、吾々を憎む人々に對する愛、吾々の敵に對する愛、左様だ、神が地上で説き給うた愛、それをマリイが俺に教へやうと爲て居たんだ、俺には今まで解から無かつたんだが、それが、俺が生命を失ふのを悲む理由なんだ、俺が生きてれば、俺が爲べきことは、それより外には無いんだ。が、最早何うしたつて追つ付かん。俺にはそれが分つて居る」

(三十八)

死者や負傷者の倒れ重なつた戦場の戦慄すべき光景が、ナポレオンの頭の重いことや、彼が熱く知つて居た二十人ほどの將軍が死傷者の中に入つて居るといふ報知や、これ迄は強大であつた彼の軍の無効力であることに、加はつて、何時もは、それが自分の不撓の精神を證明するものだと想像して、死者や負傷者を見渡

すことが好きであつたナポレオンに、意外な印象を與へた。

その日は、戦場の恐しい光景が、彼が、偉大といふことの効能と證據だと見做して居たこの不撓の精神なるものを、壓倒してしまつた。彼は、急いで、戰場を去つて、シエヴァアルディノへ歸つた。黄色い、膨れた、氣の銷沈つた顔で、曇りした眼で、赤い鼻で、皺られた聲で、彼は、陣用椅子に坐つて、丘の下の方を見て、我知らず、砲火の音に聞き入つて居た。

弱々しい不安で、彼は、自分には最早止めることは能き無いに拘らず、自分がその主動者だと思つて居るこの戦鬪の終るのを待つて居た。個人的な、人間らしい情緒が、一寸の間、彼が随分長く奉仕して居た人生の人巧的な幻影に、勝を得た。彼は、自分が戰場で見た苦痛や死が、自分の場合にも有るものとして想像した。彼の頭や胸の重いことが、自分にも苦痛や死が有り得ることだと、憶ひ起させた。その刹那には、彼は、莫斯科に向つても、勝利に向つても或は又、榮譽に向つても、何等の憧憬を感じ無かつた。(その上の榮譽が彼に取つて、何の必要があつたらう?)。唯だ彼が今欲かつた一つの物は、靜息、安靜、及び自由であつた。

が、彼が、セミヨオノフスコエの高地に居た時に、砲兵の司令を掌どつて居る將校が、コニヤズゴヴァの前面の露西亞人に對する砲火を増す爲めに、數隊の砲兵をその高地へ持つて来ては、何うだらうと、ナポレオンに申し出た。ナポレオンは、承知して、その砲兵陣地の奏功の度合を報告して来るやうにといふ命令を出した。

副官が、皇帝の命令の通り、二百門の砲が露西亞人へ向けられたのだが、彼等は、依然陣地を守つて居ると、云ひに来た。

「我軍の砲火は、敵を將棋倒しに致して居ります、けれども、奴等は、頑として、退きません」と、副官が



云つた。

「奴等は、まだもつと欲しいといふのか」と、ナポレオンは鞞喰れた聲で、云つた。

「陛下？」と、その言語を聞き取り得無かつた副官が繰り返へした。

「奴等は、まだもつと欲しいといふのか」と、ナポレオンは、鞞喰れた濁み聲で、怒號つて、顔を擧めた。

「宜し、では、もつと遣つてやれ」  
 既に、彼からの命令を待たずに、彼が爲せやうとも思つて居無かつた事柄が、爲されつゝあつた、で、彼は、唯だ命令が彼から出ることが期待されて居るのだと思つた故のみで、さう爲ろといふ命令を出したに過ぎ無かつた。そこで、彼は、再、或る處の偉大の幻影の住まつて居る彼の元の人巧的な世界へと、戻つて行つた、そして、再（ぐる／＼廻つて居る輪に伴れて走つて居る馬が、自分から駆けて居るやうに想像するところがあるやうに）彼は、彼が爲すべく運命づけられて居た残酷な、陰氣な、面倒な、人道に逆つた役割を、從順に勤めることに立ち戻つたのであつた。

その時爲されつゝあつた總てのこの重荷が、その事件に與かつて居た他の有らゆる人々の上よりも、彼の上へ一番重く掛かつて居たこの人が心も良心も更に暗くなら無かつたのは、單にその時間、その時ばかりでは無かつた。彼の生涯の終末に至るまで、彼は、一度も、善とか、美とか、眞理とか、それから、彼がその意義を掴まんにには餘りに眞理と善に反し過ぎて居る、人間的な有らゆる物から餘りに離れ過ぎて居た彼自身が行爲の意義などの、最少量の領會さへ持つたことは無かつた。彼は、世界の半分までに因つて賞め上げられた自分自身の行爲を非認することは能き無かつた、で、彼は、眞理や、善や、人間的な有らゆる物を非認した。

屍や、残害された人々の、倒れ重なつて居る（それは、自分の意志から生じたものだ、彼は想像して居た）戦場を乗り廻りながら、さういふ死者や負傷者を眺めて、一人の佛蘭西人に對して幾人の露西亞人が倒れて居る割になつて居るか、勘定して、佛蘭西人一人に對して露西亞人五人だと信じて、喜びの材料を見出すやうに、彼が自分自身を欺いたのは、單にその日のみでは無かつた。戦場に五萬の屍體があつたが故に、「戦場は壯觀であつた」と、バリへ彼が書いて遣つたのは、單にその日のみでは無かつた。聖ヘレナに於てすら、自分が爲した偉大な功業の記述に、自分の閑時をことごとく用ふ積りだと彼が云つたその安寧な獨居に於てさへ、彼は、斯う書いて居る——

「露西亞戦争は、近代の最も人氣ある戦争であるべきであつた、それは、良い考慮の、眞の利害の戦争、總ての物の安寧と、安全との爲めの戦争であつた、それは、全く平和的な、保守的なものであつたのだ。

それは、大いなる主義、即ち、不安定の終末、安定の始まりの爲めの戦争であつた。總ての人々に取つての安寧と、繁榮で飽くまで満ちた新天地、新事業が、開展しつゝあつたのだ。歐羅巴の國際組織が立てられた、唯だその後は、それは組み立てさへすれば宜いのであつた。

さういふ大いなる諸點と、有ゆる場所の平和で、満足させられて、予も又、予の國際會議、予の聖同盟を、持つことが能きるのであつた。さういふ計畫は皆予の考案を盗んだものであつた。大帝王等のさういふ會議に於て、予等は、一家族のやうになつて、吾々相互の利害を討究し、番頭と主人とのやうに、各國の人民と交渉することが能きる筈であつたのだ。

歐羅巴は、直きに、さういふ風で、實際唯だ一つの人民となり、そして、歐羅巴を旅する誰でもは、何處



へ行つても、何時でも共通な祖國の裡に自身を見出すといふことになるべき筈であつた。さうなれば、予は有らゆる河を、總ての人々の航行の爲めに、開かせることにし、何處の海をも總ての人々の共有にし、それから、今日のやうな大常備軍を、其後は、唯だ諸帝王の親衛兵だけに、減じさせるのであつた。

佛蘭西、即ち、大いなる、強き、壯麗なる、平穩なる、光榮ある祖國の胸に歸つて、予は、その國境は決して變へるべからざるものと、宣言し、總ての將來の戦争は全然防衛的のものであるべく、總ての新たな侵害は、非國民的なものだ、と、宣言する筈であつた。予は、予の子息を帝國に加はらしめやうと思つて居た、予の執政たることは、それで終つて、彼の立憲的治世が始まる譯であつたのだ……

巴里は、世界の首都になつて、佛蘭西人が、諸國民の代表者になる筈であつた……

その時の、予の閑時及び予の老年は、皇后と一緒に、予の子息の王としての稽古中、全くの田舎者の夫婦のやうに、予等自身の馬で以つて、帝國の有らゆる隅を、ゆるくと訪問して、上訴を受け取り、害を正し、八方へ記念物や、恩恵を撒き布らすことに、委ねらるべき筈であつたのだ」

諸國民の刑手たる、陰氣な、奴隸的な役割を勤めるやうに、神の爲めに運命づけられて居た彼が、自分の行爲の動機は、諸國民の安寧を來たさうといふのであつて、彼は、何百萬とも知れぬ人々の運命を制御することが能き、自分の權力を振ふことに因つて、それ等の人々の繁榮を來たすことが能きものと、思つて居た。

「ヴィスツウラ河を越えた四十萬の兵のうちで」と、彼は、後になつて、露西亞戦争の事を書いて、「その

半分は墺地利人、普魯西人、素遜人、波蘭人、バヴァリア人、ウルテンベルヒ人、メクレンベルヒ人、西班牙人、伊太利人、ナポリ人であつた。實際さう呼んで然るべきであつた皇軍は、その三分の一が、和蘭人、白耳義人、フィンランドの住民、ピエモンド人、瑞西人、ゼネヴァ人、タスカニー人、羅馬人、第三十二軍管區の住民、ブレエメン、ハムブルヒの住民から成り立つて居た。それは、佛蘭西語を話す殆ど十四萬の人数に上つて居た。露西亞の遠征では、佛蘭西一國だけの損害は五萬人までは上ら無かつた。露西亞軍は、ヴィルナから莫斯科までの退却に於て、さまざまの戦に於て、佛蘭西軍に四倍するだけを失つた。莫斯科の火災に於て、森の裡で、凍えたり、飢たりして死んだ露西亞側の損害は十四萬人であつた、それから、最後に莫斯科からオデル川までの行進に於て、露西亞軍は又、季節の酷烈な爲めに苦しんだ、それは、ヴィルナに達した時には僅に五萬といふ數に過ぎず、カリッシでは、一萬八千以下であつた」

ナポレオンは、露西亞との戦争が全然自分の意志の結果であつたと想像したが、それで居て爲された事柄の戦慄すべきことが、彼の心に何の印象をも與へ無かつたのだ。彼は、大膽にもそのこと全體の全責任を自ら負つた、そして、彼の暗んだ智力は、死んだ何十萬といふ人々のうちで、ヘッス人や、バヴァリヤ人よりも、佛蘭西人が少かつたといふ事實のうちに、自分の云ひ分を見出したのであつた。

(三十九)

何萬かの人々が、ダヴィドフ家や、皇室の隷農の、持地であつた畑や牧場の上に、さまざまの姿勢や、制服で倒れて居たが、さういふ畑や牧場では、數百年の間、ボロディノオや、ゴオルキイや、シエヴァアルディノや、



セミオノフスコエの農夫等が、彼等の收穫を取り納れ、彼等の家畜を飼ひ來つたのであつた。各救護所では、その周圍二エーカーの間の草と地が、血で浸された。さまざまの武装の、傷いた、或は、傷を負は無い、人々の群集が、周章狼狽した顔付で、一方では、モザアイスクへ、他の一方では、ヴァルウエフへと、やう／＼と辿つて行つた。慥れ切つた。飢ゑた他の群集は、彼等の將校等に因つて、前方へと率ゐられて居た。尙他の者等は、未だ彼等の陣地に踏み止まつて、發火を續けて居た。最初は、朝の日光の裡で、キラ／＼する銃剣や、バツ／＼と出る煙が見えて、彼様に麗らかで、華やかであつた平原全體の上に、今は、濕つた霧や、煙の暗い雲がかぶさつて、硝石と血の、奇異な酸ばいやうな嗅氣が漂つて居た。

暴風雲が集まつた、そして、霏雨が、死者や、負傷者や、周章狼狽した、慥れ切つた、そして躊躇して居る兵卒等の上に落ちた。その雨は、『最早十分だ、十分だ、止めろ……考へて見ろ。お前たちの爲て居るのは何ういふことなのか？』と、云ふやうに見えた。

食及び休息の缺乏の爲めに雙方同様に慥れ切つて居た兩軍の人々には、自分等は、尙その上相互を屠殺し合ふことを續けて行つたものだらうか、何うだらうかといふ疑念が起つて來た、そして、誰の顔にも躊躇が見られ得た、誰の心にも同なじやうに、斯ういふ疑問が生じて來た、『何の爲めに、誰の爲めに、俺は殺したり、殺されたりするのか？。お前たちは誰でも殺せ、お前たちは爲度いことを爲ろ、が、俺は最早澤山だ』この考案が、夕方になると、誰の心にも同なじやうに、形を爲して來た。何時何時、それ等の人々は、自分等の爲つゝあつた事柄に戦慄して、何も彼も投げ捨て、何處へでも、逃げてしまはうかも知れ無いといふ態になつた。

が、戦の終末頃には、人々は、自分等の所業の實に戦慄すべき恐ろしさを十分に感じたのであつたが、それから、誰かが止めろと云へば彼等は喜んで止めるのではあつたが、それでも、何とも知れぬ、或る測り難い、不可思議な力が、依然彼等を前方へ導いた、そして、砲兵——元の三分の一だけが生き残つて居た——は、汗みづくになり、煙硝や血にまみれ、疲憊で喘ぎながら、尙且砲彈硝薬を以つて來て、裝め、覗らひ、そして、火繩を點けた、で、砲彈は、雙方から前と同じに速く殘酷に飛んで、人間の肉を粉塵し、そして、人間の意志では無く、人間及び宇宙を支配する神の意志で、爲されるのであつたその恐ろしい働を續けて居た。

露西亞軍の後衛に於ける混亂を見た人は誰でも、佛蘭西軍がもう一寸との努力を爲さへしたら、露西亞軍は全滅するのであつたと、云つたらう、それと共に、佛蘭西軍の後衛に於ける混亂を見た人は誰でも、露西亞軍がもう一寸との努力を爲さへしたら、佛蘭西軍は覆滅されるのであつたのだと、云つたらう。が、佛蘭西軍も、露西亞軍も、さういふ努力を爲無かつた、そして、戦の焔は、徐々と燃え盡きて了まつた。

露西亞人は佛蘭西人を攻撃して居るのでは無かつたのだから、この努力を爲無かつたのだ。戦の初期には彼等は誰だ莫斯科への路に立つて、佛蘭西軍の通り路を塞いだに過ぎ無かつた、で、彼等は、戦の終末に於ても、依然始期と同なじやうに立つて居た。けれども、若し、露西亞軍にして、佛蘭西軍を撃退する目的であつたとしたところで、彼等は、この最後の努力を爲ることは能き無かつたのだ、何故だといふと、露西亞軍の諸隊が悉く破られて居たからであつた、戦の中で大損害を受け無かつた隊は一つも無かつた、そして、露西亞軍は、その陣地から追ひ出されずに、軍の半分を失つたのであつた。



十五年間何處でも得て来た勝利の記憶のある佛蘭西人、ナポレオンの何物をも征服せざる無き天才に信頼して居る佛蘭西人、戦場の一部を陥れたといふ知覺を持って居る佛蘭西人、自分等の兵の四分一を失つたに過ぎ無いで、未だ二萬の一團——親兵は其儘をつくりして居る——を持つて居るといふ知覺のある佛蘭西人に取つては、この努力を爲るのは容易なことであつたらう。その陣地から追ひ拂はうといふ目的で露西亞軍を攻撃して居た佛蘭西軍はこの努力を爲すべき筈であつた、何故だといふと、露西亞人が戦の前のやうに依然莫斯科への路を塞いで居る限りは、佛蘭西軍の目的は達せられず、總ての損失と努力が無効に歸するからであつたのだ。

が、佛蘭西軍はその努力を爲無かつた。

或る歴史家たちは、若し、ナポレオンが彼の古親兵を進撃させさへしたのであつたら、戦は勝になつたのであつたのだと主張して居る。ナポレオンが、彼の親兵を進撃させたのであつたら、斯うなつたらうとか、彼様なつたらうとか、云ふのは、秋に春が来たならば、何うなつたらうとか、斯うなつたらうとか、云ふのと同一筆法の説なのだ。

左様なことは、有り得べき筈のことでは無いのだ。

ナポレオンがさう爲無かつたのは、彼がさう爲やうと思は無かつたからなのでは無く、さうすることが何うしても能き無かつたからなのだ。佛蘭西軍の、總ての將官、將校、兵卒が、軍の銷沈した意氣がさうすることを容るさ無かつたので、この最後の努力を爲ることは到底不可能だといふことを知つて居た。

強大なる腕が、力を失ふまでに打たれて了まつたといふ悪夢のやうな感を持つたのは、單りナポレオンのみでは無かつた、佛蘭西軍の總ての將官、兵卒、戦つた人々も、戦は無かつた人々も、前々の諸戦（今の努

力の十分一で何時でも敵が敗走したので）の経験があるのだから軍の半分を失ひながら、戦の終末に於てもその始期と、同なじ不撓な精神で、依然その陣地に踏み止まつて居るこの敵に對しては、慄然たる恐怖の感を表はしたのであつた。

攻撃軍たる佛蘭西軍の精神力は、盡きて了まつたのだ。

軍旗と稱する、棒の端へ附着けた襪襦とか、軍隊が立つて居た地面を、取ることで表はさるやうな勝利では無く、精神的の勝利、即ち敵をして、相手かたの精神上の優越と、自分の方の無能力を認めざるを得ざらしめるやうな勝利を、露西亞人は、ポロディノオで得たのだ。

佛蘭西の進入軍は、突進の際に致命傷を受けた猛獸のやうに、自分の最後の近いのを感じた。が、それは、露西亞軍——その力が半分減じて居た——が、退却せざるを得無かつたのと、全く同なじ譯で、止まることは能き無かつた。その妨碍後も、佛蘭西軍は、依然無理やりに莫斯科へ行くことは能きたが、其所では、露西亞軍の方からの新たな努力無しでも、その覆滅は避け難かつたのだ、それは、生命の血がポロディノオで與へられた致命傷から流れ去つたからであつたのだ。

ポロディノオの戦の直接の結果はナポレオンの、莫斯科からの原因無き逃避、彼のスモレンスク海道に因つての歸國、五十萬人の侵入軍の滅亡、ナポレオンの治世の覆没——それに對しては、ポロディノオで始めて、ナポレオンより強い精神の敵の手が着けられた——であつた。

戰爭と平和中卷終



大正十四年五月十七日印刷  
大正十四年五月二十日改版發行  
大正十五年十二月廿七日再版發行

著作權所有

編輯者兼  
發行者

國民文庫刊行會

右代表者

鶴田久作

印刷者

橫山幸七

印刷所

朝日印刷所

戰爭と平和中巻

〔非賣品〕

(岡山製本)

發行所

電話 神田五三五番  
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

東京市麹町區元國町二丁目九番地  
東京市本郷區西片町十番地



444  
83



終